



豊中市・沖縄市兄弟都市提携50周年記念



TOYONAKA CITY
豊中市

大阪府豊中市中桜塚3-1-1
☎ 06-6858-5050 (総合コールセンター)



OKINAWA CITY
沖縄市

沖縄県沖縄市仲宗根町26-1
☎ 098-939-1212



TOYONAKA

City



OKINAWA

City

豊中市・沖縄市兄弟都市提携50周年記念

豊中市と沖縄市は兄弟都市として50周年を迎えました。

いちゃりばちょーでー
出会えば兄弟
～ 友好の絆を次世代へ～

1964年（昭和39年）12月、木箱にぎっしり詰められた霊石と仏桑華（ハイビスカス）が豊中市に届きました。送り主はコザ市。現在の沖縄市です。霊石は、第二次世界大戦の激戦地である摩文仁海岸の小石に入魂したもの。豊中市に住む沖縄戦戦没者の遺族へ、形見代わりの贈り物でした。仏桑華の苗木は大切に育てられ、やがて鮮やかな花を咲かせます。——両市の交流の原点、それは平和への思いです。

1972年（昭和47年）5月15日、沖縄が本土に復帰し、1974年（昭和49年）4月1日にコザ市と美里村が合併して「沖縄市」が誕生。その年の11月3日、豊中市と沖縄市は「兄弟都市」を宣言しました。

あれから50年。現在は両市の行政間だけでなく、市民同士のさまざまな交流が広がっています。本誌はその半世紀の歩みを振り返り、後世に引き継ぐためのものです。単なる記念誌ではなく、兄弟都市の歴史を知り、今を見つめ、次の世代に伝える、いわば未来につなぐバトンです。両市の思いを、より多くの人に受け取ってほしいと願っています。そうして友好の絆がさらに広がれば、これほどうれしいことはありません。

兄弟都市宣言

「豊中市と沖縄市の友好は昭和39年沖縄市が第二次世界大戦の戦没者遺族のために、豊中市に霊石と仏桑華を送ったことにはじまる。

以来、両市は都市問題、教育文化の交流を重ね相互の理解と信頼を深めてきた。この歴史的背景のもとに、更に両市の友好と市民相互の交流を深め、市民福祉と平和を祈念してここに兄弟都市であることを宣言する。

昭和49年11月3日 豊中市長 下村輝雄 沖縄市長 町田宗徳

※「兄弟都市」であるのは、沖縄の「いちゃりばちょーでー（出会えば兄弟）」という言葉に由来していると言われています。

50th
Anniversary
Toyonaka City × Okinawa City

CONTENTS — 目次 —

03-04	豊中市・沖縄市の基本情報	41-50	沖縄市から学ぶ「平和」—基地の街の記憶を通して／ 大阪公立大学大学院文学研究科教授 山崎 孝史
05-12	LOOK BACK 50 YEARS ～現在から過去へとたどる50年の足跡～	51-56	座談会 第1部／歩みを振り返り、未来を考える。
13-14	両市長あいさつ	57-66	「コザ学校」から学ぶ ～兄弟都市交流に携わって～／ 元・豊中市副市長 田中 逸郎
15-22	「兄弟都市」豊中市との交流史／ 大阪大学大学院人文学研究科教授 北村 毅	67-72	座談会 第2部／今を見つめ、夢を語らう。
23-40	兄弟都市から生まれた交流 ●両市の友情が交流の礎に ●平和交流 ●阪神・淡路大震災への支援 ●青年会議所同士の交流 ●豊中まつり ●ピースフルラブ・ロックフェスティバル ●エイサーを通じた交流 ●兄弟都市提携40周年記念事業 ●40周年共同研究 ●修学旅行で沖縄の現在（いま）を知る ●兄弟都市提携50周年記念事業	73-76	未来へつなぐ 平和への思い
		77-94	兄弟都市提携50周年記念コメント&エッセー集
		95-96	兄弟都市交流年表と主な参考文献
		97-98	おわりに～未来への提言～

市の花、バラ



市の木、
キンモクセイ



1966年（昭和41年）に市制施行30周年を記念して一般公募し、市民による投票で決定しました。



1939年（昭和14年）制定。豊中の頭文字「ト」を4個組み合わせて「トヨ（豊）」ともし、全体の形を「中」と見立て、「豊中」としたものです。図案文字の突起は豊中市が四方八方に発展することを象徴しています。

88年目の豊中市。

兄弟都市提携50周年を迎えた2024年（令和6年）で、市制施行から88年目となる豊中市。大阪府の北部、兵庫県との府県境にあり、北摂と呼ばれるエリアに位置しています。36.6平方キロメートルの市域に約40万人が暮らすまちです。

豊中市の大きな特色として挙げられるのは交通利便性の高さでしょう。大阪の都心に隣接し、電車、モノレール、バスなどの公共交通機関が充実しています。高速道路や国道などの幹線道路も縦横に走り、北西部には大阪国際空港（伊丹空港）があります。そう、豊中市は「空港のあるまち」。兄弟たちがいる沖縄へ、ひとつ飛びです。

交通網が充実！



大阪国際空港、大阪モノレール、阪急電車、阪急バスなどの交通機関に加えて道路交通網も充実しています。

とよなか自慢

自然が、まちが、人が豊か！



大阪大学総合学術博物館所蔵

緑あふれる公園が点在し、市民のための多様な文化施設があり、そして市民の多彩な活動があります。

高校野球発祥の地！



高校アメフト、高校ラグビー、高校サッカー発祥の地でもあります。

関西圏の「住みたいまち」ランキング上位！



豊中市

TOYONAKA CITY



すごいワニ〜！

1936年（昭和11年）
10月15日、誕生。

豊中市

大阪府

〔市域〕
面積36.6km²
〔人口〕
2024年（令和6年）
9月1日現在398,019人
（男186,652人、女211,367人）、
181,153世帯

沖縄市

OKINAWA CITY

市民の花、
ハイビスカス



市民の木、
ビロウ



ハイビスカスは沖縄で最もポピュラーな花。ビロウはヤン科の常緑高木で、沖縄では庭木や街路樹として利用されています。



1974年（昭和49年）制定。沖縄市の「お」をデザインしたものです。3つの円をガッチリ組み合わせ、市民の調和、希望、平和を表しています。

50周年を迎えた沖縄市。

兄弟都市提携50周年を迎えた2024年（令和6年）に、市制施行50周年を迎えた沖縄市。沖縄本島の中央部から少し南に位置し、49.72平方キロメートルの市域に約14万人が暮らしています。1年を通して温暖で、平均気温は約22度。最も寒い2月でも10度以下になることはほとんどありません。

沖縄市といえばさまざまな特色がありますが、大きな特色の一つは、伝統芸能でしょう。大地を揺るがすかのような太鼓の音、天まで届きそうな三線の音色、指笛の響き。そう、沖縄市は「エイサーのまち」。沖縄市の音楽と芸能は今や「豊中まつり」の名物ともなっています。

〔市域〕
面積49.72km²

〔人口〕
2024年（令和6年）
9月1日現在141,769人
（男68,802人、女72,967人）、
67,302世帯

沖縄県

1974年（昭和49年）
4月1日、誕生。

沖縄市



エイ坊

イ〜市〜サ〜マ〜！

大自然が美しいね！



北部には嶽山原（たきやんばる）と呼ばれる豊かな森が、東海岸には干潟やマングローブ林が広がっています。

おきなわ自慢

異国情緒がいっぱいさあ！



コザゲート通りや中央パークアベニューには沖縄料理店に民謡酒場、バーやクラブなどが立ち並んでいてにぎわっています。

芸能や音楽が元気だよ！



2007年に「エイサーのまち」宣言をし、伝統文化の継承と発展に取り組んでいます。ロックやジャズが盛んな「音楽のまち」でもあります！



TOYONAKA CITY × OKINAWA CITY

LOOK BACK 50 YEARS

現在から過去へとたどる50年の足跡

豊中市と沖縄市の深い絆は、50年にわたる一つ一つの交流のたまものです。
現在から過去へ、その歴史を振り返ります。



ANNIVERSARY

50

周年

2024

令和6年11月

兄弟都市提携50周年

1974年(昭和49年)11月3日に兄弟都市宣言を行ってから、記念すべき50周年を迎えます(39・40ページ参照)。

2023

令和5年9月

第68回沖縄全島エイサーまつり

沖縄市で沖縄全島エイサーまつりが4年ぶりに開催されました。



2022

令和4年10月

エイサーin沖縄アリーナ2022

沖縄アリーナにて、沖縄全島エイサーまつりの代替イベントが開催されました。



8月

豊中まつり2022

有観客による豊中まつりが3年ぶりに復活しました。



2021-2020



令和3-2年

コロナ禍が
両市のまつりに影響

コロナ禍による豊中まつりはWEBで開催、沖縄全島エイサーまつりは中止となりました。

2019

令和元年11月

少年の像「合奏」が
リニューアル

沖縄こどもの国に設置している少年の像「合奏」が修復され、リニューアルしました。



2017

平成29年11月

両市消防隊員の
合同訓練

両市消防隊員が豊中市で合同訓練を行いました。



平成27年1月

第38回 沖縄市産業まつり
沖縄市産業まつりに豊中市PRブースが出演。



2014

平成26年11月

兄弟都市提携40周年

コザ・ミュージックタウン音市場にて、40周年記念式典・市民大交流会を実施（35・36ページ参照）。

ANNIVERSARY
40
周年



2008

平成20年7月

エイサーナイト2008

豊中エイサー「豊優会」が、コザ・ミュージックタウンの音楽広場でのエイサーナイトに出演しました。



1999

平成11年7月

ピースフルラブ・ロックフェスティバル

ピースフルラブ・ロックフェスティバルに豊中市からのバンドが出演しました（31・32ページ参照）。

平成8年8月

第44回 沖縄全島 エイサーまつり

沖縄全島エイサーまつりに本土のエイサー隊である「琉鼓会」が出演しました。



平成3年3月

豊中市でサッカー交流

沖縄市から少年サッカーチームが来豊し、地元チームと交歓。



2004

平成16年8月

兄弟都市提携30周年

30周年記念交流式典が豊中市民会館で行われました。

ANNIVERSARY
30
周年



平成10年8月

豊中ローズサウンドフェスティバル

沖縄市のピースフルラブ・ロックフェスティバル出演をかけたオーディションが、豊中まつりで始まりまし
た。翌年から豊中ピースフルラブ・ロックフェスティバ
ルに名称変更。

1998



3月

沖縄市でサッカー交流

豊中市から少年サッカーチームが来沖し、地元
チームと交歓。(写真は2002年3月のもの)



平成5年4月

豊中市から沖縄市役所新庁舎に 壁画贈呈

豊中市から城間喜宏作の壁画「曼荼羅観想宇宙之図」
が贈られ、沖縄市役所新庁舎ロビーに設置されました。



平成6年11月

1994

ANNIVERSARY

20

周年

1997

平成9年8月

新生・豊中まつり

「沖縄がやってくる」をキャッチコ
ピーに、新生・豊中まつりがス
タート(29・30ページ参照)。



1992

平成4年10月

沖縄市からシーサー像贈呈

沖縄市から宮城秀雄作の友好の「シーサー
像」が贈られ、豊中市役所玄関前に設置さ
れました。



8月

いきいき豊中まつり

沖縄市エイサー隊「久保田青年会」が演舞を
披露しました。



7月

青年会議所が姉妹締結

豊中青年会議所と沖縄青年会議所が、
姉妹JC(青年会議所)を締結しました
(28ページ参照)。



平成8年3月

豊中市職員友好の会より 桜の苗木寄贈

豊中市職員有志による「友好の会」
が桜の苗木を寄贈。翌1997年(平
成9年)、沖縄市の倉敷ダムに植樹さ
れました。(写真は2004年のもの)

1996



1995



平成7年1月

阪神・淡路大震災で 豊中市も被災

沖縄市より阪神・淡路大震災への
義援金、救援物資が寄せられまし
た(27ページ参照。写真は被災地
を視察する一行)。

1988



昭和63年8月

沖縄豊中青少年少女 合唱交歓演奏会

沖縄豊中青少年少女合唱交歓演奏会が、豊中市のアクア文化ホールで開催されました。

昭和59年7月

両市職員野球部が親善試合

両市の職員野球部が互いに訪問し、親善試合を行いました。

昭和59年11月
1984
ANNIVERSARY
10
周年



1983

昭和58年12月

沖縄市立図書館に 豊中市が本を寄贈

豊中市・市民が沖縄市立図書館に14,200冊の本を寄贈しました。

1980



昭和55年1月

沖縄市民会館落成記念 市民音楽祭

沖縄市民会館落成記念の市民音楽祭に、豊中市少年合奏団が出演しました。

昭和52年8月
沖縄市豊中市
青少年少女合唱交歓演奏会
両市の少年・少女たちが豊中市市民会館で
歌唱しました。



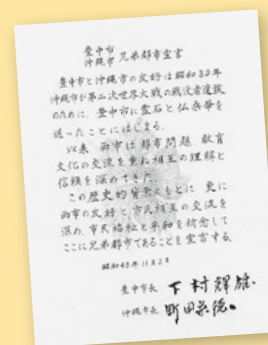
1977

昭和49年11月

兄弟都市を宣言

沖縄市誕生市民祭典で行われた兄弟都市宣言調印。
左は豊中市下村輝雄市長、右は沖縄市町田宗徳市長。

ANNIVERSARY
1974
START!



M E S

沖縄市との兄弟都市提携50周年を迎えられたことを大変喜ばしく思います。

豊中市と沖縄市は1964年(昭和39年)、竹内義治豊中市助役が大山朝常コザ市長と懇談したことがきっかけとなり、1974年(昭和49年)の兄弟都市宣言につながります。遠く1,000km以上も離れた両市が、50年の長きにわたりスポーツや文化などさまざまな分野で交流を積み重ねてまいりましたことは、お互いを「きょうだい」のように思いやり、固い絆を結んでこられた両市民をはじめ、関係者の皆さまのご尽力のたまものであり、深く敬意を表します。

1995年(平成7年)には、阪神・淡路大震災が本市を襲い、大阪府内で最大となる被害を受けた際、沖縄市や沖縄市民の皆さまから心温まる義援金や支援物資をいただき、まさに「きょうだい」のように寄り添ってくださったことが、

豊中市民の心にいつまでも残っています。

今日に至る交流の歴史の主役は、やはり両市の市民の皆さまです。豊中を代表する催し「豊中まつり」では、1997年(平成9年)に「沖縄がやってくる」と題して島唄や琉球舞踊など沖縄の文化を紹介し、それが今の沖縄音舞台につながっています。豊中まつりで初めて沖縄の文化に触れたという方も多いのではないのでしょうか。

そして、これからの未来を担う若い世代へ交流のバトンをつなげ、友好の絆を次世代に受け継いでまいります。今年から豊中市の中学生が修学旅行で沖縄市を訪れています。若い世代が出会い、交流を重ねることで、新しい関係が生まれ、両市の友好の絆がより深まることと期待しています。

いちゃりばちよーでー、出会えば兄弟。これからも友好の絆をつないでまいります。

豊中市長
長内 繁樹

S A G E

豊中市と沖縄市が兄弟都市提携50周年という節目を迎えられたこと、大変うれしく思います。

この50周年の歴史を振り返ると、両市の交流は旧コザ市時代までさかのぼります。

交流のきっかけは、大切な存在を失った悲しみや喪失感に寄り添い思いやる気持ちから、豊中市戦没者の遺族へ霊石と仏桑華(ハイビスカス)を贈ったことに端を発し、沖縄市が誕生した1974年(昭和49年)には、「兄弟都市宣言」に調印しました。沖縄市はこの50年、平和への思いを胸に豊中市と共に歩んでまいりました。

これまで両市は、さまざまな分野で交流を深めており、最初は、本土の行政について学ぶため、職員を豊中市に派遣しました。これはいつしか「豊中学校」と呼ばれるようになり、延べ100人以上の職員が豊中市に伺い、学んだこの「豊中学校」が、今の沖縄市の礎となっていま

す。快く受け入れていただき、深く感謝申し上げます。

また、当初は、行政間での交流が中心でしたが、今では、少年少女合奏団の交流から始まり、スポーツや音楽を通じた交流など、市民同士の交流が盛んに行われるようになりました。

この兄弟関係が育まれて、50回目の節目の年を迎えられたことは、交流に携わってこられた数多くの両市民の皆さまの存在があつてこそだと感じております。心より感謝申し上げます。

今回の記念誌刊行を契機にこれまでの歩みを振り返るとともに、交流事業をととして、兄弟の絆をより一層深め、次世代へつなげていきたいと考えております。

これからも「いちゃりばちよーでー」の精神を胸に、共に歩んでいきましょう。次の50年に向けて、豊中市と沖縄市の交流関係がますます発展していくことを祈念いたします。

沖縄市長
桑江 朝千夫

「兄弟都市」豊中市との交流史

北村 毅

大阪大学大学院人文学研究科教授

◎はじめに

霊石が結んだ半世紀

沖縄市は、国内4都市(大阪府豊中市、山形県米沢市、愛知県東海市、東京都町田市)、ならびに、海外1都市(米国レイクウッド市)と提携・友好関係にある。この五つの都市の中でも、最も長きにわたって関係を築いてきたのが豊中市である。

豊中市は、大阪府のベッドタウンとして40万近い人口を擁し、関西の空の玄関口である大阪国際空港(伊丹空港)の所在自治体の一つとして知られている¹。敗戦後から1950年代まで大阪国際空港が米軍基地「伊丹エアベース」として使用されていたことから、沖縄市と同様にそこは「基地の街」でもあった。

豊中市との交流の始まりはコザ市時代の1964年にまでさかのぼり、沖縄市が誕生した1974年の11月に市民福祉と平和を祈念して「兄弟都市」提携が結ばれ、現在へと至る。

「兄弟都市」とは豊中市との間に限った名称であるが、他の都市との関係において一般的な姉妹都市や友好都市という言葉が使われていることから、豊中市との間に何か特別な関係があることがうかがい知れるだろう。この名称は、「いちやりばちよーでー」

(出会えば兄弟)に由来するといわれるが²、はたして沖縄市と豊中市の間にどのような出会いがあったのだろうか？

両市の交流は、1964年、沖縄市から豊中市に石が贈られたことに始まる。その石は、「霊石」と呼ばれ、多くの人びとが数カ月に及ぶ地上戦の果てに命を落とした沖縄島(以下、本島)の南端で拾われたものであった。霊石をきっかけとして、両市は、50年以上にわたって交流を重ねてきたわけである。本稿では、霊石が結んだ豊中市との間の半世紀に及ぶ交流の歴史の一端を書き留めておきたい。

◎「霊石」とは何か？

まず、豊中市との交流の話に入る前に、霊石とは何か、同時代においてそれがどのような意味を有していたのか、説明しておきたい。

1959年に沖縄への渡航制限が緩和され、翌年4月に自由化された後、沖縄への観光客数は漸次増加していったとはいえ、1964年当時、沖縄を訪れる人びとは5万人余りに過ぎなかった³。2019年に過去最高を記録した約1,016万人⁴の沖縄県入域観光客数と比べると、その数はいかにも僅少である。当時「本土」から沖縄を訪れ

る人びとの目的は、今のようにリゾート観光が中心ではなく、遺族の慰霊巡拝、政治家・行政関係者などの視察、商用が主であった。

1964年の那覇市商工観光課の調査では、約4割の「外客」が沖縄への「来島目的」に「戦跡地参拝」を挙げている⁵。その多くが「本土」の遺族であったと考えられるが、彼らは「慰霊巡拝団」「遺族団」として集団で本島中南部の慰霊塔(慰霊碑)を巡り、現地の人びととの交流の中で戦死者の最期を知る手掛かりを得ようとした。そして、戦死者が亡くなった(と推定される)場所の近くにある慰霊塔・碑などで慰霊行為を行い、その周辺の石や土を拾って郷里へと持ち帰った(図1参照)。それらは、「霊石」や「霊土」と呼ばれた。

「本土」からの数十人規模の集団での戦跡巡拝は、1954年の北海道遺族団に端を発し⁶、その後日本遺族会や各県の慰霊巡拝団の来島が相次いだ。当時沖縄への船旅は経済的にも体力的にも負担が大きく、そのような機会に恵まれた遺族はほんの一握りであった。慰霊巡拝団の参加者は、

在郷の遺族の代理・代表として、戦死者の遺骨や遺品の収集を託され、それが叶わない場合、死没地の石や土を持ち帰ることを期待されていた。霊石という言葉には、死没地と郷里をつなぐ戦死者の魂の依り代としての意味が込められていたといえる。

1957年、そのような「本土」在住の数十万の遺族の思いに応えようと、沖縄で「沖縄の霊石を贈る運動」⁷が立ち上げられた。この運動を始めたのは、郵便友の会(現・PFC[青少年ペンフレンドクラブ])という全国組織の会員である沖縄の子どもたちであった。郵便友の会とは、文通での交流を通して、「平和」(Peace)と「友愛」(Friendship)と「教養」(Culture)を育むことを目的として、1949年に設立された団体⁸であり、中高生を中心に活発な運動を展開していた。沖縄でも1952年頃に同会の下部組織が作られ、途中活動が中断していた時期もあったようだが、1957年8月には沖縄連合が発足している。1957年の第9回全国大会では、4名の沖縄代表が参加し、「沖縄との交流を深める」ことが決議されている⁹。

そのような沖縄と「本土」の交流の一環として、1957年から1961年にかけて、沖縄の郵便友の会のメンバーが中心となり、本島南部の戦跡で累計7万個にも及ぶ霊石が収集され、那覇市の護国寺で「入魂式」が行われた後、「本土」の戦死者遺族に送られる運動が展開された¹⁰。沖縄と「本土」遺族との間の仲介役を担ったのが、大阪を中心に活動していた近畿地方郵便友



図1: 沖縄で「霊石」を拾う北海道の遺族 (1954年)
[鈴木龍一氏提供]

の会連合であり、大阪の四天王寺で「霊石追悼法要」を行った上で、全国各地の郵政局を通して遺族に霊石を送り届けた¹¹。「本土」の遺族は、霊石を「形見」や「霊のかわり」として受け取ったのである¹²。

霊石を「本土」へと送り届けたのは、郵便友の会だけではなかった。例えば、1958年に富山県で開催された国民体育大会(国体)では、沖縄選手団一行が霊石を持参して、同県の遺族に手渡している¹³。沖縄選手団による国体開催地への霊石持参は、1954年の北海道国体に始まるようだが¹⁴、当初あまり話題にはならなかったようである。1962年の岡山国体では、開催地からの依頼で拾い集められた岡山県の沖縄戦戦死者と同数の霊石が沖縄選手団に託された。この継続的な試みについて、『沖縄タイムス』の社説(1962年10月20日付)は、「沖縄と『本土』の人々を結ぶさなともなり、沖縄の国体参加に、また別の意義を加えている」と評価している。

他にも、靖国神社参拝団(1958年4月)¹⁵、沖縄PTA連合会(同年7月)¹⁶、ボーイスカウト(1960年9月)¹⁷などさまざまな団体や個人によって霊石が拾われ、「本土」に送り届けられた。その内の一人は、地元紙のインタビューに「私が送ってあげた霊石は、足を運べばできることだし、血のつながった同胞としてあたりまえのことをしたまで」と語っているが¹⁸、それは前掲の『沖縄タイムス』の社説の論調にもみられるように、霊石というメディアを介して「同胞」としての承認を求める運動としての性格を有していた。

1964年と65年には、沖縄から送られた霊石をもとに「本土」で二つの慰霊碑が建

立されている。一つは、64年8月、高野山に建立された沖縄戦戦没者供養塔であり、沖縄で採石された15トンの霊石が用いられた¹⁹。もう一つは、65年9月、札幌市に建立された沖縄戦英霊記念の碑であり、沖縄で収集された約4万個の「沖縄戦場の遺骨にかわる流血の小石」(同碑碑文)が礎石として使われた²⁰。

ここに挙げたのはほんの一例に過ぎないが、以上のように、郵便友の会の試みをきっかけとして、さまざまな団体や個人が「本土」に霊石を送る中で草の根の交流を展開していった。沖縄市と豊中市の交流もまた、このような同時代の流れの中で、霊石を送る運動から始まったのである。

◎「霊石」に始まる交流

1964年10月、当時の豊中市の竹内義治助役が、沖縄道路事情視察団の一員として沖縄を訪問した²¹。このとき竹内助役が、当時コザ市長であった大山朝常と懇談したのが、沖縄市と豊中市の最初の接点である。ちょうどその頃、大山の四男が豊中市にある大阪大学のキャンパスに在籍していたこともあって²²、豊中市との間に奇縁を感じていたようである。

両者の出会いの翌月、今度は大山市長が豊中市を視察に訪れた。大山は福祉施設や清掃工場などを視察した後で竹内と懇談したときに、竹内から以下のように語りがけられたという。

豊中市の遺族のなかにも沖縄で夫や子どもを失った人たちが多く。ほと

んどの人が遺品も満足にないありさま。記念になるものがあるとありがたいんだが…²³。

「記念になるもの」として大山の念頭に浮かんだのが霊石であった。大山自身、長男と次男と長女を沖縄戦で亡くし、遺骨すら還ることのなかった遺族の一人であり、子どもたちの亡くなった場所も命日も分からなかったため、「遺骨代わりに糸満市の海岸から小さな石ころを取ってきて骨がめに収め」た経験があった²⁴。同じ立場にある「本土」の遺族に対して共感があったことは想像に難くない。

視察から戻ってすぐに、大山は竹内の願いを叶えようと動き始める。1964年11月、沖縄戦没者慰霊奉賛会(現・沖縄県平和

祈念財団)の協力のもとで摩文仁の海岸で石が拾い集められ、30センチ四方の白木の箱に収められた²⁵。それらの石は、当時沖縄と関西を結んでいた貨客船「黒潮丸」で運ばれて海を渡り、翌月豊中市役所に到着し、市内の遺族のもとに伝達された。

はるばる沖縄から送られてきた霊石について、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、産経新聞といった全国紙の大阪版が12月9日付で報じている。『朝日新聞』が「遺族にとっては思いがけぬ、“クリスマスプレゼント”」と伝えているように、「本土」の沖縄戦遺族にとって、それは贈り物であった。

豊中市出身の沖縄戦戦死者は約150名を数えたが²⁶、遺骨や遺品が戻ってきた遺族はほとんどいなかった。「戦死公報だけで何ひとつ形見になるものはありません。霊石を頂いたら、あらためて供養したい」という豊中市の遺族の談話が『沖縄タイムス』に掲載されているが²⁷、霊石は、単なる石ころではなく、遺骨さえ還らなかった家族にとって亡き人の「形見」にはかならなかった。

コザ市から贈られたものは、霊石だけではなかった。後に沖縄市の「市民の花」となった仏桑花(ハイビスカス)も豊中市に届けられている。竹内が沖縄の南部戦跡に咲いているハイビスカスを見て、「まるで戦没者の血潮のようだ」「豊中市に住む沖縄戦没者の遺族にあげたい」と大山に話したことが契機となり、ハイビスカスの苗木が贈呈されることになった。20本の苗木は清掃工場の温室で「友情の花」として育てられ、高さ40センチにまで成長して真っ赤な花を咲かせ、豊中市の職員の間で話題を



図2:「摩文仁の霊石 豊中市の遺族へおくる」(『沖縄タイムス』1964年12月10日夕刊3面)

呼んだという²⁸。

◎「豊中学校」での職員研修

霊石が贈られた後も、沖縄市と豊中市の間の交流は終わることなく、幅広く展開していくことになる。1965年8月、コザ市の玉山憲栄助役が豊中市を訪れた際、豊中市の竹内助役から「特殊事情の沖縄で苦しいことが多いでしょう。私たちにできることがあれば、お手伝いしたい」と、職員研修の受け入れの提案がなされた²⁹。竹内は、前年に霊石が送られたときの記事でも、「沖縄の方々が精神面で苦労しておられるのを知り、これを機会に沖縄のために役立つことがあればすすんでやりたい」と発言している³⁰。

竹内は、大山の自著『大山朝常のあしあと』に寄稿した文章の中で、両市交流の契

機となった懇談会で大山と交わした会話を紹介している。

いろいろ懇談しているうちに大山さんは、「沖縄は米軍政府の管轄にあるので、本土とは行政的にも切離されていて、本土の事情が分かりにくい。市の職員も、沖縄島内の市町村間だけの交流では、お互いに参考とするものがなく(略)何とか、本土の先進都市の視察をさせ、勉強させようと思うが、軍政府は、それなら台湾、フィリピン、ハワイの都市へ行けというので困る。」と話していられた。／「それなら、豊中市へ寄こして下さい。うちの職員として、仕事をしてもらいながら、勉強させては、どうですか。／将来、沖縄が復帰したときを考えて、

今から、これに備えて、本土の制度などを研究させておくことは、後日必ず役に立つときがありますよ。是非両市でこの研修を実現させようではありませんか」と申し上げた(略)³¹。

豊中市からの提案は、研修の間、コザ市の職員を豊中市の職員として受け入れ、給与を支給し、宿泊場所も用意するという破格の条件であった。コザ市側が負担するのは、豊中市との間の往復交通費程度であった。コザ市は、それまで毎年数名の職員を市の負担で「本土」研修に送っていたが、1カ月の間「本土」各地の市町村を「視察」するもので、「本土」の行政現場のノウハウを持ち帰るのには限界があった³²。

豊中市への職員派遣は、コザ市行政の質的向上に大きく貢献することが予想され、早速、1965年12月、都市計画課の若手職員が豊中市へ送り込まれた³³。当初3カ月の研修期間を2カ月延長し、主に土地区画整理事業や都市計画の手法を学んだという³⁴。続いて企画室、水道課などの各部署から次々と職員が派遣された³⁵。

豊中市での研修の内容は、たびたび『コザ市報』で紹介されているが、窓口業務、清掃事業などでの他市町村との連携、都市計画、補助金制度と多岐にわたるものであった。

また、豊中市からも島岡総務部次長が2週間の滞在でコザ市を訪れ、事務処理の合理化などについて指導を行った。島岡は、地元紙の取材に「沖縄では機械化の面ではまだまだっていない」「豊中市では3年前に

中型電子計算機を購入し、事務のスピード化をはかっている」とコメントしているが³⁶、行政現場の技術格差が大きかったことがうかがえる。

豊中市におけるコザ市職員の研修は、やがて「豊中学校」と名付けられて定着し、1975年までに延べ約120人の「卒業生」を数えた³⁷。

◎絶え間ない交流

コザ市と豊中市の交流は、「豊中学校」に留まらず、市民レベルで広がりを見せていった。1970年には、園田青年会が日本万国博覧会(大阪万博)の「日本の祭り広場」に出場した際に、豊中市にも呼ばれてエイサーを披露した。当時「本土」で観る機会が少なかったエイサーは、「観衆に大きな感動を与え、非常に人気があった」という³⁸。

1974年に「兄弟都市」が宣言された後は、芸能や教育などの文化活動を通して、市民同士の交流が活発化する³⁹。一例として、沖縄市少年少女合唱団と豊中市少年



図4:1971年、豊中市から「友情のシンボル」として「少年の像」が贈られ、両市の関係者や児童生徒が見守る中で除幕式が行われた。現在も沖縄こどもの国で来園者を迎えている[1971年2月27日撮影、事務局所蔵]



図3:「豊中学校」での成果を紹介する記事(『コザ市報』1966年11月号、7頁)

合奏団との交流、非核平和・戦争資料展での資料提供、琉球國祭り太鼓やエイサー一行の訪問、豊中市新成人の親善派遣などが挙げられる⁴⁰。

1995年の阪神・淡路大震災後には、沖縄市や沖縄市民からの義援金や救援物資が豊中市に届けられ、被災した市民40人が沖縄市に招待された⁴¹。同年8月の「復興豊中まつり」では、演舞で豊中市民を勇気づけるために、エイサー隊が派遣されている⁴²。

1997年の「新生 豊中まつり」以降、沖縄市からの参加者がエイサーや琉球舞踊などの伝統芸能を紹介し、沖縄の物産展を開催することが恒例化して、今では豊中まつりに欠かせない存在である⁴³。豊中まつりでは、沖縄から多数のミュージシャンが出演する沖縄音舞台が設営され、翌年に沖縄市で開催されるピースフルラブ・ロックフェスティバルのオーデションも行われる⁴⁴。



図5:「少年の像」の寄贈を知らせる記事(『コザ市報』1971年4月号、1頁)

2014年には、兄弟都市提携から40周年を迎え、平和、教育、文化芸術、スポーツなどさまざまな分野で周年事業が実施された。同年7月には、沖縄市において中学生平和大使相互交流学习が実施され、両市の中学生が戦争や平和について意見を交わした。同年8月には、豊中市で沖縄市市民ミュージカル「コザ物語」が上演されている。同年11月に沖縄市で開催された記念式典には、それまで両市の交流に携わってきた関係者や市民など300人が出席した⁴⁵。

以上のように、沖縄市と豊中市の交流は、最初の出会いから半世紀を過ぎても途切れることなく、さらなる発展を予感させるものとなっている。その原点に霊石があり、文字通り、両市の交流の礎石となったことは間違いない。

- *****
- ※1 同空港は、豊中市、大阪府池田市、兵庫県伊丹市の3市にまたがる。
 - ※2 豊中市『豊中市・沖縄市 兄弟都市提携40周年事業報告書』2015年 1頁
 - ※3 琉球政府『観光要覧』1971年度 1972年 48頁
 - ※4 沖縄県文化観光スポーツ部 観光政策課「令和5年(暦年) 沖縄県入域観光客統計概況」(https://www.pref.okinawa.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/026/300/r5-rekinen-gaikyou-kakuteil.pdf)
 - ※5 村山絵美『「南部戦跡」の観光資源化に関する研究-沖縄戦の語られ方の変遷-』(「研究報告」編集委員会『旅の文化研究所 研究報告』第21号、旅の文化研究所、2011年) 35頁
 - ※6 北村毅「戦死者へと／の旅-沖縄戦跡巡礼における〈遺族のコミュニタス〉」(『人間科学研究』第18巻2号、早稲田大学人間科学学術院、2005年) 140頁
 - ※7 定まった名称はないが、当時の新聞では、他に「霊石運動」「霊石を送る運動」「霊石収集(拾集)運動」などと呼ばれていた。
 - ※8 「PFCの誕生」(<https://www.pfc.post.japanpost.jp/birth/index.html>)

- ※9 日本郵便友の会協会『郵便友の会25年のあゆみ』1974年 77頁・369頁・434頁
- ※10 注9同書 373頁
- ※11 「霊石に寄せるあたたかい波紋／全国から感謝を援助-来る彼岸に13年忌法要営む」『琉球新報』1958年2月3日／「19日に『霊石大法要』 沖縄で収集の映画も上映」『琉球新報』1958年4月13日／「厳かに追悼法要／四天王寺で／本土に渡った沖縄の霊石」『琉球新報』同年4月24日
- ※12 「戦跡にかける橋／女学生が愛の奉仕／`霊石、ぜひこちらにも…、／肉親眠る地に遺族の願い」『沖縄タイムス』1958年6月26日
- ※13 「富山に霊石を抱いて(沖縄選手団総監督 喜屋武真栄)」『琉球新報』1958年10月29日
- ※14 「国体と遺族をなぐさめる霊石」『沖縄タイムス』1962年10月20日
- ※15 「春の靖国に出発／5歳の坊やも社頭対面／阿波根さんが霊石携え上京」『琉球新報』1958年4月15日
- ※16 「北海道に霊石おくる／PTA代表が遺族の手へ」『沖縄タイムス』1958年7月13日
- ※17 「ボーイ・スカウトの善意実る／大阪の遺児に霊石／『沖縄戦史』の取りもつ縁で」『沖縄タイムス』1960年9月16日
- ※18 「秋田で恩がえしの`声援、／国体選手団待つ高島さん／北と南を結ぶ『霊石』／嘉数さんへ／うれしい便り」『沖縄タイムス』1961年9月4日
- ※19 「高野山に霊石送り出す／沖縄戦没者供養塔前に散布」『琉球新報』1964年7月15日
- ※20 「霊石4万個を送る／北海道／沖縄戦遺族の要望で」『沖縄タイムス』1964年4月26日
- ※21 竹内義治「大山朝常先生と壺」(『大山朝常のあしあと』(大山伝記編集協力委員会、1977年) 673頁
- ※22 大山朝常『愛ひとすじに：大山光伝』ニライ社 1990年 201頁
- ※23 「沖縄から霊石／さっそく遺族へ贈る／豊中」『朝日新聞(大阪)』1964年12月9日
- ※24 大山朝常「日本青年学生沖縄県戦没者遺骨収集团(沖戦遺)の結成によせて」(沖縄県師範学校龍潭同窓会編『傷魂を刻む：わが戦争体験記』龍潭同窓会、1986年) 582～583頁
- ※25 「摩文仁の霊石／豊中市の遺族へおくる」『沖縄タイムス』1964年12月10日

- ※26 注23に同じ。なお、「平和の礎」には、2,339人(2016年6月現在)の大阪府出身者が刻銘されている。
- ※27 注25に同じ
- ※28 「友情の花真赤に／仏桑華の咲く豊中市」『沖縄タイムス』1966年2月14日
- ※29 「コザ市役所吏員を毎年招く／豊中市／大阪から朗報／霊石の世話のお礼に」『琉球新報』1965年10月14日
- ※30 注25に同じ
- ※31 注21同書 673頁
- ※32 注29に同じ
- ※33 「友情の職員研修／霊石が縁結び／コザと豊中市」『沖縄タイムス』1966年1月22日
- ※34 「豊中便り／スケールの大きい都市計画を／幸地君『自治大阪』にインタビュー」『コザ市報』1966年3月号 7頁
- ※35 太田守昭「豊中市での研修を終えて」『コザ市報』1966年5月号 5頁。仲宗根孝市「豊中市での研修を終えて」『コザ市報』1966年11月号 7頁
- ※36 「事務処理の簡素化を／島岡大阪府豊中企画課長／コザ市職員に指導」『沖縄タイムス』1966年11月8日
- ※37 「トヨナカ×オキナワ／市民交流、広がる」(政策企画部広報広聴課編『広報とよなか』豊中市、2014年11月号) 5頁
- ※38 沖縄全島エイサーまつり実行委員会『エイサー360度-歴史と現在-』(沖縄市企画部平和文化振興課、1998年) 105～106頁
- ※39 沖縄市『沖縄市市制施行40周年記念誌』11頁
- ※40 「沖縄兄弟都市交流について」(<https://www.city.toyonaka.osaka.jp/joho/shoukai/miryoku/okinawa/index.html>)
- ※41 豊中市『新修 豊中市史』第7巻 民俗 2003年 718頁
- ※42 「沖縄兄弟都市提携のいきさつと交流」(<https://www.city.toyonaka.osaka.jp/joho/shoukai/miryoku/okinawa/ikisatsutokouryu.html>)
- ※43 注41同書に同じ
- ※44 「兄弟都市提携の経緯」(<https://www.city.okinawa.okinawa.jp/k034/shiseijouhou/gaiyou/shimaitoshi/3698.html>)
- ※45 注2同書 8頁

筆者：北村 毅

1973年、北海道生まれ。早稲田大学琉球・沖縄研究所客員准教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て現職。専門は、文化人類学・民俗学。著書に、『死者たちの戦後誌：沖縄戦跡をめぐる人びとの記憶』(御茶の水書房、2009年)などがある。



“兄弟都市から生まれた交流”

両市の交流は、兄弟都市を宣言する前から今日まで60年の歴史がある。

市の広報誌や関係者の著書、新聞記事などをひもとくと、その厚みを物語る数々のエピソードが残されている。そのいくつかを紹介しよう。

INTERACTION

交流の歩みを振り返る

両市の友情が交流の礎に

出会いは60年前、沖縄で

1964年（昭和39年）10月、大阪府道路協会の沖縄道路事情調査団が沖縄を訪問した際、沖縄の市町村長との懇談会が那覇市で催された。その席で、コザ市の大山朝常市長と、調査団に参加していた豊中市の竹内義治助役（1966年（昭和41年）5月から市長）が出会い、その後の交流につながっていく。当時、大山市長の息子が大阪大学に在籍し豊中市に住んでいたことが、2人を結びきっかけとなった。

懇談する中で大山市長は、アメリカ軍政府の管轄下にある沖縄は本土の事情が分かりにくく、何とか職員に本土の都市を視察させ勉強させたいが、軍政府はそれなら台湾やフィリピン、ハワイの都市へ行けというので困ると話した。それを聞いた竹内助役は、豊中市に来て職員として仕事をしながら勉強してはと提案し、両市で実現させようと話が弾んだ。

沖縄戦遺族への贈り物

その翌月、大山市長は豊中市を視察に訪れる。竹内助役は、沖縄の摩文仁を訪れた時に見た仏桑華（ハイビスカス）の赤い花が、激戦地で散った兵士の血潮を連想させ強く胸を打たれたことを語り、豊中市には沖縄戦の遺族も

多いがほとんどの人は遺品も満足にない状況であることを話した。形見になるものを送ってほしいという頼みを受け、大山市長は1964年12月、摩文仁海岸の小石に入魂した「霊石」を豊中市に送り届ける。仏桑華の苗木20本も添えられていた。



木箱にぎっしりと詰められた「霊石」
（1964年12月8日）

苗木は温室で育てられ、1966年（昭和41年）2月に初めて花を開く。沖縄を訪問する職員にその写真と竹内助役の手紙を託し、遺族に分けると伝えたところ、大山市長から、多くの遺族にと、さらに120本の苗木が贈られ、職員が持ち帰った。



温室で見事に花開いた仏桑華
（第二清掃工場、1966年2月11日）

学び合い、友好を深める

コザ市職員の研修については、コザ市の玉山憲栄助役が豊中を訪れて竹内助役と懇談し、調整が進められた。1965年（昭和40年）12月に最初の職員が派遣された。6か月間、都市計画事業に携わり、以降、毎年数人ずつ豊中に滞在して実務を学んだ。やがて琉球古典舞踊を披露したり、豊中特産の夏菊とイチゴの苗をコザの試験農場に贈ったりするなど交流が広がっていく。豊中市からも職員

がコザ市を訪れ実情を学び合った。いつしかこの研修はコザ市職員の間で「豊中学校」と呼ばれるようになっていく。当時の広報誌では、1967年（昭和42年）に「コザ市と豊中市は姉妹都市以上の関係」との竹内市長の談話があり、1970年（昭和45年）には両市を「兄弟都市」と紹介する記事も見られるようになった。

子どもたちの明るい未来を願う

1970年8月、日本万国博覧会の“沖縄デー”にコザ市の園田青年会が出演するのに合わせ、豊中まつりへの特別出演が実現した。その打ち合わせに訪れたコザ市職員から5月に「沖縄こどもの国」が開園し、整備が進められていることを聞き、豊中から記念に子どもの像を贈ろうと、豊中商工会議所、市民団体8団体と市が協力して募金運動を始めた。制作は彫刻家・吉田勲示さんに依頼し、指揮に合わせて横笛とハーモニカを演奏する3人の少年の像「合奏」が完成。1971年（昭和46年）2月、両市の関係者やコザ市の小・中学生300人余りが見守る中、除幕式が行われた。

その日、大山市長は涙を流していたという。大山市長は沖縄戦で息子2人と娘1人を亡くしており、贈られた像が偶然にも少年2人と少女1人の像であった。その姿は竹内市長の心に深く刻まれ、後年の著作にこの経緯が記されている。



園田青年会が豊中まつりで
エイサー演舞（市民会館、1970年8月22日）

「兄弟都市」を正式に宣言

1972年（昭和47年）に沖縄が本土に復帰し、コザ市は1974年（昭和49年）4月に美里村と合併して沖縄市となる。これを最後に大山市長は5月に退任、くしくも同時期に竹内市長も退任した。

沖縄市の誕生を機に正式に兄弟都市の提携を結ぶこととし、同年11月3日、沖縄市誕生市民祭典の場で町田宗徳沖縄市長と下村輝雄豊中市長が「兄弟都市宣言」に調印した。

像の建立時に送られたメッセージ

「合奏」に寄せて 彫刻家 吉田 勲示 さん

沖縄は太平洋戦争の最も大きな犠牲を払った県であり、終戦後も占領地として数々の苦難を受け続けてきた県である。非戦闘員である多くの人々が非命に倒れた悲しい歴史として、ひめゆりの塔を始め多くの碑として残されている。私はその碑に対して涙する時、明日の沖縄の子どもたちの明るい未来を祈らずにはいられない。本土復帰を機として、本土と沖縄の子どもたちが仲良く手をつないで希望のある平和の国を建設してくれることを念じつつ、「合奏」の少年の像がその心の灯の一つとして役立てば幸いです。



完成した少年の像「合奏」を豊中の関係者にお披露目
（右から吉田さん、竹内市長、鈴木豊中商工会議所会頭、市民会館、1971年2月10日）

INTERACTION 2

平和を願う取り組みを積み重ねて

平和交流

両市が願う平和への思い

豊中市と沖縄市の兄弟都市提携は、
戦争の悲劇から生まれた
深い平和への願いに共鳴し始まった。



1986年「非核平和・戦争資料展」準備中の様子。
沖縄市、沖縄県平和祈念資料館の協力により開催

平和を願って始まった 都市間交流

両市の交流のきっかけとなったのは、沖縄戦で亡くなった方の遺族への霊石と仏桑華（ハイビスカス）の贈呈。その行為自体が平和への強い思いを感じる。また、1974年（昭和49年）11月3日に兄弟都市宣言が締結された際、その宣言書にも「市民福祉と平和を祈念して」という両市の明確な意志が記されている。50年にわたるこの交流は、こうした平和をめざす共通の願いに基づいた多様な交流を通じて発展してきた。



さまざまな平和交流

沖縄市が非核平和宣言を行った翌年、1986年（昭和61年）には、豊中市で「非核平和・戦争資料展」が開催された。1989年（平成元年）から1996年（平成8年）にかけては、新成人平和親善使節の交流が行われ、若い世代に平和の大切さを伝える活動が推進された。

さらに、1999年（平成11年）には平和・友好パネル展「沖縄戦から学ぶ」を豊中市庁舎で開催し、戦争の悲惨さを市民に伝える機会を提供。

2004年（平成16年）には、兄弟都市提携30周年を記念して「沖縄市平和資料展巡回展」が豊中市の各公民館で、「沖縄の平和とアメリカンスクール」展を人権まちづくりセンター（現在の人権平和センター豊中）で開催。2010年（平成22年）にも同施設で「沖縄戦と戦後復興」パネル展を開催した。

両市の絆の根底には、平和への強い思いがある。沖縄の「いちゃりばちょーでー（出会えば兄弟）」という言葉に由来する「兄弟都市」には、互いを思いやる、平和を希求する精神が込められている。

豊中市と沖縄市は、より若い世代への平和教育にも力を入れ、両市の子どもたちが相互に訪問し、平和について学び合う機会を設けてきた。2014年（平成26年）には沖縄市市民ミュージカル「コザ物語」を豊中市で公演し、同年中学生平和大使を両市で派遣。この交流は、両市の子どもたちに平和の尊さを伝える重要な役割を果たした（73・74ページ参照）。

50周年となる今年は、両市の高校生による「平和学習プロジェクト」を実施し、両市の若者が直接交流することで、平和意識の向上と相互理解を深めることを期待している（75・76ページ参照）。

未来へとつながる平和の絆

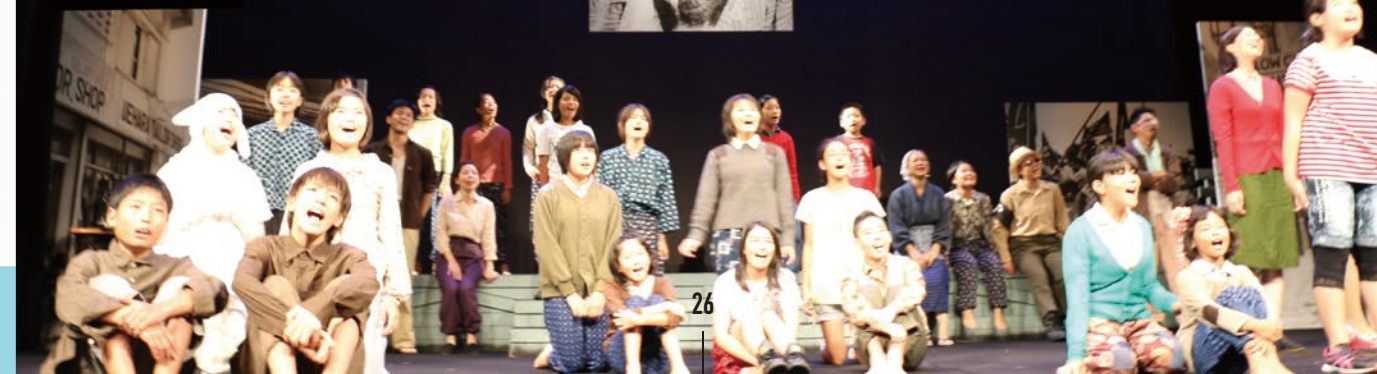
今後も、教育、文化、市民交流などあらゆる面で協力し、平和な社会の実現に向けて努力を重ねていく。両市の市民が平和について考え、議論する場を提供することで、草の根レベルでの平和意識の醸成に貢献し、未来へとつながる平和の絆をさらに強化していくことをめざす。

CHECK

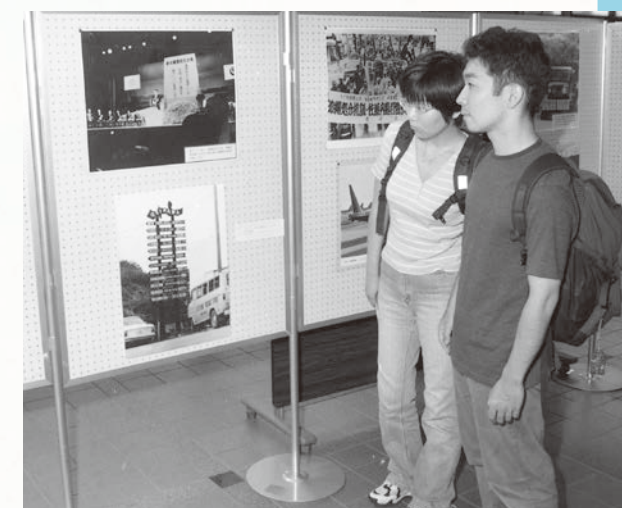
兄弟都市提携40周年記念 沖縄市市民ミュージカル「コザ物語」

終戦後のコザで、親を失い行くあてもない子どもたちに生涯をささげ、「沖縄社会福祉の母」と慕われた島マスさんをモデルに誕生したミュージカル。

出演者は、沖縄市の小中学生を含む44人で、この公演のため何カ月も練習を重ねた。大迫力の演出や、笑いあり涙ありの感動のステージが繰り広げられる中、盛況のうちに幕を閉じた。



兄弟都市から生まれた交流



1999年 平和・友好パネル展「沖縄戦から学ぶ」

INTERACTION 3

海を越えた復興の願い

阪神・淡路
大震災への
支援

沖縄市で広がる支援の輪

豊中市では大阪府内の市町村の中で最も甚大な被害が発生していた。多くの市民が避難所生活を送るなど、1日でも早い復興が願われる中、2日後には沖縄市から助役らが見舞いに駆け付け支援を申し出た。

沖縄市および市職員厚生会、市議会議員などから500万円を超える義援金と、約160kgの黒糖が贈られた。また、消防や水道局などの職員8人が支援隊として豊中市へ派遣され、現地で復興活動を行った。その支援の輪は市民へと広がり、沖縄市内各地でチャリティーイベントが開催され、その収益を義援金として豊中市へ贈ったのだ。

最終的には総額900万円を超える義援金と共に、多くのウチナーぬチムグクル（沖縄の真心）が届けられた。

未曾有の被災に
兄弟としての支援

1995年（平成7年）1月17日午前5時46分。
淡路島北部を震源とする
マグニチュード7.3の地震が発生した。
被害は豊中市にも及び、
多くの豊中市民が被災した。
海の向こうの沖縄市はその様子を知り、
兄弟都市の復興を願い動き出した。



1995年5月号の「広報おきなわ」。
豊中市支援チャリティーの
模様が紹介されている。



さまざまな形で支援を受け
取った豊中市は市職員有志
で「友好の会」を発足し、計
100本の桜の苗木を沖縄市へ
寄贈した。その桜は「友好の
桜」として沖縄市の倉敷ダム敷
地内に植樹された。

ヌチグスイツアーで沖縄市へ

4月21日、沖縄市で「阪神大震災豊中市被災者受入協議会」が発足した。被害を受けた豊中市民のため、無料で3泊4日の沖縄ツアーを企画し、招待したのだ。

そのツアーはヌチグスイ（命の薬）ツアーと銘打たれ、計40名の豊中市民が沖縄を訪れ、懇親会、エイサー、市歴史公演、市内散策などを楽しんだ。



1995年6月号の「広報おきなわ」。
ヌチグスイツアーについても紹介

支え合う兄弟都市は続く

国全体を揺るがす災害であった「阪神・淡路大震災」。大きな被害を出しながらもどうにか復興し、現在目に見える傷跡はほとんど残っていない。しかし、この沖縄市からの支援を豊中市は忘れない。

この日本において、地震や台風といった災害は避けては通れない。予想だにしない災厄が両市を襲う可能性は否定できないが、両市は頼りになる兄弟がいることを知っている。今後も互いに支え合い、困難を共に乗り越えていこう。

INTERACTION 4

若い市民間の交流を活かすに

青年会議所
同士の交流

始まった市民間交流

1964年（昭和39年）に霊石が贈られたことなどから始まった両市の交流。1974年（昭和49年）には兄弟都市となり、行政主導の交流は深まっていた。

そんな中、豊中青年会議所が設立20周年を迎えた1987年（昭和62年）。記念の絵画コンクールを開催し、最優秀賞となった10人の小学生を親善使節として沖縄市へ派遣した。その5年後の1992年（平成4年）には正式に姉妹JCとなり、青年会議所同士の交流がその後豊中まつりや少年サッカー交流などの多岐にわたる市民主導の交流につながっていった。

そして現在も「これまでの諸先輩方が作り上げてきていただいた歴史をつないでいく必要がある」という考えのもと、32年間絶やすことなく交流を続けている。

交流事業紹介

■ 姉妹締結20周年協働事業

いざ勝負！野球でオールスター対決

2012年（平成24年）8月4日

豊中市が高校野球発祥の地であることから、両市の中学生選抜による野球交流を豊中市ローズ球場で実施。両市の選抜チーム同士の対決を2試合、両市の混合チームによる対決を1試合行った。バーベキューパーティーなどでも親睦を深め、未来を担う子どもたち同士の絆や人の輪を深める取り組みとなった。



兄弟都市に続き、姉妹JC締結

一般社団法人豊中青年会議所と
一般社団法人沖縄青年会議所は
姉妹JC（青年会議所：Junior Chamber）を締結している。
1992年（平成4年）7月に姉妹JC締結調印式が行われ、
姉妹JCとして32年間、交流を続けている。



姉妹JC締結調印の様子

■ 姉妹締結30周年記念式典事業

～一度出会えばいちゃりばちゅーでー～

／ U-15バスケット交流 2022年（令和4年）11月20日

スポーツを通じた共同事業を行い、より強固で永続的な関係を構築し次世代へと継承していくため、沖縄市で両市の中学生選抜によるU-15バスケットボール交流を実施。また、沖縄アリーナで琉球ゴールデンキングス対滋賀レイクスの試合を観戦するなど交流を深めた。



INTERACTION 5

兄弟都市交流とともに

豊中まつり

ちよーで一たちの絆が芽生える場

豊中まつりは

「いちゃりばちよーで一（出会えば兄弟）」の言葉のように、多くの豊中市民と「沖縄」の出会いを生み出し、「きょうだい」の絆が芽生える場所となっている。

豊中まつりとは

「豊中まつり」は例年8月第1週の土曜日・日曜日（2024年（令和6年）は10月開催）に豊島（てしま）公園を中心に開催され、約20万人が来場する豊中市の市民祭りである。「豊中」まつりという名称だが、最も特徴的なのは兄弟都市である「沖縄」を大きく取り上げている点だろう。ステージでは沖縄にゆかりのあるアーティストのライブや、エイサーを筆頭とした沖縄の伝統芸能が披露されるなど、夏の暑さも相まってここは沖縄かというような錯覚を起こさせるほどの熱気を帯びた祭りである。また、多くの沖縄市民が見物や出店のために訪れる、都市間交流の場としても大きな役割を担っている。

2024年で57回を数えるほど長年市民に愛されていることから、祭りを通して沖縄市と豊中市が兄弟都市であることを知る市民も少なくない。

history

- 1951: 豊中まつりの前身である第1回豊中商工祭が開催
- 1968: 記念すべき第1回豊中まつりが開催。民謡踊りパレードに公民分館など23団体・約1,000人が参加した。
- 1972: 第5回豊中まつり。美術展や市民音楽の集いを開催するなど、規模を拡大
- 1980: 馬車のパレードやミニSLの乗車体験など、子ども向けイベントが充実
- 1992: 「いきいき豊中まつり」に名称を変更。市内各所で催しを開催する形式となった。
- 1995: 1月に阪神・淡路大震災が発生。中止も検討されたが、市民を元気に盛り上げるため開催。沖縄市よりエイサー隊も駆け付けた。
- 1997: 市民ボランティアが企画運営に関わる祭りに変化。沖縄を大きく取り上げ、開催場所を豊島公園周辺に移した。
- 1998: 「ピースフルラブ・ロックフェスティバル」出場をかけたオーディションが始まる。
- 2001: 市内で活動するNPOが店を並べる「市民活動ふれあい広場」が始まる。
- 2017: 記念すべき第50回豊中まつりが開催
- 2020・2021: コロナ禍によるWeb豊中まつりの開催
- 2022: 有観客による豊中まつりが復活。WEBまつりも同時に開催された。
- 2024: 兄弟都市提携50周年。開催時期を10月に変更

豊中まつりと沖縄市の出会い

豊中まつりが沖縄に注目し始めたのは1996年（平成8年）に豊中まつり検討委員会が設置され、「市民がつくる、市民のまつり」という「新生豊中まつり」をめざしたのがきっかけである（83ページ参照）。翌年に兄弟都市である沖縄市が本土復帰25周年を迎えることから、沖縄の伝統文化や生活文化の紹介を実施する運びとなった。

翌年の「豊中まつり'97」では「沖縄がやってくる」をテーマに、従来の内容に加え「ネーネーズのコンサート」や「沖縄屋台村」といった沖縄色を前面に打ち出し、バラエティーに富んだ祭りへと生まれ変わった。当初の予想をはるかに上回る大勢の市民の皆さんに楽しんでいただくことができたことで、「新生豊中まつり」が始まり、現在に至るのである。



豊中まつり'97にて沖縄の芸能が披露される。

沖縄音舞台

現在の豊中まつりでは「沖縄音舞台」と銘を打たれたステージが展開されている。豊中市・沖縄市兄弟都市のつながりを感じさせるステージである。

沖縄音舞台の始まりは2004年（平成16年）。当時、千里中央で行っていた「豊中ピースフルラブ・ロックフェスティバル・オーディション」を例年実施していた「沖縄ひろば」と合体させ開催された。

先述のとおり、アーティストやエイサーがまつり会場を盛り上げる。近年は両市の高校生バンドが出演するなど、さらなる展開を見せている。締めくくりにはカチャーシーが披露されるのが恒例で、沖縄音舞台並びに豊中まつり全体が一体となり、フィナーレを迎える。

interview

人・ヒト



沖縄音舞台 部会長 谷口 純一 さん

2005年（平成17年）に勤務先の同僚である湯川さん（当時の沖縄音舞台部会長）に声を掛けられ豊中まつりに関わるようになりました。そこから長年、アーティストのブックイングなどでまつりに関わってきましたが、コロナ禍により有観客でまつりが実施できなかった2020年（令和2年）、2021年（令和3年）は例年とは勝手が違い、部会も難しい局面を迎えることもありました。どうにかつなぎとめてきました。そんな中で2022年（令和4年）に部会長に就任したため、湯川さん・塩谷さん（前任の部会長）のためにも現在の沖縄音舞台を守っていくのが私の使命だと思っています。



盛り上がりを見せる沖縄音舞台（豊島公園。2023年8月）



2004年に始まった沖縄音舞台で披露された「豊俵会」によるエイサー演舞（豊島公園）

INTERACTION 6

豊中まつりからロッカーが出演

ピースフルラブ・
ロック
フェスティバル

始まりと変遷

1983年(昭和58年)8月21日、恩納村の沖縄グランドパークで開催されたコンサートが「ピースフルラブ・ロックフェスティバル」の始まり。ロックシーンをけん引した伝説のバンド「紫」の再結成コンサートだった。幾多の変遷を経て、実行委員会主催によるロックフェスとなる。やがて会場は沖縄市野外ステージ(旧・闘牛場)に定着し、沖縄市の一大イベントとなった。コザの大師所から本土や海外のプロミュージシャン、出演を契機にメジャーとなる若手バンドらが出演し、数々の伝説が生まれてきた。第34回(2017年)からコザ・ミュージックタウンに会場を移し、2024年(令和6年)には開催第39回を迎えた。



2017年よりコザ・ミュージックタウンに会場を変更

コザにロックは欠かせない

1960年代のコザ「センター通り」(現・中央パークアベニュー)。ベトナム戦争にかり出される米兵たちの一時のよりどころ、はけ口だった。彼らの心情を受け止め、全身を振動させる強烈なビートで呼応したのが、さまざまな生い立ちの若きミュージシャンたち。こうして基地のまち・コザにロックが根付き、歓声と喧騒のもと独自の進化を遂げていった。そこから、平和と愛を掲げる「ピースフルラブ・ロックフェスティバル」が誕生した。



沖縄市野外ステージ(旧・闘牛場)で盛り上がりを見せるピースフルラブ・ロックフェスティバル(2004年7月)

兄弟都市交流 ～ 憧れのロックフェスをめざして ～

第17回(1999年)からは、豊中まつりのコンテストで選ばれた本土のバンドが出演している。ロックフェス・プロデューサーの徳山義広さんの尽力、そして豊中まつりの「沖縄音舞台」を担う市民ボランティアによって実現した。

ロッカーたちの聖地、コザのロックフェスに出演できると、全国からアマチュアバンドのエントリーが殺到。事前

のテープ審査で勝ち残ったバンドが、豊中まつり本番で競い合い選ばれる。兄弟都市交流が、全国の若者の音楽交流へと広がったのだ。

第38回(2023年)で幕を閉じたが、この取り組みを契機に、高校生バンドやダンスの交流が始まっている。これからも、兄弟都市交流の広がりや世代継承に大きな役割を果たしていくだろう。

平和と愛を掲げて

かつて闘牛場だった沖縄市野外ステージから数々の伝説が生まれ、コザの音楽文化を育む土壌となってきた。思い起こせば、この土壌は、ベトナム戦争の頃から平和と愛を渴望する若者たちによってもたらされたもの。それを耕してロックフェスが生まれたことを忘れてはならないだろう。

これからも、若者たちが平和と愛を希求して巣立つロックフェスとして発展していくことを望んでやまない。

interview

人・ヒト

沖縄の音楽文化を支え続ける
徳山 義広さん



「僕が関わったのは第6回(1988年)から、以来ずっと続けている」と徳山さん。芸能プロモーター、音楽プロデューサー、PA(音響システム・オペレーター)として活躍。愛称「徳さん」は、コザのミュージックシーンに欠かせない存在・重鎮として愛されている。

その長く深い経験は風貌に刻み込まれているが、表情はいつも穏やか。「出演バンドとの交渉、バックアップしてくれる団体との調整、資金繰りに苦労してきたが、コザでやることにこだわってきた」とほほ笑む。そして「第7回目からは実行委員会主催とし、その初代委員長は古堅宗光さんですよ」とも。古堅さんは、当時の観光協会(現・沖縄市観光物産振興協会)の青年部長、音楽関係者はもちろんのこと、各界の人とネットワークを結び、コザに夏の訪れを告げる一大イベントをつくりあげてきたことが分かる。

徳さんは、兄弟都市交流にも一役買ってくれている。本土からの出演バンドを選ぶ「豊中まつり・沖縄音舞台」でのオーディション審査委員長。「本土・豊中のバンド、それぞれに良さがあるさ」と力量の違いは明かさず、まなざしはやさしい。高校生対象に「バンド・インターハイ」を企画し、若手ミュージシャンの育成にも力を入れているからだろう。

これからの夢は?と問いかけると「ヒ・ミ・ツ」と煙に巻かれたが、そのいたづらっぽい表情から、ロックフェスを慈しみ育ててきた心意気がにじみ出ている。それは、誰も排除しない、みんな受け入れて共に生きていく、いわば“否戦のころ”が源ではないか。沖縄の音楽文化は(もしかすると琉球王朝の頃から)このようにして生まれ、支えられているのだ。(インタビュー・田中逸郎)

徳山 義広(とくやま よしひろ)さん
(有)サウンドパッケージ・代表取締役、コザ・ミュージックタウンの運営にも参画してきた(旧指定管理者)。その他、(株)ミュージックウェーブ・代表取締役、コザメトロ代表、琉球国祭り太鼓理事長、沖縄商工会議所第1号議員、ピースフルラブ・ロックフェスティバル・プロデューサーなど多彩な活動を続けている。

Who's NEXT

豊中まつりの
オーディションで選ばれ、
出演したバンド



- 1999:Eyes
- 2000:バダンバダン
- 2001:Messiah
- 2002:敏司餃子北京亭
- 2003:SOUL NATION
- 2004:BOMB SHOP
- 2005:ねぐりぢえ
- 2006:Fain Day's
- 2007:OVER SKA DRIVES
- 2008:FUNKY☆ROCKERS
- 2009:蕾
- 2010:mana-musica
- 2011:YULO
- 2012:陸奥守吉行
- 2013:ゴーカートモンキー
- 2014:THE 春夏秋冬
- 2015:大山まき(台風により中止)
- 2016:さしすそぞ
- 2017:ピリ→部
- 2018:ソウルソウス
- 2019:ロッカクレンチ
- 2020:ソラマメです(コロナにより中止)
- 2021:ソラマメです(コロナにより中止)
- 2022:ソラマメです
- 2023:Buddhadatta
- 2024:RABI(オーディションではなく、豊中まつりの推薦により出演)



INTERACTION >

沖縄伝統芸能で深まる両市の絆

エイサーを通じた交流

交流の要となったエイサー

沖縄市と豊中市の交流において、大きな要となっている「エイサー」。

50年前は沖縄県外であまり知られていなかったこの伝統芸能が、兄弟都市交流が深まるにつれ広く知られるところとなり、いまや両市共に親しむ文化となった。

エイサーのまち・沖縄市

前述の「沖縄全島エイサーまつり」は沖縄を代表する夏の「まつり」として成長発展し、今やエイサーのメッカとして県外・海外からも大変注目され高く評価されている。

エイサーの果たす役割は、地域文化の発信、まちの活性化、青少年の健全育成、地域経済などにも多大な効果をもたらしている。特に、各地域の青年エイサーは、青年会活動の核となり、エイサー継承発展に大きく貢献している。活動を休止していた青年会がエイサーを通して復活するなど、青年会活動の維持発展と青少年の情操教育にも大きな影響があるといっても過言ではない。

沖縄全島エイサーまつりが60年以上開催され、今では夏の風物詩として定着し全国有数のまつりに発展してきた中で、地域文化資源としてのエイサーが今後さらに継承発展し、沖縄市のめざす文化・芸能の薫り高いまちの実現に向け推進していくことを目的として、2007年(平成19年)6月に「エイサーのまち」を宣言している。



2012年、胡屋十字路に設置されたエイサーモニュメント

豊中に届いたエイサー文化

■ 豊中へのエイサー団体の派遣

豊中市と沖縄市の兄弟都市提携40周年を盛大に祝うとともに、より深い交流を図るために、2014年(平成26年)の豊中まつり前夜祭へ沖縄の「東青年会」が派遣された。東青年会は豊中市内で道ジュネー形式によるエイサー演舞を披露し、多くの観客を魅了した。



■ 豊中に生まれたエイサー団体「豊優会」

毎年、豊中市で開催されている「豊中まつり」に1999年(平成11年)の夏「まつりネット」というボランティアで参加し、その時エイサーに触れて感動した初期メンバーによって「豊優会」が誕生。2024年(令和6年)で結成25周年となる。

沖縄市の諸見里青年会や兵庫県尼崎市の琉鼓会と関わりがあり、演舞の型は諸見里青年会の流れをくんだ勇壮なエイサーとなっている。日頃は、「豊中まつり」をはじめとした地域の祭りや福祉施設への慰問、沖縄にゆかりのあるイベントなどでのエイサー演舞を行っている。

東青年会 -----

1993年(平成5年)に結成され、2024年で結成32年目となる沖縄市宮里区域の青年会。エイサー演舞は旧美里の仲原地域の型を変化させたもので、独自に型を練り合わせ曲目も増やし、試行錯誤した上で、現在のエイサーへと変遷。ダイナミックな動きもさることながら、勇壮な大太鼓、ガマクの締太鼓、力強い手踊り、四つ竹や扇子で華麗に舞う女踊りなど緩急をつけた演舞が特徴。

豊中エイサーが
沖縄全島エイサーまつりで演舞

沖縄市市制施行50周年および国内兄弟・姉妹都市との都市提携周年を記念し、国内兄弟・姉妹都市で活動するエイサー団体を1団体ずつ招聘する周年事業を沖縄全島エイサーまつり実行委員会にて決定。豊中市からは、「豊中エイサー豊優会」を招聘し、まつり最終日に出演した。



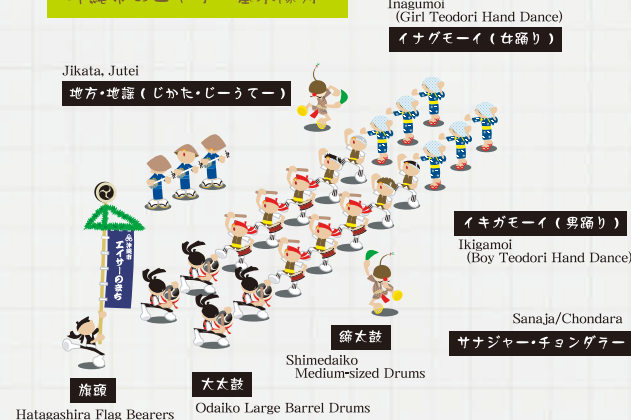
本場沖縄市で演舞する「豊中エイサー 豊優会」(2024年8月25日)

エイサーとは -----

本土の盆踊りにあたる沖縄の伝統芸能の一つで、主に各地域の青年会がそれぞれの型を持ち、旧盆の夜に地域内を踊りながら練り歩くもの。

一言で「エイサー」といってもその形態はいくつかに分類され、現在ほとんどの青年会が、大太鼓、締太鼓を中心とした「太鼓エイサー」であり、沖縄県中部が最も盛んな地域といわれている。その中でも旧与那原町、旧勝連町で見られるエイサーは「パーランクー」という片張りの太鼓を用いたエイサーがほとんどで、締太鼓とは違った雰囲気を醸し出す。また、太鼓を使わない「手踊りのみのエイサー」もあり、本島北部にいくつか存在するが、これがエイサーの最も古い形ではないかといわれている。近年では、エイサーの型を取り入れ、音楽はポップスを使用するなど、衣装も独創的な「創作太鼓」のグループも多く存在する。

沖縄市のエイサー基本隊列



INTERACTION 8

多彩な分野で交流が広がる

兄弟都市提携 40周年 記念事業

提携40周年をPR

2014年（平成26年）

兄弟都市提携40周年記念事業のテーマは、「人と文化の絆を未来へ」。次世代の学びと相互理解を進め、友好と信頼の絆を未来につないでいこうと、多彩な分野で記念事業が実施された。

また、記念のロゴマークも作成。沖縄市在住のデザイナー・仲地のぶひでさんによるもので、兄弟交流（ちよーでー・ちゃんぶるー）を表した交じり合うハートが大きく描かれている。

小学生テレビ会議

4月～6月/
10月～12月

両市の小学生が、ウェブテレビ会議システムを活用して、いろいろなテーマで交流学習をした。

豊中市立庄内小学校と沖縄市立北美小学校の5年生はお互いの地域の風土や文化を紹介。豊中市立上野小学校と沖縄市立比屋根小学校の6年生は、戦争について学び、考える平和学習を行った。



沖縄の小学生が三線を演奏し、豊中の小学生が沖縄民謡を歌う交流も。

次世代へと市民がつなが 友好のバトン

豊中市と沖縄市が兄弟都市を提携してから40周年となった2014年（平成26年）。提携当初は行政間での付き合いだったものの、次第にその軸は市民同士の交流へと移り変わっていった。そして、節目となる40周年では大勢の市民が参加して、教育やスポーツ、文化芸術などさまざまな分野で記念事業が行われた。



高校野球発祥の地や沖縄の伝統楽器・三線（さんしん）など、両市の魅力も描かれている。

コザ高校ラグビー部公開練習

12月



コザ高校は、2年ぶり13度目の代表出場

沖縄市のコザ高校が、全国高等学校ラグビーフットボール大会に沖縄県代表として出場。大会前に、マリンフード豊中マルチグラウンドにて公開練習を行った。

また、近鉄花園ラグビー場で行われる試合本番には、豊中市民で結成された応援団が集結。旗を振りながら、熱い声援を送った。



式典・市民大交



「兄弟都市40周年共同宣言」を行った
沖縄市桑江朝千夫市長（左）と豊中市浅利敬一郎市長（右）

市民大交流会

11月

記念式典と同日、友好と交流を一層深めようとコザ・ミュージックタウン音市場で開催。兄弟都市ソングのお披露目やエイサー、地元ミュージシャンによる演奏などで大いに盛り上がった。

また、両市の市民によって泡盛を甕（かめ）に入れるというイベントも。10年間貯蔵して熟成させ、50周年の際には乾杯しようという、両市民の思いがあふれる未来に向けた企画だ。



50周年で
乾杯するために！



フィナーレはやっばりカチャーシー

兄弟都市から生まれた交流

記念式典

11月



40周年調印書

沖縄市のコザ・ミュージックタウン音市場で、両市の交流に携わってきた関係者や市民などが参加し、兄弟都市提携40周年の記念式典が開催された。式典は、大阪音楽大学の皆さんによる声楽に始まり、これまでの歩みを映像で振り返るなどし、最後は、今後より交流を図っていくことを確認し合う「兄弟都市40周年共同宣言」を行った。

CHECK

両市民が互いに訪問 市民交流ツアー

8月1日～3日/
11月7日～9日

40周年を記念して、両市ともに兄弟都市を訪れるツアーを開催。豊中ツアーでは「日本民家集落博物館」などを訪問し、沖縄市ツアーでは「コザのまちあるき」などが行われ、共に存分に楽しんだ。



豊中ツアーでは、豊中まつり前夜祭の市民交流会に参加
（2014年8月1日、ホテルアイボリー）

INTERACTION 9

交流の今後のあり方を共に提言

40周年
共同研究

互いの市を訪れ、活発に意見交換

この共同研究は、兄弟都市宣言から40年を迎えるにあたり、両市が共同で兄弟都市交流の現状を振り返るとともに、課題の把握や、解決のための連携方策などを検討・提言することで、両市の市政運営と都市間交流のさらなる活性化に寄与することを目的として実施したものである。



沖縄こどもの国を訪れた
豊中市の研究者

豊中市、沖縄市それぞれで、調査・研究のためのグループを設置。必要に応じて両市のグループメンバーがお互いに訪問し、議論した。調査研究のために行った会合は8回に及び、活発な意見交換が行われた。この共同研究を通して、両市職員の共同作業が生まれ、交流を深めることができた。

50周年にも生きる提言

8カ月にわたる調査・研究の成果を報告書にまとめ、両市で報告会を実施した。同報告書では、兄弟都市交流の意義・目的は、両市の違いを知ることによる「自都市の資源・特性・能力や課題の再認識」であり、「両市それぞれの強みにより補い合い、地域の活力や生活の質を高めあえる環境づくりである」と定義づけている。さらに、この意義・目的が重要であるとの認識に立ち、兄弟都市交流の課題と両市がめざすべき方向性、そして提携50周年に向けて、担い手（人材）の育成や交流事業の幅を広げることなど取り組みへの提言を併せて行った。

兄弟都市交流の意義・目的や、提言の内容は10年を経過した現在においてもなお方向性が変わるものではなく、今後も引き続き取り組んでいくべき内容である。



豊中市で行われた
調査研究報告会の様子

両市若手職員が未来を見据えて

2014年（平成26年）、豊中市・沖縄市兄弟都市提携40周年事業として、両市の若手職員により、「豊中市・沖縄市の都市間交流の新たな展開」をテーマに共同研究を行った。

interview

人・ヒト

豊中市こども未来部 こども事業課 主幹
（当時：とよなか都市創造研究所 主任研究員）

森 崇徳 さん

都市間交流は、職員が多様な考え方や価値観に触れることで視野を広げることができる大切な取り組み。そのような機会を多くの職員が経験することで、市全体の豊かさにつながると感じています。共同研究では兄弟都市の職員と長期間をかけて提案を創るという、非常に貴重な経験をさせていただきました。共同研究で交流を深めた両市職員の絆は今も大切にしています。

沖縄市経済文化部 文化芸術課 係長
（当時：沖縄市教育委員会教育部
生涯学習課主事）

宮平 栄 さん

当時は振り返ると、共同研究グループの一員として臨んだものの、右も左も分からず、豊中市の皆様にお世話になりながらガムシャラに取り組んだことを思い出します。この経験は単なる職務上の成長にとどまらず、今でも交流が続く多くの方々とのご縁を結ぶ貴重な機会となりました。豊中市と沖縄市の絆が未来永劫にわたり深まることを願い、私もまた微力ながらその一助となるべく務めてまいります。

INTERACTION 10

豊中の中学生が現地で学ぶ

修学旅行で
沖縄の現在を知る

事前平和学習で沖縄を学ぶ

2024年（令和6年）の修学旅行に向け、前年度より事前の平和学習が始まった。庄内さくら学園ではコザのまちについて調べ、第七中学校では沖縄戦やひめゆり学徒隊についての講演を聞いた。第七中学校の生徒たちからは「平和のありがたさを感じた」や「戦争を学んだ私たちが次へ伝えていかなければならない」との声が挙がった。



BCコザ（公共施設）の屋上から嘉手納飛行場を眺める様子
（豊中市立第七中学校）



ひめゆりの塔で平和を願う一行



沖縄市・コザのまちあるきの様子

現地で見て、聞いて、実感する

そして2校は沖縄へ向かった。「ひめゆりの塔」や「平和祈念公園」を訪れ、平和の礎に記された戦没者の方々に思いを寄せた。その後、沖縄市を訪問し、米軍基地とともに発展してきた「コザのまち」を地元のガイドと一緒に歩いた。大阪とは異なるまちなみ、まだドルが使えるお店も見られる。そして、米軍基地を目の当たりにした。また、うちなんちゅ（沖縄の人）の温かさにも触れたことで、戦時中と現在、まだ基地が残る沖縄など、さまざまな観点から「平和」の大切さへの学びを深めていった。



事前学習で作成したコザのまち紹介を持っ小畑さん（左）と大槻さん

interview

人・ヒト

修学旅行を終えて

庄内さくら学園 小畑 ののか さん

実際に沖縄に行くことで、戦争によって悲惨な思いをした人がいることが分かり、平和について深く考えるきっかけになりました。コザは日本とは思えないようなまちなみで、米軍基地は、実際に見るまで日本にあるなんて信じられませんでした。目に焼き付けてきたものを忘れずに、今を生きることを大切にしたいと思います。

庄内さくら学園 大槻 侑嵩 さん

資料やガマを見て、当時の人たちの大変さを思い知りました。自分の目で直接見ることで戦争の悲惨さを痛感しました。コザのまちは豊中とは全然違って、外国の方も歩いていてとても新鮮でした。建物の上から見た米軍基地はとても広くて驚きました。この経験を大切に、戦争を繰り返さないように生きていきたいです。

INTERACTION 17

未来に向けて絆を深める

兄弟都市提携 50周年 記念事業

\ What icon? /

- 平和
- 教育
- 観光
- スポーツ
- 文化

オンラインシンポジウム 「沖縄と豊中から考える 戦争体験の継承」

6月14日

豊中市と沖縄県内で戦争体験の継承に従事してきた方々をお招きし、両市の戦中・戦後の様子や戦争体験を継承する取り組みなどを紹介。今後どのように伝えていけるのかについて、パネリストとシンポジウム参加者で考えた。



多くの市民が参加し、討論を行った。

両市のこれからを 見据えた数々の事業

兄弟都市提携以来、両市は文化・スポーツ・教育・平和など、さまざまな分野で兄弟の絆を深めてきた。50周年を迎える今年は「出会えば兄弟（いちゃりばちョーデー）～友好の絆を次世代へ～」をテーマにさまざまな事業を実施した。

※紹介する事業は、2024年9月1日時点のものです。

schedule

- 8月18日～31日 写真パネル展「沖縄戦とひめゆり学徒隊」
- 8月16日 とよキネマVol.64 GAMA
- 8月23日～25日 沖縄全島エイサーまつり（33・34ページ参照）
- 9月9日～11月30日 平和展示室 企画展「沖縄市の沖縄戦～戦さ世の（イクサユヌ）少年少女たち～」
- 9月21日 琉楽time×ピアノデュオ新崎姉妹
- 10月18日 豊中まつり前夜祭
- 10月19日～20日 豊中まつり

スポーツによる 市民交流

8月5日～8日

豊中市の小学生が沖縄市を訪問し、少年軟式野球やミニバスケットボールの親善試合を行った。日頃の練習の成果を発揮し、互いの健闘を称え合うなどで交流。また、沖縄市内で社会見学を実施するなど、兄弟都市への理解を深めた。



沖縄の青空のもと汗を流す小学生たち



大阪モノレールの泡盛列車 沖縄市・豊中市

8月3日

大阪モノレールと共に両市の魅力を詰め込んだ観光列車を実施。沖縄市で長年愛されるステキを中心とした弁当と両市のお酒を130名のお客様に提供した。

同時に大阪モノレール万博記念公園駅では、クラシックコンサートやエイサー演舞のステージ、両市の物産が集結した物産展を開催した。



モノレール車内の様子

綾庭の宴 -AYAMIYA- 豊中出張公演

10月30日

沖縄県内外で活躍するプロ実演家が集結し沖縄市を拠点に活動するマルチエンターテインメントグループ「なかのまちヤカラーズ」の代表目「綾庭の宴 -AYAMIYA-」が、桜塚高等学校軽音楽部と豊優会をゲストに加えた特別な内容で公演を実施。

さまざまな沖縄の
芸能が積み込まれた
ステージを展開。



schedule

- 10月31日 かじまやうゆえー 祖母の言葉から沖縄戦を伝える
- 11月2日～4日 沖縄スタディーツアー（75・76ページ参照）
- 11月3日 豊中市・沖縄市 兄弟都市提携50周年記念式典

schedule

- 6月～11月 平和学習プロジェクト ～「平和」の伝え方について考える～（75・76ページ参照）
- 7月～9月 平和パネル巡回展（計6回）
- 7月13日 オンライン学習会
- 7月18日 ランチタイムコンサート
- 7月26日 沖縄のシーサーをつくろう！

沖縄市ってどんなまち？ 作文コンクール

7月27日～8月31日



約150名の小学生から作文が提出された。

兄弟都市提携50周年を機に、豊中市の小学生に沖縄市について知る機会を創出するために、小学生作文コンクールを実施。兄弟都市・沖縄市への理解を深め、学んだことを自身の生活や人生にどのように生かすかを考えてもらった。

沖縄市から学ぶ「平和」―基地の街の記憶を通して

山崎 孝史

大阪公立大学大学院文学研究科教授

はじめに

筆者は本土出身者であり、琉球・沖縄史を学ぶ意義は、日本という国民国家の近現代史における矛盾と教訓を知り、その望ましい将来像について、沖縄県を含めて考えることにありと捉えてきた。したがって、沖縄市から「学ぶ」というのは、本土からの行為であるが、学ぶ過程では、学ばれる対象（沖縄社会）からの問い返しもありうる。本稿では、そうした問い返しの可能性に留意しつつ、「学ぶ」という立ち位置から論じていきたい。

次に「平和」は、一般的には「戦争がない状態」と定義される。沖縄戦を通して伝えられてきたのは、この意味での「平和」であろう。しかし、沖縄市から学ぶ「平和」は、単に「戦争がない状態」ではない。この「平和」はもっと複雑で矛盾している。なぜなら、沖縄市から「平和」を考えることは、誰の「平和」を維持するために、誰がその負担や苦悩を担ってきたのかという問題に向き合うことになるからである。

こうした問題意識から、本稿は沖縄市、とりわけ米空軍嘉手納基地に接する旧コザ市地区の成立とその政治地理的特性を

検討し、その「類まれな」都市性に基づく地域資源の活用について考え、沖縄市の戦後史から学びうる「平和」について論じてみたい。繰り返すが、米軍基地の街の戦後史は矛盾に満ちている。本土の人々が沖縄市との結びつきを想起する場合、この矛盾から本土の「平和」がもたらされたことを、まず自分事として理解することから始めるべきであろう。

コザ市の誕生

～境界都市とコンタクト・ゾーン

沖縄市は1974年にコザ市と美里村が合併して成立する。コザ市の前身は越来^{こえく}村と呼ばれる農村であった。越来村には1944年に開設された日本軍「中飛行場」があったが、沖縄戦で米軍に接収され、戦後に嘉手納空軍基地（以下「嘉手納基地」）へと転用・拡充された。沖縄島中部で米軍基地の建設が進むと、基地経済の拡大に伴い、越来村は都市化し、1956年にコザ市となる。「コザ」という地名は、沖縄上陸後に米軍が「古謝^{こじや}」や「胡屋^{こや}」をKozuと誤記したことに由来するとされる¹。

コザ市は、農村から分化した「普通の」都市ではなく、基地建設（土地接収）によ

り土地から切り離された労働力が、基地経済（雇用とサービス需要）に吸収された結果である。米軍基地の街といえば、横須賀市やかつてのソウル市梨泰院^{イテウォン}があるが、これらは首都圏にある。島嶼^{とうしょ}の米軍基地としてはグアムやプエルトリコの例があるが、そこにコザ市ほどの規模の街はない。その点でコザ市は「類まれな」基地の街である。

コザ市域は、嘉手納基地を含む複数の軍事施設によって、その60%以上を占有され、広大な「軍」の空間と狭小な「民」の空間に二分された。1970年代の嘉手納基地の面積は約21km²、駐留する米軍関係者の数は約33,400人に上った²。嘉手納基地は、滑走路や格納庫などの軍事施設に加え、住宅・学校・病院・商業施設・ゴルフ場など民生施設を含む巨大な「アメリカ・タウン」を形成した³。つまり、沖縄島中部では基地の周囲に沖縄社会が再配置され、この軍と民の空間を分離したのが基地のフェンスとゲートであった。

これら広大な基地群の建設は、西太平洋における米国の軍事戦略の一環であったが、沖縄の人々に必要な就業機会も提供した。また、米軍は軍道ほかのインフラを整備したので、基地周辺に沖縄の人々が集住し、基地の街が形成された（図1）。

コザ市の場合、軍道の敷設により生まれたコザ十字路と胡屋十字路、そして嘉手納基地門前の「第2ゲート通り」（ゲート通り）とその北東側に新設された「ビジネス・センター通り」（センター通り）を中心に、米軍向けの飲食・風俗店街（特飲街）が族生する。こうして、沖縄島中部の社会は軍雇用、対基地サービス、軍用地料などを介して基地経済に依存していったのである。

つまり、コザ市の形成は米軍による沖縄島の要塞化に沿うが、その地理的形態は基地のフェンスとゲート（擬似的国境）に接する「境界都市」といえる。一般的に境界は空間を分割し、境界をまたぐ相互作用を制御する手段として用いられる⁴。特に国境は国家の領土を縁取り、防衛の前線となるとともに、自己／他者、内／外という二分法を生みだし、国境と関わる主体のアイデンティティにも影響する⁵。また、国境は社会を分離しつつ、接触もさせる。つまり、国境は隣国とのヒトやモノの流れを



図1 嘉手納基地（左上）と旧コザ市域（出典：Google Earth）

制御するが、この流れによって国境地域には複雑な社会的動態が現れる⁶。

コザ市を境界都市とみなすならば、基地のフェンスは琉米間のヒトやモノの流れを遮る壁であり、ゲートはその流れを選択的に制御するフィルターである。つまり、ゲートを通して、米兵、軍雇用員、サービス業者、そして関連する物品が日常的に出入りする。支配者たる米軍は、駐留の効率的維持のために、ゲートを用いて軍民・琉米間の相互作用を制御できる。対して、沖縄側は、軍雇用員のストライキのような例以外に、この相互作用を主体的には制御できない。

つまり、軍と民の空間は不均等に接触し、相互作用する。その不均等な作用は、占領期の土地の収奪や（女性）住民への暴行そして軍政下の生活権や人権の侵害としても現れた。この抑圧に対して沖縄の人々は抵抗や闘争を繰り返す。こうして、コザ市は米軍に対する従属と抵抗が錯綜する空間となったのである。

このような異質で不均等な社会関係が交錯する空間は「コンタクト・ゾーン」と呼ばれる。この用語を創出したプラット⁷は以下のように定義する。

植民地主義や奴隷制度、あるいは今日世界各地で生き永らえているその余波のような、しばしば極めて非対称な権力関係の文脈の中で、複数の文化が互いに出会い、衝突し、格闘す

る社会空間。

その具体例としては、交易所、境界都市、人々や商品の移動が接触をもたらす都市などが考えられる⁸。プラットはこうした空間で発生する重要な接触の過程を「トランスカルチャレーション」と表現し、こう説明する⁹。

従属した、あるいは周縁的な集団の成員たちが、支配的な、あるいは大都市の文化によって伝えられた素材から選択し、創作するプロセス。この言葉は、[…]征服下の文化を特徴づけるために使われる過度に還元的な「馴化^{じゅんか}」と「同化」の概念に取って代わることを目的としている。

ここから、コンタクト・ゾーンに生まれる文化は、被征服者による征服者文化からの選択的創作により、ハイブリッド（異種^{こんこう}混淆的）な性格を持つと理解できる。

コザ市を境界都市（コンタクト・ゾーン）として捉えるならば、トランスカルチャレーションは市名の成り立ちに確認できる。上述したように、「コザ」という米軍の誤用による地名が採用されたことは、都市のハイブリット性を示している。また、この地名は米軍が強制したものでも、米軍への同化を意味するものでもないと考えられる¹⁰。

このハイブリッド性は、その後の「コザ」や通りの呼称の揺らぎとしても確認される。

カタカナの「コザ市」は1956年から74年まで市内外で定着していくが、美里村との合併時に採用された「沖縄市」には市民からの賛否両論があった。市名公募では「コザ市」が最多であったものの、対等合併ゆえの政治的妥協や脱基地経済の観点から、土地柄を反映しない市名が採用されたのである¹¹。

さらに、1972年の復帰に伴い、コザ市は「国際文化観光都市」を宣言し、沖縄市もそれを継承する。この宣言は、基地の街に由来する「多彩な国際カラー」を前提に、不安定な基地経済に依存しない「観光、文化、スポーツ」による開発を謳った¹²。翌73年にコザ市は「ゲート通り」を「空港通り」に改称し、嘉手納基地の返還と民間空港化を構想した。その後85年に「センター通り」は「中央パークアベニュー」に改称され、かつての特飲街はアーケード付きの先進的商店街に変貌した。沖縄市は、内陸の旧市域を中城湾へと開き、基地の街からの脱却、つまり「脱・コザ」の戦略に舵を切ったかに見えた。

基地の街の地域再開発戦略 ～脱・コザから再・コザへ

復帰後も米軍基地は沖縄県にとどまったが、ベトナム戦争の終結と復帰後の円高は基地経済を縮小させ、日本政府による沖縄振興開発計画は県内各地の開発を加速させた。その結果、住宅や大規模店

の郊外化による沖縄市の中心市街地の衰退が進んだ。中央パークアベニューは開設時の賑わいを持続できず、1997年にその北端に複合商業施設「コリンザ」が建設される。しかし、店舗の撤退が相次ぎ、2014年に沖縄市が施設を買い取り、現在は沖縄市立図書館などが入る複合施設「BCコザ」となっている。その間、米軍基地の返還はほとんど進まず、1996年のSACO合意にも、嘉手納基地の縮小や返還は含まれなかった¹³。

嘉手納基地の存続と旧コザ市地区（以下「コザ」）の衰退は、国際情勢と日米関係、為替相場、沖縄県政、そして県内経済の変動の結果であり、一地方都市が対処できる問題ではない。しかし、基地返還が部分実現した北谷町などとの再開発の競合もあり、沖縄市独自の開発戦略が模索される必要があった¹⁴。その中で注目されたのが独自の「地域資源」の再発見と開発である。

沖縄市での地域資源開発を促したのは、1997年に開始された「沖縄米軍基地所在市町村活性化特別事業」である。「基地の存在による閉塞感を緩和する」とした政府事業に、沖縄市の「中の町・ミュージックタウン整備事業」（以下「ミュージックタウン事業」）が1999年に採択された。この事業は、嘉手納基地門前の胡屋十字路西側角地において、土地の合理的高度利用、音楽によるまちづくりに資する公共施設の整備等を図り、中心市街地の活

性化を目指した。この事業によって2007年に建設された再開発ビルが「コザ・ミュージックタウン」である。事業の背景は次のように説明された¹⁵。

沖縄市（旧コザ市、旧美里村）は戦後、基地依存経済の下で沖縄本島中部圏の中核都市として発展してきた。基地の門前街として第3次産業に特化していく一方、沖縄の伝統的な地域文化を土台に米軍基地の存在によるアメリカ文化等の影響を受けながら極めて特色のあるイメージを持った街を形成してきた。特に音楽分野においては、戦後復興の大きな心の支えとしながらアメリカンロックやジャズ、琉球古典、島唄、琉球芸能等多様な音楽シーンが盛んな地域として発展してきたが、本土復帰を前後としたドル高の終焉による基地経済の変動とともにかつての音楽関連産業としてのダイナミズムは沈静化し、その求心力が弱まり拡散してきた。

そこで、ミュージックタウン事業が、この「沖縄市独自の音楽・芸能の土壌」という地域資源の潜在力を掘り起こす「音楽と芸能を背景とする街づくり」をけん引するとされた。

上述したように、沖縄市成立時には、脱・コザを目指す上で、米軍基地との歴史的関係は積極的には評価されなかった。対

して、ミュージックタウン事業は、明示的にコザの歴史的、文化的な背景を地域資源とみなし、中心市街地を活性化しようとしたのである。この施設には「コザ」の名称が用いられ、施設開設に先立つ2005年に「空港通り」は「コザ・ゲート通り」と再命名された。これはコザという歴史性や固有性への回帰、つまり「再・コザ」化といえる。この方向性は、「コリンザ」がかつてのビジネス・センター（BC）通りにちなんだ「BCコザ」に改称されたことにもうかがえる。街のブランディングという点では、県名と競合する「沖縄」よりも「コザ」が優位である。ただし、ミュージックタウンも期待された音楽の産業化を達成できず、地域資源を経済的に活用することの難しさを示した。

基地の街の記憶と魅力

こうした一連の再・コザ化の試みは、地名改変や施設建設にとどまらない。境界都市コザに生まれたものを「記憶化」する取り組みも、市役所、NPO、各種団体によって継続されてきた。プラットの定義に従えば、コザは米軍統治という植民地主義的で非対称な権力関係の中で、琉・米・アジアほか多様な文化が互いに出会い、衝突し、格闘する都市空間といえる。そして、この非対称な関係は、文化という精神的なもの、生活様式やその表現にとどまらず、物理的で身体的なものにまで及び、

それゆえに人々の心にも深く刻まれる。そこには、戦争、占領、異民族支配、闘争や抵抗といった、過酷なものが含まれるからである。

コザを語る際、「チャンプルー文化」という表現がよく使われる。「チャンプルー」は主に沖縄固有の混ぜ合わせ料理を意味するが、東アジアに位置する沖縄の文化的混淆を指す言葉としても用いられる¹⁶。しかし、この比喩は、異質なものが混ざり合う過程での衝突や格闘まで意味しない。コザに結果として生まれたハイブリッドなものを称揚するだけでは、コンタクト・ゾーンの歴史的実質を理解することにはなるまい。

また、これまで多くの映画、番組、小説がコザを対象に作られており、SNSが発達する今日、コザを脚色して発信することで、衆目を集めてコザを活性化することも可能であろう。しかし、それは都市像の部分的な切り取りにもなりかねない。コザの内実の「記憶化」は、復帰後50年を経た今でこそ必要であり、この内実から湧き出る「魅力」なら簡単に色あせはしまい。

この「記憶化」に中心的な役割を果たしてきたのが、沖縄市役所の市史編集担当であろう。市史編集担当は、沖縄市制10周年記念事業に伴い設置され、1984年に『沖縄市史第二巻』の刊行を皮切りに、これまで『沖縄

市史』、『沖縄市史資料集』、『KOZAの本』各巻、そして雑誌『KOZA BUNKA BOX』各号などを刊行してきた。

出版事業以外にも、市史編集担当は、戦後文化資料展示室「ヒストリート」（旧館）を中心市街地内（パルミラ通り商店街）に開設し、戦後史（沖縄戦と米軍統治）に関連する物品・写真資料を展示してきた（図2）。2005年に開館した旧館は、2009年に「ヒストリートII」を併設し、2018年にはコザ・ゲート通り沿いに移り、展示スペースを拡充した「ヒストリート」（新館）となった。ヒストリートは、旧館が米軍向け特飲街となった中央パークアベニュー（旧センター通り）に近接し、新館が嘉手納基地門前のコザ・ゲート通りに面しており、展示内容がこれら通りに根付く歴史と関わっている点に特徴を持つ。特に新館には、入館者や通行者に米軍関係者が見られ、訪問者はコンタクト・ゾーンを実感できる。



図2 ヒストリート（旧館）（2012年2月9日撮影）

市史編集担当と「ヒストリート」による「記憶化」の対象は多岐にわたるが¹⁷、征服者と被征服者との間の物理的な衝突・格闘として語りつがれてきたのが「コザ暴動」¹⁸である。復帰を控えた1970年12月20日未明に、米兵が起こした交通事故を契機として、民衆による投石、米軍車両の焼き討ち、米軍施設の破壊がコザで発生した。この「暴動」にまつわる記録や語りは、コザの「記憶化」の重要な要素である。つまり、コザは単に基地のある街を超えて、米軍統治の抑圧と市民の抵抗がぶつかるコンタクト・ゾーンとしても記憶されてきたのである。

この「記憶化」は、市史編集担当による刊行物や展示のみならず、市民レベルでも展開した。特に「暴動」の40周年にあたる2010年に実施された「『コザ暴動』を記録する会」(以下「記録する会」)が果たした役割は大きい。記録する会は、まちづくりNPOの幹部(当時)が主宰し、市史編集担当が証言記録その他の調整を行った。証言者は主宰者含めて22名で、ほぼ全員が1970年当時コザに居住していた。証言会場の「ヒストリートⅡ」にはまちづくりNPO、観光協会、メディアの関係者を含む延べ50名の聴衆が集まった。これら証言と聴衆のコメントを分析すると、発言内容には大きく三つの傾向があることがわかった¹⁹。

一つ目の傾向は「暴動の再評価」である。これは、証言者が「暴動」を肯定的に評価し、「ウチナーンチュ」としての誇り

の感覚に結びつけ、「秩序ある暴動」という表現によって暴力が自律的に抑制されたことを強調する傾向である。

二つ目は「境界都市の社会空間的構成」に関わる語りである。この傾向は、証言者が境界都市としてコザを表現する様式を示している。コザの社会的構成については、基地のフェンスやゲートで隔てられた社会の交錯から発生する「ハーフ差別」や米軍による日常的な抑圧と琉米間の共生が強調される。一方、空間的構成については、「暴動」が「第2ゲート」、「島袋三差路」、「センター通り」まで拡大しつつも、いずれの場所でも琉球警察、米軍警備隊、特飲街の自警団リーダーらによって進行を阻まれ、「暴動」も限られた民の空間内で展開していたことが確認された。

最後は「暴動検証の意義」という傾向で、証言者や聴衆が「コザ暴動」の歴史的意義とコザ再生に向けての歴史検証の重要性に言及し、基地問題など沖縄県やコザを取り巻く状況に対して、コザ住民の主体性やアイデンティティを再構築する必要性を強調していた。要するに、「記録する会」の試みは、境界都市としてのコザの特質を再確認し、沖縄社会の現状への住民の理解を促し、地域資源(対外的魅力)の再発見へと展開したと考えられる。

「記録する会」に続く「コザ暴動」45周年には「コザ暴動プロジェクト」という写真展が開かれた。2015年から16年にかけて、「暴動」に関する写真展と撮影した写



図3 「コザ暴動プロジェクト in 大阪」ギャラリートーク
(2016年12月18日撮影)

真家自身のギャラリートークからなるイベントが、沖縄市(コザ一番街)、東京(明治大学)、大阪(大阪市立大学)で連続開催された。筆者は2016年の大阪での開催をホストし、3日間で延べ160人を上回る参加者を得た(図3)²⁰。このように「暴動」を通じたコザの「記憶化」は、沖縄市(コザ)を超えて広がり、50周年にはNHKが特集番組を放映するなど²¹、全国に展開した。

こうした試みは、地域資源の開発や都市プロモーションというよりも、コザの歴史的、地理的な基底に人々の心に訴える何か—コザ的なもの—を見い出し、伝え、残そうとする地元内外の人々の飽くなき努力のように筆者には感じられた。

境界都市の精神

文化人類学を中心とするコンタクト・ゾーンの研究には米軍基地を対象とするものが

少なくない²²。コザでも、トランスカルチャレーションは地名、文化、産業、景観、人的関係に至る多くの局面で確認できるが、人々を魅了する「コザ的なもの」をどう見出し、表現できるのであろうか。プラットが述べるように²³、コンタクト・ゾーンには、交錯する複数の文化や社会集団

のいずれにも完全には属さないものが生み出される。この過程は摩擦を伴うが、そうした「もの」は既存の文化や規範を覆す潜在力を持つと考えられる。

筆者がコザを境界都市とみなしたのは、ミンカによるトリエステに関する論稿の翻訳がきっかけである²⁴。トリエステはイタリア北東部に位置し、アドリア海に面する港湾都市で、スロベニアと国境を接する境界都市でもある。第一次世界大戦までオーストリア=ハンガリー帝国の統治下にあり、ウィーンの外港として繁栄した。第一次世界大戦後にイタリアに領有されるが、第二次大戦でナチス・ドイツの侵攻を受け、続いてユーゴスラビアのパルチザンが侵攻し、英米軍もトリエステに進撃した。戦後、トリエステは国連の監視下に置かれ、イタリアとユーゴスラビアとの間で帰属紛争もあったが、1954年にイタリアに返還される。

トリエステは帝国の自由港湾都市として、多様な民族²⁵からなるコスモポリタンな社

会を形成し、独自の「トリエステ人」という市民アイデンティティが構想された。しかし、帝国解体後のトリエステは、その多民族性ゆえに、周辺国家の対立関係の中で、特定の国民国家へ編入されるたびに、民族別に引き裂さかれてもきた。ミンカは、こうした領土編入がコスモポリタンな都市性を何度も減殺させたという²⁶。それでも、今世紀に入って、トリエステのコスモポリタンの伝統は、中央ヨーロッパにおけるユーロリージョン²⁷の形成と関連して議論され続けている。

トリエステの境遇はコザとは異なるが、似通う部分もある。境界都市の民族的混雑^{こんさつ}から生まれるコスモポリタンな性格は、コザの戦後史にも見出すことができる。つまり、コザでは、米軍という強力な他者²⁸に加え、収容所から解放された島内各地の出身者、先島^{さきしま}や奄美の出身者、米国籍でない軍属、基地経済に引き付けられた女性や外国籍住民など、戦争、占領、基地と関わる多様な人々が、出会い、衝突し、格闘してきた。しかし、この交錯がどのような都市の精神を創り出してきたかは十分に解明されていない。また、植民地的郷愁に浸ることなく、トリエステのように、都市の歴史的、社会的背景から、コザ独自の精神性を未来に向けて育んでいくことも可能であろう。

おわりに

最後に、沖縄市（コザ）の歴史と経験

から、本土の人々が学ぶうる「平和」について述べておこう。コザは、多大の犠牲者を出した沖縄戦を経てもなお、新たな戦争に備え、駐留・出撃する米軍を後方支援してきた。この歴史が示すのは、戦争なき「平和」でも、軍事力によって維持される「平和」でもなく、自分たちではない誰かの「平和」のために課される負担や苦悩であった。この不条理に身体や環境の犠牲が伴うのであれば、何かで相殺することはできない。

筆者は、こうした「遠くの誰か」の負担や苦悩によって与えられた戦後の「平和」―日米安保体制―に安住してきた一人である。こうした筆者へのコザからの問い返しとは、「支える主体なき『平和』は欺瞞ではないか」、「『平和』の維持に伴う負担を担えるのか」という声なき問いである。筆者は未だにこれらの問いには答えられない。

しかし、この不条理の中で、沖縄（コザ）市民は、戦後にゼロから生活を築き、基地の街を発展させ、かつ基地の抑圧に抵抗してきた。そうして生まれた境界都市では、米軍に完全には馴化^{じゅんか}せず、敵対的な二分法を止揚して、異質なものに開かれた社会が築かれてきたと信じたい。筆者にできるのは、不条理の中で築かれたであろうコザの精神性とその普遍性を探り続けることである。

- ※1 津野武雄「与えられた地名・コザ」『KOZA BUNKA BOX』第2号、2000年、28～33頁。
- ※2 沖縄県渉外部『沖縄の米軍基地』沖縄県渉外部基地渉外課、1975年、46頁。コザ市『コザ市史』、1974年、862頁。同時期のコザ市の人口は68,536人である（同上『コザ市史』863頁）。
- ※3 Gillem, Mark L. *America Town: Building the Outposts of Empire*. University of Minnesota Press, 2007.
- ※4 サック、ロバート・デヴィッド（山崎孝史監訳）『人間の領域性―空間を管理する戦略の理論と歴史』明石書店、2022年。
- ※5 山崎孝史「戦後沖縄の境界・領域と政治行動―領土の分離・統合と闘争のイデオロギー」『史林』90巻1号、179～209頁。
- ※6 Sparke, Matthew. 'Borderlands.' In Gregory, D., Johnston, R., Pratt, G., Watts, M., and Whatmore, S. eds., *The Dictionary of Human Geography*. Wiley-Blackwell, 2009, p. 53.
- ※7 Pratt, Mary L. 'Arts of the Contact Zone.' *Profession* 1991, 1991, p. 34.
- ※8 Oxford University Press. Contact zone. In Oxford Reference. (<https://www.oxfordreference.com/display/10.1093/oi/authority.20110803095634533>)
- ※9 前掲 'Arts of the Contact Zone.' p. 36.
- ※10 前掲「与えられた地名・コザ」。
- ※11 「デッカク名付けた『沖縄市』」『琉球新報』1974年12月14日夕刊3面。
- ※12 コザ市『コザ市報』第148号、1972年、2頁。
- ※13 防衛省「SACO最終報告とは」(https://www.mod.go.jp/j/approach/zaibeigun/saco/saco_final/index.html)
- ※14 山崎孝史「軍事優先主義の経験と地域再開発戦略―沖縄「基地の街」三態」『人文研究』第59号、2008年、71～96頁。

- ※15 沖縄市建設部振興開発室中の町再開発課「中の町A地区第一種市街地再開発事業 中の町・ミュージックタウン整備事業」(未公刊)、2007年、2頁
- ※16 琉球新報社編集局『復帰後全記録 現代沖縄事典』琉球新報社、1992年、195頁。
- ※17 沖縄市戦後資料デジタルアーカイブWeb ヒストリート参照 (<https://www.histreet.okinawa.jp/histreet/FAA10/init#gsc.tab=0>)。
- ※18 当時のメディアの表現や後世の評価ではなく、地元で語り継がれてきた言葉として「コザ暴動」を用いる。
- ※19 山崎孝史「軍民境界都市としてのコザ―暴動の記憶とアイデンティティ」谷富夫・安藤由美・野入直美編著『持続と変容の沖縄―沖縄なるものの現在』ミネルヴァ書房、2014年、218～242頁。
- ※20 山崎孝史編『軍事的圧力に抗う文化的実―沖縄とパレスチナにおける地誌編纂と景観修復』平成27・28年度科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究)報告書、2017年、第4章参照 (<https://polgeog.jp/wp-content/uploads/2017/09/chap4.pdf>)。
- ※21 NHK ETV 特集「沖縄が燃えた夜―コザ騒動50年後の告白」2020年12月19日放映。
- ※22 例えば、田中雅一・船山徹編『コンタクト・ゾーンの人文学 第1巻―Problematic／問題系』晃洋書房、2011年、第Ⅲ部所収論文参照。
- ※23 前掲 'Arts of the Contact Zone.'
- ※24 ミンカ、クラウドディオ（山崎孝史監訳）『「トリエステ人」とその非現前の地理』『空間・社会・地理思想』第16号、2013年、111～127頁。
- ※25 イタリア系を主流としながらも、スラブ系、ゲルマン系の住民が混住した。
- ※26 前掲『「トリエステ人」とその非現前の地理』。
- ※27 ヨーロッパの国境を超えた地域間協力の枠組み。
- ※28 実際には多様な人種からなる集団であった。

筆者：山崎孝史

1961年京都市生まれ、京都大学大学院修士課程、コロラド大学大学院博士課程修了(Ph.D)。2001年より大阪市立大学(現大阪公立大学)文学研究科に着任。現在は大阪公立大学教授。専門は政治地理学、沖縄研究。





豊中市 芳村 幸司 さん

特定非営利活動法人ラブとよネット代表理事。「豊中まつり実行委員会」顧問。1996年の豊中まつり検討委員会より豊中まつりに関わり、2001年から2017年まで実行委員長を務める。

豊中市 林 史洋 さん

豊中市都市活力部魅力文化創造課長。2004年に豊中市に入庁し、子育て支援課、地域教育振興課、行政総務課などを経て、2023年度より豊中まつりの担当課である魅力文化創造課長を務める。



沖縄市 照屋 幹夫 さん

特定非営利活動法人まちづくりNPOコザまち社中理事長。27年にわたる沖縄市役所での勤務を経て、同法人を設立。「文化が人を育み 人がまちを創造する」という活動理念のもと、まちづくりに尽力している。

沖縄市 金城 諭 さん

一般社団法人沖縄市観光物産振興協会事務局長。名桜大学観光産業学科卒、現在まで一貫して沖縄市観光物産振興協会に従事。KOZAフィルムオフィスを立ち上げフィルムツーリズムの推進なども行う。

【司会進行】田中逸郎(元・豊中市副市長)



第1部

歩みを振り返り、未来を考える。

それぞれの“出会い”

—— 皆さん、お忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。司会進行を務めます豊中市の田中逸郎です。どうぞよろしくお願いいたします。

みんな“兄弟”の間柄ではありますが、まずはお一人ずつご紹介かたがた、私から質問させていただきます。

トップバッターは「特定非営利活動法人まちづくりNPOコザまち社中」理事長の照屋幹夫さん。沖縄市役所にお勤めでしたが一念発起、コザのまちづくりを目的としたNPO法人を2008年(平成20年)に設立されました。豊中市との交流にもご尽力くださっていますが、そのきっかけを改めて教えてください。

照屋 私が豊中市を知ったのは、沖縄市職員時代の先進地視察です。まさに一歩も二歩も先を進んでおられる豊中行政を目の当たりにして、大変驚いたことを覚えています。

交流のきっかけとしては、「あしびなー歌舞団」を豊

中まつりに派遣するという業務に携わったことです。かじ取りを市民の手に委ねた新しい豊中まつりの始まりのときで、その大改革にまた驚かされました。以降、まつりにはもう10回くらい遊びに行っています(笑)。

—— ウチナーグチ(沖縄の言葉)で「遊びの庭」という意味のあしびなー歌舞団、新生・豊中まつりを大いに盛り上げていただきました。ありがとうございます。

続いて、「一般社団法人沖縄市観光物産振興協会」事務局長の金城諭さん。沖縄市の観光や物産をはじめ、産業、文化、芸術、スポーツといった多彩な魅力をさまざまな形で発信しておられ、豊中まつりにもご協力いただいています。その経緯をご紹介します。

金城 僕が協会に入ったのは26年前の1998年(平成10年)、ちょうど両市の子どもたちのサッカーチームによる交流がスタートした年で、それが僕にとっても“兄弟”との交流の始まりでした。それ以降も継続的に、兄弟都市提携の周年行事などで親睦を深め、豊中まつりにも参加させていただく関係になりました。そんな中でいつも思うことは、豊中市の皆さんの沖縄市に対する愛情

がすごく熱い。その愛に僕はちゃんと応えられているだろうか、と(笑)。

—— 豊中市の個性的なメンバーたちの愛の“むちゃぶり”をいつも全身で受け止めていただき、ありがとうございます(笑)。

ところで、沖縄市は山形県米沢市や愛知県東海市と姉妹都市であり、東京都町田市とも友好都市提



照屋さん、金城さんがまちづくり・振興をはかるコザの中心地(コザ・ミュージックタウン)

携を結んでおられますが、豊中市を含めて、それぞれの地域性や交流の形はどのように違いますか。

金城 沖縄は「いちゃりばちよーでー」出会えば兄弟ですが、豊中の方々はいきなり友達というか、行政も民間も関係なく、とても気さくに接してくださるので、他のところとはちょっと違います（笑）。

—— 熱いと厚かましいは紙一重ですね（笑）。

それでは、次にヤマトンチュのメンバーにお尋ねしましょう。

一級建築士、福祉住環境コーディネーター、豊中青年会議所の元委員長、そして豊中まつり実行委員会顧問と、数々の肩書を持つ芳村幸司さん。兄弟都市交流を市民の立場から実践してこられました。芳村さん、そのいきさつを教えてください。

芳村 豊中JC（青年会議所）の委員長を務めていたのがそもそもの始まりです。行政主体で行われていた恒例の夏まつりを市民主体のまつりに変えるということで、官民一体となった見直し検討委員会が1996年（平成8年）にありまして、そこへJCの代表として参加し、「おっ、なんかおもしろいな」と思っているうちに気づけば30年近く。いつの間にか、まつりの実行委員長にも祭り上げられていました（笑）。

その間、沖縄市の皆さんには本当にお世話になり、むちゃぶりもしたし、アホなことをいって怒られもしたし、泡盛を飲んでカチャーシーも踊ったし、熱く交流してきました。でも、だからこそ本当に兄弟のような固い絆が生まれたのだと思います。

—— その見直し検討委員会には私も参加していました。芳村さんは「市民主体のまつりをするのなら、市民が責任を取れる組織をつくらあかん」という思いから、2012年（平成24年）に「ラブとよネット」というNPO法人も立ち上げています。

また、兄弟都市提携40周年のときには、行政の記念事業とは別に、市民による交流事業を企画し実施されました。何か苦労話などはありますか。

芳村 何も（笑）。せっかくの40周年だから沖縄市の人たちが一番喜ぶことを、そして自分たちも楽しいこ

とをやろうという話に自然となり、豊中市民を100人ほど連れて沖縄市へ行って、みんなでワイワイ楽しんだだけですから。

—— 行政主導ではなく、芳村さんを中心として両市の市民間交流が生まれたことに意味があります。振り返れば、兄弟都市の歩みにおける一つの画期的な出来事だったと私は思います。

そういえば、県内最大級イベントの「沖縄全島エイサーまつり」で、なぜか芳村さんが屋台でタコヤキを焼いていたじゃないですか。あれはまた一体どうして（笑）。

芳村 見ちゃいられなかったんです、実家がタコヤキ屋だったので。私は来賓として招待されていて、屋台はJCの若い子たちが運営するはずだったのですが、彼らの仕込みやなんかを見ているうちに「ええい貸せ、もう俺が焼く!」と（笑）。



市民交流ツアー客も参加した市民大交流会（2014年11月8日）

—— VIPの大きな花を胸に付けたまま焼いていましたね（笑）。

さて、市民の代表である芳村さんにいろいろとお尋ねしましたが、最後は豊中市魅力文化創造課長の林史洋さん。両市交流の事務局を担当なさっていますが、それ以前から、市職員としてではなく市民ボランティアとして豊中まつりに関わっておられます。林さん、そのきっかけはなんだったのですか。

林 今からちょうど20年前、2004年（平成16年）に市役所へ入職しました。その時の上司が、兄弟都市交流事業では必ず名前が挙がる本岡和巳さんです。豊中まつりや市の野球部の活動を通して沖縄の方々と親しくしておられて、その影響を色濃く受けてしまったわけです。後に異動した教育委員会でもなぜか豊中まつりの担当になり、スタッフ名簿の肩書きはいつの間にか「市民ボランティア」になっていました。林は好きで手伝っているんだから、と（笑）。

—— 好きだからやっている、楽しいから続けている、すてきなことです。

林 はい。今回のこの50周年記念事業の準備で、昨年久しぶりに沖縄市へまいりました。兄弟都市の歩みや沖縄市の歴史などを関係者の方々から改めて教えていただき、まだまだ知らないことが、学ぶべきことがたくさんあると感じ入った次第です。

—— おっしゃる通り、沖縄市は訪れるたびに新しい発見や出会いがありますね。

“兄弟”のこれから

—— さて、ここからは皆さん自由に発言していただきましょう。兄弟都市提携50周年を迎えて今、思うこと、感じること、提言、苦言、放言、何でも結構です。

照屋 では私から。沖縄市は戦中戦後を通して隣国の台湾とも深いつながりがあります。近年は台湾の子どもたちが修学旅行で沖縄市にやってきました、両市の子どもたちが音楽を通じて交流するイベントを開催したりしています。台湾の人たちは大阪が大好きですから、豊中市とも交流できないだろうか、沖縄市と台湾と豊中市のつながりをつくれなだろうか、と実は前々から考えていたのですが、どう思われますか。

—— 豊中市と沖縄市という二つの都市の絆がきっかけとなり、新たな国や都市と結ばれて、人と人とがつながり、交流の輪がさらに広がる。異文化理解、多



文化共生、そして共通項は平和への思い。素晴らしいご提案だと思います。

金城 兄弟都市の交流を今後も長く続けていくためには、若い人たちの参加が不可欠だと感じています。子どもたちはスポーツや音楽を通じて両市を行き来していますけれど、もっと幅広い世代が参加できるよう、文化や芸能といったさまざまな分野で交流できる仕組みをつくれれば、より強い絆が生まれると思います。その絆が、照屋さんがおっしゃるように他の国や都市とつながれば、さらに楽しいですよ。



小学生サッカー交流（2024年3月、沖縄市）

—— つまり、隙間のない世代間交流を構築することですね。そして両市の絆が世代も国境も超えてさらに広がれば、それは都市提携の新しい形となるかもしれません。

金城 沖縄市観光物産振興協会では豊中市の修学旅行生を受け入れていますけれど、逆に沖縄市の修学旅行生を豊中市が受け入れていただければ、

また新たな世代間の交流が生まれると思うのですが、どうでしょう。



コザのまちあるきを体験する豊中市修学旅行生（第七中学校）

—— 両市交流の事務局を担当なさっている林さん、どうでしょう。

林 豊中市は住宅都市でして、実は史跡や文化財は数多く点在しているのですが、沖縄市さんのような観光資源は乏しいのが現状です。ただし、広域へのアクセスは抜群です。電車、モノレール、バスといった公共交通機関、高速道路や国道など充実した道路網、そして空港。ですから、いわばハブ的な都市と



大阪国際空港に着陸する飛行機の様子（千里川土手）

して、豊中市を拠点に関西の各方面を巡っていたくという形であれば、私見ですが実現可能だと思います。

—— なるほど、いいかもしれませんね。両市の今後について、芳村さんはいかがですか。

芳村 私も、兄弟都市の未来は若い世代に託したいと思っています。豊中まつりやラブとよネットであれば、次代の担い手が育ってきています。ただ、私たちが築いてきたネットワークをそのまま引き継ぐのではなく、広げていってもらい必要があると考えています。新たなつながりをつくるということですね。それが今後の課題であり、また楽しみでもあります。

—— 継承と、さらなる発展をめざすということですね。それは両市の交流に限らず、自治体の課題であり目標でもあります。沖縄市は今年、市制施行50周年を迎えられました。先人が培ったチャンプルー文化を、いわば第二世代である照屋さんたちが受け継いで昇華させ、そしてまた第三世代へと受け継がれていくわけですが、照屋さんはどのようにお考えですか。

照屋 おっしゃる通り、先輩たちから受け取ったバトンの後輩たちに手渡すときが来ています。僕たちのところも若い世代が育ってきていますから、これからが楽しみです。

—— 両市の今後や次の世代について、林さんはいかがですか。

林 私も入職当時の上司である本岡さんから兄弟都市交流の素晴らしさを教わり、今こうして50周年の節目にも関わらせていただいていますので、この絆を大切に守りながら、次世代に伝えていくことが私の役目だと思っています。

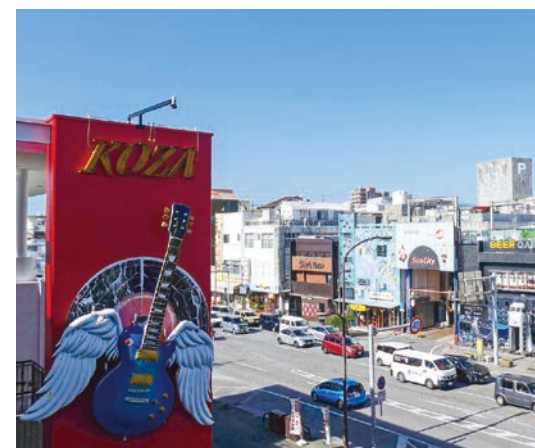
そんな中、昨年度から両市の職員交流がスタートしました。豊中市から沖縄市へ、沖縄市から豊中市へ、互いに若手職員1名が出向しています。

—— 新しい時代はもう始まっていますね。若い人たちが、さらに大きな交流の輪をつくってくれることでしょう。

ここが好きだ！ここが嫌だ！

—— それでは最後のテーマです。兄弟都市のここが好きだ！ここが嫌だ！さあ、順番にどうぞ。

芳村 何時になっても店が開いていて、夜の11時だというのに人が集まってきて、みんな泡盛が大好きで、電車がいないので終電を理由に帰ることもできず、もう60歳を超えているので正直しんどいです（笑）。まあ冗談はさておき、沖縄市はいろんな意味でディープだと私は思っていて、基地の門前町としての歴史があるからなのか、まさに独特の重み、深みを感じます。うまくいえませんが、多様な表情やたたずまいが一つのまちに共存しているような気がして、そこがとても魅力的です。



米軍基地につながる沖縄市「ゲート通り」

林 沖縄市の方々とお会いすると、あっという間に時間が過ぎてしまい、美しい海を見ることもなく帰ってくることがしばしばですが、訪れるたび好きになります。自然もまちも人も、沖縄市にしかない魅力にあふれています。去年は3回行って「行きすぎちゃうか」と言われることもありましたが、私はまた行くでしょう（笑）。

—— 青い空と海、島唄やエイサーをはじめとする芸能文化、おいしい料理と泡盛、コザンチュの温かい心、そして基地とそれにつながる歴史。全て沖縄にし

かないものです。今日は基地問題などには言及しませんが、そうした一言では語り尽くせない、まさにチャンプルーな魅力、単なる観光都市ではない独特の深み、それが沖縄市なのだというお二人のご意見です。私もまったくその通りだと感じます。

さあ、次は沖縄市さん、どうぞ。

金城 豊中市の嫌なところは、暑すぎるところ！豊中まつりが開催される8月なんて沖縄より暑いですから。そして、その暑さに負けないくらい豊中の方たちの気持ちも熱い！そっちの熱いは大好きです（笑）。皆さん个性的で楽しくて魅力的で、先ほど観光資源が乏しいというお話がありましたけれど、豊中の皆さんが観光資源じゃないかなと僕は思っています。

—— 豊中は人が資源——とてもうれしいお言葉ですね、ありがとうございます。

照屋 豊中市さんのことは兄弟の兄貴分だと思っています。行政の在り方にしても、市民との関わり方にしても先進的で、計画性がある、安定感を感じます。計画して行動するなんて、コザンチュが一番苦手なことかもしれません。昔も今も学ぶべきところがたくさんあります。

—— ありがとうございます。私たちも沖縄市の皆さんから多くのことを学んでいますよ。さて、それでは第1部の締めくりに、皆さん一言ずつお願いいたします。

芳村 これからのことは若手に任せました。兄弟の皆さん、思い切り遊びましょう！

林 役人ですから異動は避けて通れませんが、どこへ行こうとも、市民ボランティアとして頑張ります！

金城 もっともっと熱い兄弟愛で応えます！

照屋 継続は力なり。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

—— こちらこそ、どうぞよろしくお願いいたします。

「コザ学校」から学ぶ ～兄弟都市交流に携わって～

田中 逸郎
元・豊中市副市長

始まりはコザロックだった。沖縄市の中央パークアベニュー¹にあったライブハウス。1986年、沖縄戦の取材²で訪れた時だった。案内してくれた沖縄市職員のMさんは、半分ウチナーグチ（沖縄言葉）、半分英語で入場料を尋ねドル札で支払った。本土復帰して10年以上が経つのドル?…中に入ってもっと驚いた。強烈なビートが大音量で響いていた。迫力あるライブ演奏にしばし唖然となる。こんなロックは聴いたことがなかった。店内にいる客はほぼ米兵たち、歓声をあげ体を揺らしている。僕が「アメリカ世ですね」と聞きかじった生半可な知識で言うと、Mさんは「豊中で沖縄戦の展示会やって聞いたけど」とポツリ…若造の僕を諭しているのか、励ましているのか、ただほほ笑むだけだった。嘉手納基地の門前町・コザの洗礼をいきなり大音量で浴びたこと、これが僕の交流の始まり、きっかけである。

それから10数年後、「沖縄

全島エイサーまつり」を訪れた。沖縄県内各地のエイサーが披露される晴れ舞台だ。毎年、あふれかえる観客の前で、先祖の霊を供養するという格式を守るものからニューウェーブのものまで、次々とエイサー隊が登場する。伝統芸能が、変貌しながらも脈々と息づいていることを目の当たりにしてきた。1999年には、本土のエイサー隊が沖縄市のご尽力で出演することができた。豊中まつりに沖縄市青年会のエイサー隊を招き、舞台での演舞と道ジュネー（まちを練り歩きながら演舞）をしていただいたこともある。



「沖縄全島エイサーまつり」に出演した本土のエイサー隊「琉鼓会」（1999年）

※1 かつては「センター通り（BUSINESS CENTER STREET）」と呼ばれる商業地・歓楽街だったが荒廃し、1985年に再開発事業で「中央パークアベニュー」に生まれ変わった。1987年には建設省（現・国土交通省）から手づくり郷土賞を受賞。シャッター通りとなった時期もあったが、現在は若手起業家らの力で活気が戻ってきている。

※2 豊中市は1983年に「非核平和都市宣言」、以来平和事業に取り組んでいる。担当職員だった筆者は、1986年、沖縄戦をテーマにした戦争資料展を開催するため、沖縄市へ協力依頼と取材で訪問した。

さらに「ピースフルラブ・ロックフェスティバル」。かつて闘牛場だった沖縄市会場で、コザロックの大御所や若手が演奏とパフォーマンスを繰り広げてきた。豊中まつりのコンテストで選ばれた本土のバンドが出演すること、また、沖縄のバンドが豊中まつりに出演することも恒例となっている。



1988年に開催された「ピースフルラブ・ロックフェスティバル」

現在は「コザ・ミュージックタウン」³1階の屋外広場が会場となり、多種多様な人たちが集う。オーバー・オジー（高齢者）もいれば、親子連れの家族、もちろん米兵やその関係者たちもいる。みんな、ガツンと響いた演奏へは歓声を上げる…ロックはコザに根付き、多世代・多国籍に広がっている。本土ではありえないことだ。

この他にも、挙げるときりがないのだが、三線が奏でる沖縄民謡や組踊、沖縄音階を取り入れたニューミュージックなど、さまざまなチャンプルー文化を沖縄で体感し、豊中市にお招きしてきた⁴。沖縄芸能は、今や豊中まつりに欠かせない風物詩となっている。

これら全て、コザの方々との出会いとつながりのおかげだ。多様な交流の積み重ねから、いつしか僕の中で戦争と平和、チャンプルー文化と人々の暮らしがひとつの輪の

ように結び付いていき、兄弟都市交流の価値は「多様性と共生」にあると思うようになった。違いがあっても困難を抱えていても、いや、違いがあつて困難を抱えているからこそ、人はつながっていくことができるのだと。

「霊石」と「豊中学校」が結んだ交流

交流の歩みを振り返ろう。自治体間の交流提携は、姉妹都市と呼ばれる例が多い。両市は違う、兄弟都市だ。「いちやりばちょーでー」とは沖縄の言葉で「出会えば兄弟」という意味だが、豊中市と沖縄市が出会い、ちょーでー（兄弟）となったのだ。この、なんとも不可思議な関係はどのようにして生まれたのか。

そのきっかけは、1964年までさかのぼる。本土復帰前のコザ市（現・沖縄市）の大

※3 多目的音楽施設。2007年、沖縄市が音楽によるまちづくりを展開するための拠点施設として開設した（中の町再開発事業の一環）。

※4 豊中市に招いたプロ・ミュージシャンには、照屋林助さん、照屋林賢さん・上原知子さん（りんけんバンド）、知名定男さんとネーネズらがいる。この他、ウチナーグチ（沖縄言葉）の芝居を立ち上げた玉城満さんや青年会のエイサー隊にも来ていただいた。

山朝常市長と豊中市の竹内義治助役（後に豊中市長）の出会いから始まる。沖縄戦で3人の子どもを亡くしている大山コザ市長⁵は、沖縄戦で亡くなった豊中出身の兵隊の遺族へ、形見・遺品のかわりとして、摩文仁の海岸で石を集め「霊石」とし、仏桑華（ハイビスカス）を添えて豊中市に届けた。

「霊石」のプレゼントに深く感銘を受けた竹内豊中市助役から、返礼のプレゼントが大山コザ市長に提案された。コザ市職員を豊中市に受け入れ、本土復帰に備えてまちづくりに必要な人材育成を支援するという申し出だった。こうして1965年からコザ市職員の受け入れが始まった。コザ市では「豊中学校」と名付けられ、毎年、コザ市職員は3か月から長い人で1年以上にわたり、豊中市職員と共に働きながら地方自治制度を学んだ。この関係から、いつしか「ちよーで一（兄弟）」と呼び合うようになったのではないか⁶。他の自治体交流では考えられない稀有な取り組みで、延べ100人以上のコザ市職員が「豊中学校」に入学した。卒業生の多くはコザ市の幹部となり、1972年の本土復帰直後からいち早く自治体行政に取り組むことができたという。

こうして兄弟の契りが結ばれていった。そして1974年、コザ市が美里村と合併して沖縄市となった際に、兄弟都市提携が結

ばれた。先人たちの平和への思いとそれをつなげ確かなものにしていこうとする人材交流の取り組みから兄弟都市が誕生したのだ。「霊石」と「豊中学校」はその象徴、この年に就職したばかりの僕は何にも知らなかったのだが。

交流のルーツを探る「霊石」

そもそも「霊石」とは何だろうか。沖縄市史に掲載された北村毅さんのコラム（16ページ参照）によると、「死没地と郷里をつなぐ戦死者の魂の依り代」として、遺骨の代わりに戦没地の石や土を持ち帰ることから始まったという。それが、本土の遺族の思いに



霊石

※5 後日談になるが、1971年に豊中市からコザ市に贈られた彫像「少年の像・合奏」の除幕式での出来事。彫像には男の子2人と女の子1人が合奏している姿が描かれており、大山市長は、亡くされた子どもの数も構成も同じことから、涙があふれて止まらなかったという。「少年の像・合奏」は「沖縄こどもの国」のメインゲート付近に設置されており、今も平和の大切さを語りかけている。

※6 「豊中学校」に入学したコザ市職員も、受け入れ指導した豊中市職員も全て男性だったことから互いを「兄弟」と呼び合ったのだろう。都市間交流提携を姉妹とか兄弟と表現するのは、ジェンダー平等の観点から気になる方もいるかもしれない。近年は「友好都市」という名称が多いようだ。

えようという「沖縄の霊石を贈る運動」へと発展したとある。こうした草の根の活動があるなか、1964年、大山コザ市長は「沖縄戦没者慰霊奉賛会（現・沖縄県平和祈念財団）」の協力のもと、摩文仁の海岸で石を集め、白木の箱に収めて豊中市へ贈っ

た⁷ということだ。

この北村毅さんのコラムを読んだとき、本文に出てくる「沖縄戦没者慰霊奉賛会（現・沖縄県平和祈念財団）」という文字が僕の中に飛び込んできた。1986年の沖縄戦の取材の際、沖縄市の紹介状を持って、

「霊石」としてのサンゴ石

そのはら けん
園原 謙

（前沖縄県立博物館・美術館主任学芸員）

1958年国頭村生まれ。琉球大学卒。平和祈念資料館を皮切りに、県文化財保護行政、博物館行政（新博物館建設）を経て新平和祈念資料館学芸主幹に着任。2009年から今日まで JICA のカンボジアの「平和博物館」の人材育成に係わる。県立博物館・美術館副参事兼博物館班長で2019年定年退職。2024年3月で博物館の主任学芸員の再任用満了。現職沖縄県文化協会事務局長



多くの命の喪失や大惨事が起きた場所には、その地で失われた命を鎮魂するために鎮碑が建立される。沖縄ではそれを「慰霊塔」と呼ぶ。県内には46都道府県戦没者の慰霊塔をはじめ集落、市町村、学徒、機関単位で数百基の慰霊塔が建つ。魂魄の塔（1946年2月）とひめゆりの塔（同年4月）はその嚆矢である。戦後すぐに着手できなかったのは人々が数か月間、住民収容所に隔離されことによる。生還した人々が最初に手がけたことが収骨作業と慰霊塔づくりだった。

戦前の沖縄の死者の弔い方は墓中内に

遺体を置き、数年後洗骨し納骨器（すしがめ甕）に収納する習わしだった。厨子内の遺骨は33年を経て大きな石棺（沖縄では「池」と呼ぶ）へ移し、骨は石棺内で先祖たちと一体化する。そこはまるで小さな白い砂浜のようであった。学生の頃、門中墓（もんちゅうぼか、父系親族の構成員の墓）の民俗調査時の印象だ。

戦前生まれの大山朝常さんが白いサンゴ石を遺骨の代替物としたのは、色形も骨に近似していることに加え、沖縄の葬礼の文化的背景が影響したように思える。故郷から遠く離れた南の地で、無念の死を遂げた旧日本兵たち。遺族の心情に寄り添ったチムグクル（肝心）が平和文化交流の原動力になった。



2000年に新資料館が開館した。その西側には1975年開館した旧資料館があった。（2000年撮影）

※7 豊中学校1期生の幸地さんの手記によると、「霊石は豊島公園（筆者注：豊中市の公園で、豊中まつりの会場）内に慰霊塔を建立して納められ…」とある（同人誌『談笑』沖縄市・談笑会編集・発行、2011年第15号）。兄弟都市提携50周年を迎えるにあたって、豊中市は霊石の追跡調査を行っているが、現在のところ新資料は出てこない。

この財団が運営する「沖縄県平和祈念資料館」^{※8}を訪れている。そして、当資料館学芸員の園原謙さんのご尽力で、沖縄戦の写真や資料などを借用することができた(沖縄市の紹介・仲介と同館からの資料提供がなかったら、戦争資料展は開催できなかっただろう)。

そうだ、「沖縄県平和祈念資料館」に霊石の資料があるかもしれない。さっそく問い合わせたが、ないとの返事。次いで園原さんに連絡、2023年、およそ37年ぶりに再会した。当時「財団法人沖縄県戦没者慰霊奉賛会」職員だった園原さんは、再会時には那覇市にある「沖縄県立博物館・美術館」の主任学芸員、霊石についての調査をお願いした。その結果、大山コザ市長が設立当初の奉賛会の理事をしていたことなど貴重な情報を提供いただいたが、残念ながら、1964年当時のコザ市の霊石収集に関する資料は残っていないとのことだ。

いろいろ調査を重ねてきたが、今、改めて思う。沖縄戦をテーマに戦争資料展が開催できたのは「霊石」のおかげだ。沖縄市の取材協力も、平和祈念資料館からの資料借用も「霊石」のご縁から。「霊石」は戦争と平和、過去と現在、人と歴史をつなぐ象徴として、語り継いでいかなければならない。

交流のルーツを探る「豊中学校」

霊石の調査と並行しながら、文献・手記などをもとに「豊中学校」の調査を開始。2023年9月、第1期生の幸地光英さんと面談することができた。幸地さんは1936年生まれ、測量技師として米軍基地整備の仕事を経て、1960年にコザ市に入職。1965年、「豊中学校」で6か月にわたり都市計画や区画整理事業業務に従事して研鑽^{けんさん}を重ねたという。「豊中のご恩は一生忘れることはない」と熱く語る幸地さん、その内容を手記にまとめている^{※9}。「豊中学校」卒業後、幸地さんはコザ市の幹部になられご活躍、沖縄市建設部長などを歴任された。今もお元気で精力的に活動されている。

「豊中学校」は1975年に閉校したが、両市職員による共同研究をはじめ、相互職員派遣交流など、現在も「人材交流」は続いている。

持続的交流に必要なこと

兄弟都市提携以降、「青少年少女合唱交歓演奏会」の開催をはじめ、シーサー像の贈呈(沖縄市から豊中市へ)、壁画の贈呈(豊中市から沖縄市へ)ほか、さまざまな取り組みがなされてきた。しかしながら、これ

「豊中学校」から学んだまちづくり

こうち みつひで
幸地 光英

(元沖縄市建設部長)

1936年、コザ市生まれ。首里高校卒業後、測量会社技師として米軍基地整備に従事。1960年、コザ市に都市計画技手として入職。道路台帳・住居表示の整備、都市計画構想の策定などを担当。経済部長や企画部長、建設部長などを歴任した。



沖縄市が市制施行50周年を迎えた今、市職員として長年まちづくりに携わってきたことが走馬灯のようによみがえってくる。その中でも特に忘れられないのは、1965年12月、豊中市に「まちづくり研修職員」の1期生として派遣されたことだ。

派遣にあたってのコザ市の負担は一切なく、手当も宿泊先も豊中市が負担という好条件に、都市計画課区画整理係長だった私は身が引き締まる思い。しかも3か月の予定が、豊中市からの提案でさらに3か月延長いただき、感謝に心が震えた。厚遇と期待に応えるべく、土木技術だけではなく、地方行政全般について寸暇を惜しんで学び、半年で収集した資料はスクラップ帳で

23巻に及んだ。私の貪欲さに豊中市職員が音を上げる始末、懐かしい思い出だ。研修後に真っ先に取り組んだのが、沖縄県内初の道路台帳の整備と住居表示の導入だった。基地依存経済からの脱却をめざす「国際文化観光都市」づくりの第一歩を踏み出すことができた。

振り返れば「豊中学校」は私の公務員人生のターニングポイント。ゼロからのまちづくりに、豊中市からご支援・ご尽力いただいたことに万感の思いを込めて感謝をささげるばかりである。現在は、その後の両市交流に胸を熱くし、誇らしく見守っている。今年は、豊中市の中学校から修学旅行生が訪れたと聞いた。今後の交流に弾みをつける契機となることを願ってやまない。



「豊中学校」当時の様子(豊中市役所)

らは行政間交流にとどまりがちで、徐々に交流のポテンシャルが低下していった。持続的交流を続けていくためのエネルギー源、それは「霊石」と「豊中学校」が象徴する平和への思いと人材交流だが、この源泉が、両市市長の交代や時代・状況の変化によっ

て枯渇し始めたのだ。そもそも、兄弟都市交流のルーツや意義について、両市の市民に十分には伝わってこなかったのだろう。なぜなら、市民はその時々交流事業を享受する対象・客体としてしか位置づけられてこなかったからではないか。

※8 来館当時は摩文仁海岸の端にあったが、2000年に新資料館「沖縄県平和祈念資料館」が開館。現在は、同資料館は県直営で、「平和の礎」や霊域や公園全体の「県営平和祈念公園」は「公益財団法人沖縄県平和祈念財団」が指定管理者として運営管理している。

※9 前掲「同人誌『談笑』2011年第15号」に「豊中市に地方自治を学ぶ」と題し、手記が掲載されている。本書を編さんするにあたって、大変参考になった。

市民は交流の価値を創造する「主体」。交流の源泉を枯渇させず、さらに豊かにしていくことができるのは市民の活動だ。交流の真ん中に位置づけられなければならない。これは、コザのチャンプルー文化からヒントをいただき、学んだことだ。

チャンプルー文化 ～「コザ学校」から学ぶ～

チャンプルー文化についての研究文献もあるが、ここでは、その大御所でコザを拠点に活動してきた照屋林助さん¹⁰のコメントを紹介する。

「古典の継承に躍起で身動きならなかった那覇や首里のような都会とは違って、ここいら中部は、祭る神様に名前すらないようなところ。でもそのぶん何でも許し、珍しいものは積極的に取り入れて、みんなで楽しむという土地柄。沖縄のチャンプルー文化はここが発祥の地なんです。神様が何でもやりなさいという土地なんですからね」¹¹

コザは、^{せいさん}凄惨な沖縄戦を生き延びた民衆、いろいろな出自や困難を抱えた人々が集まってできた嘉手納基地の門前町だ。「神様が何でもやりなさいという土地」ということは、

できることは何でもやらないと生きてこれなかった地域ということでもある。そうせざるを得なかった多様な人々の心の拠り所として、古典も民謡も洋楽も取り入れごちゃまぜにして楽しむチャンプルー文化が生まれたのではないか。価値観も生き方も違う（なかには国籍も異なる）多様な人々が、違いを認め合って共に生きる糧として育んできたのだろう。チャンプルー文化は、今も新たな若者のさまざまな表現活動を受け入れ変化し続けている。

こうしたコザの地に暮らす方々との出会いと交流から、本当にたくさんのことを学んだ。共通しているのは「誰も排除しない、みんな認め合って生きていこう」という思いとぶれないスタンスだ。コザンチュ（コザで生きてきた人々）の魂に刻まれているのではないか。多文化共生については沖縄市の「コザ学校」から学ぶことがいっぱいある。これこそが交流のキーとなるのではないか。そう言うと、彼らは異口同音に「ちょーでー」だからね、いつでもおいでよ、とほほ笑む。

市民交流の構築

1997年、市主催の「豊中まつり」を思い切って変えた。盆踊りと夜店で構成する夏祭りだったが、主催を市民実行委員会

※10 1929年生まれ。音楽家・漫談家として幅広く活動し、沖縄芸能へ多大な影響を与えた。芸能活動のかたわら、埋もれかけていた沖縄民謡の発掘などにも尽力。りんけんバンド・照屋林賢はご子息。2005年逝去。その功績をたたえ、毎年「コザ・てるりん祭」が開催されている。

※11 「海の民の讃歌 照屋林助・林賢親子の沖縄音楽グラフィティ」（室矢憲治、朝日ジャーナル1991年10月4日号）より。



多彩な沖縄芸能が、シーサーに乗って豊中まつり会場（豊島公園）にやってくる（1997年の豊中まつりポスター）

に変え、沖縄芸能を^{しょうへい}招聘したのだ¹²。豊中の祭りに沖縄芸能？ と、あちこちから戸惑いや反発の声が上がったが、ふたを開けてみると、この「新生・豊中まつり」は大好評。10万人以上が集まる祭りへと発展していった。沖縄のメディアでも紹介され、沖縄からの来訪者、在阪の沖縄県人、沖縄大好き人間らが集い、豊中市民と交流する夏の一大風物詩となっている。

この「交流と興隆」をつくりあげたのは、企画から当日の運営まで担う市民ボランティアたち。実行委員会に結集した豊中市民の思いと熱意である。声高に「共生」を訴えなくても、市民の力と協働によって「チャンプルー文化」は海を越え交流も広がっていった。両市の少年サッカーチームのホー

ムステイ交流など、豊中まつりをきっかけに新たな交流も生まれている。2014年の兄弟都市提携40周年では、行政主催による記念事業だけではなく、市民主催の交流事業が展開されたことは特筆すべきこと。市民主体の自主的なネットワークの輪が広がり、交流が根付いてきた証ではないか。

この若者を中心とする多文化共生・多世代交流の取り組みは、行政間交流も再点火させ、両市職員による共同研究・派遣研修、ITを活用した小学校交流などが取り組まれている。

平和学習・交流

もう一つの交流の柱が、平和学習である。豊中市新成人の沖縄市派遣、中学生平和大使相互交流事業、沖縄から講師を招いての講演会¹³などが取り組まれてきた。豊中まつりに合わせ、市民主催の「コザ暴動を考える会」（講師：古堅宗光さん）が開かれたこともあった。今年は、兄弟都市提携50周年記念事業として「沖縄と豊中から考える戦争体験の継承」と題したシンポジウムなどが開催された（39ページ参照）。

これらの取り組みを通して感じたことは、戦争についての本土と沖縄の認識の違い、受け止め方の違いだ。本土では、戦争は悲惨な出来事だった、と過去形で語られる

※12 豊中市の先輩職員、本岡和巳さんのアイデアと熱意によって実現した。新生・豊中まつりの生みの親である。沖縄の知人も多く、いわばチャンプルー文化の申し子。コザ学校の首席卒業生といえるだろう。

※13 最近では「沖縄戦と戦後復興」（講師：沖縄市市史編集担当・恩河尚さん）、「ひめゆり学徒隊の＜戦後＞を考える」（講師：ひめゆり平和祈念資料館・仲田晃子さん）などを開催している。

ことが多い。かくして、あんな時代に生まれなくてよかった、今は平和でよかったとなる。沖縄は違う。沖縄戦は、体験していない戦後生まれの世代も含めて、過去の出来事としてくり封印することはできないこと、今の自分につながることで語られる。過

文化と平和行政

おんが たかし
恩河 尚

(沖縄市 市史編集担当)

琉球大学法文学部史学科卒(日琉史専攻)。1983年、沖縄市教育委員会文化課採用(市史編集担当主事)後、企画部平和文化振興課副主幹(市史編集担当)、経済文化部文化振興課副主幹(市民小劇場あしびな一副館長)、沖縄市総務部総務課主幹(市史編集担当)を経て、2012年、総務部次長兼市史編集担当主幹。2014年に定年退職。現在、会計年度任用職員(総務課市史編集担当)



豊中市を初めて訪れたのは、沖縄戦の講演を依頼された時だと思う。その際、頭をよぎったのは沖縄戦の悲惨さだった。というのも沖縄観光の始まりは、戦跡巡りという形で復帰前後からブームのように行われていたからである。当然「またか」という感想をもたれるのではないかという不安があっ



ヒストリート外観

た。そこで思いついたのが、沖縄戦と本土との関係である。一例を挙げると、

去形か現在進行形か…この違いは大きいのではないか。

ここで1枚の写真をご覧いただきたい。

これは、嘉手納基地へと続くコザ・ゲート通りの写真ではない。大阪国際空港(伊丹空港)周辺の、通称「空港通り」のひと

沖縄戦は「ダウンフォール(日本上陸)作戦」の前段として位置づけられ、本土攻撃のため沖縄に飛行場やその関連施設を構築するというのが米軍にとっての沖縄戦であった。そのために多くの兵士が沖縄で命を落とし、その中に大阪府出身の方々2,300余名も含まれていた。ちなみに、私の拙い話をいつも最前列で聞いていただいたのが田中逸郎元副市長である。

田中さんも指摘するように、基地の門前町として発展したのがコザ市(現・沖縄市)であり、それは沖縄歴史上、類を見ない都市の成立であったが、その背景は沖縄戦にあった。そこに着目し、私たちは戦後をテーマにした沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」を立ち上げた。

以前に文化行政の指針ともいうべき「文化振興ビジョン」の編集を担当した時、ご指導いただいたのが、元豊中市職員だった中川幾郎先生(帝塚山大学名誉教授)。「ヒストリート」のコンセプトの一つは、先生から教わった「文化によるまちづくり」である。ただ、田中さんらが取り組んできた「地域自治、市民との協働」などについて、私たちはまだその域に達していない。

コマ、当時は「テキサス大通り」といわれていた。大阪国際空港は、敗戦からしばらくは米軍基地だったのだ。そう、コザと同様(規模は違うが)、豊中も基地の門前町だったのだ。1952年に本土は主権を回復し、その後空港は米軍から返還された。忘れてしまっている人、知らなかった人も多いだろうが、みんなで考えたい。戦争や基地について、豊中にとっては過去のこと、歴史の年表に載せておしまいでいいのだろうか。自分たちとは異なる時間を生きてきた人々、生きざるを得ない人々に思いをはせる、そこから共生の途を拓いていく取り組みが始まるのではないか。



大阪国際空港「テキサス大通り」、写真提供:北摂アーカイブス(鹿島友治寄贈)

https://hokusetsu-archives.jp/dbs/page?id=T_00215520

これからも、平和学習と交流を通して戦争体験から学ぶ、現状を知ることを行っていくことが大切だ。兄弟都市交流の源泉は

「平和と人材交流」にあるのだから。

おわりに ～共生と自治のまちづくり～

改めて振り返ると、交流のキーとなったのは「人と文化が織りなす共生」の取り組みだった。これがなければ、時の首長のパフォーマンスに終わるか、一部の人たちの親善交流に陥ってしまっただろう。自治体同士の交流なのだから、自治体を構成している市民も行政も共に参加することが大切だ。自治とは「自ずと治まる」ことではなく、「自ら治める」という自主的・主体的な営み、この

自治の力によって交流は活性化し根付いていく。誰もが、お互いの違いや多様な考え方を認め合いながら、共に生きることができる社会をつくる、これが交流の意義であり、目標ではないか。

市民は交流の価値を創造する「主体」。兄弟都市の源泉(平和と人材交流)に、市民による新たな湧水(多様性と共生)が注ぎ込まれたおかげで、豊中市と沖縄市は、今やどちらもが兄で

あり弟でもある関係になった。

そして、今、兄弟都市提携50周年を迎えた。未来へとつなぐ主体は、私たちだ。

筆者: 田中 逸郎

豊中市役所において、広報広聴・企画・文化・国際交流・都市デザインなどの公共政策を担当。市立生活情報センター館長、市民活動課長、教育委員会生涯学習推進室長を経て、2007年4月に政策企画部長。2010年7月から2018年6月まで豊中市副市長。2008年には、大阪市立大学大学院・創造都市研究科博士後期課程単位取得満期退学。現在、NPO政策研究所理事、コミュニティ政策学会理事、自治体学会評議員、滋賀医科大学非常勤講師など。著書に『NPOと行政の協働の手引き』(共著、大阪ボランティア協会)、『地域自治のしくみと実践』(共著、学芸出版社)、『外国人と共生する地域づくり』(共著、明石書店)、『地域自治のしくみづくり』(共著、学芸出版社)ほか





離れていても PART.2心はひとつ 海を越え、時を超えて、 未来につながる兄弟都市の座談会

第2部 今を見つめ、夢を語ろう。

それぞれの“出会い”

—— 皆さん、お忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。

第1部の座談会と同様、みんな“兄弟”の間柄ですが、まずは私からお一人ずつ質問させていただきます。

最初は「豊中まつり実行委員会」実行委員長の田中裕気さん。第1部にご出席いただいた芳村さんの後任でいらっしゃいますが、これまでのいきさつを教えてください。

田中 豊中まつり先代実行委員長だった芳村さんは僕にとって豊中JC（青年会議所）の先輩でもあり、その芳村さんに誘われてまつりに関わるようになりました。いきなり沖縄にも連れて行かれ（笑）、沖縄市の皆さんに紹介していただき、沖縄JCの方々と仲良くなって、気づけば実行委員長として今ここに座っているという状況です（笑）。

—— 両市のJCの交流も30年くらいになるそうです

から、もう抜けられませんね（笑）。豊中まつりにおいては、これまでの内容を踏襲するだけでなく、常に新しいことにチャレンジなさっているとお見受けしますが、いかがですか。

田中 そういっていただけると嬉しいです。まつりを通じて、豊中市と沖縄市の交流の輪に新しい人もどんどん入ってきてほしいと思っています。そして幅広い世代の人々をつないで、隙間のない、切れ目のない、一つの大きな市民交流の輪をつくれたらいいなと考えています。

—— 素晴らしいお考えだと思います。ありがとうございます。

続いて、同じく豊中まつりからスタッフの吉田剛之さん。自他ともに認める沖縄大好き人間で、ネットワークも大変広く、まつりの市民ボランティアの枠を超えて多方面で活動し、交流しておられます。吉田さん、その経緯を教えてください。

吉田 特別なことは何もなく、多くの人たちと同じように僕も、初めて訪れた沖縄の青い海や空に感動し

たことがきっかけです。そこからさらに深みに、沖縄市の魅力にはまっていったのは、沖縄市の皆さんとお会いして、その明るさや温かさに魅了されたからです。

—— みんな同じですね。豊中まつり以外では主にどのような活動をしていらっしゃいますか。

吉田 沖縄市も地元の豊中市も大好きなので、SNSなどを活用して二つの都市の魅力や情報を発信しています。相互交流というか、両市民が互いのまちに行ってみたいと思ってもらえるように、いろんな人の力を借りてやっています。

—— ネットワークはますます広がりそうですね。ありがとうございます。

それでは次に、沖縄市文化芸術課の課長、高安高章さん。兄弟都市交流の担当課長に就任されてまだ日が浅いとのことですが、これまでの感想などをお聞かせください。

高安 半世紀にわたる歴史の重みをひしひしと感じているところです。両市の友好と信頼の絆、兄弟愛、また郷土愛、これまで培ってきたものを大切にしながら

【司会進行】田中逸郎（元・豊中市副市長）

ら次の時代、次の世代につなげていきたいと考えています。

—— ありがとうございます。市民も職員もつながるといいですね。

最後は、宮島真一さん。コミュニティシネマと僕は勝手に呼んでいますが「シアタードーナツ」の代表であり、「ちゃんぷる〜沖縄市大使」であり、タレントとして地元のテレビやラジオ、イベントなどでもご活躍です。宮島さん、その経緯をご紹介ください。

宮島 僕が生まれた1973年（昭和48年）は、コザ市最後の年です。翌年からは豊中市さんのサポートもあって沖縄市として歩んでいくわけですが、多種多様な文化や価値観が共存し融合する、まさにチャンプルーなこのまちが今の僕をつくったという気がしています。



豊中まつりフィナーレのカチャーシー

—— 多彩な経歴をお持ちだと思いますが、具体的にはどのような活動をしてこられたのですか。

宮島 たいしたことはしていませんよ。大学卒業後、仲間と音楽をやったりしていましたが、県内最大級のイベントである「沖縄全島エイサーまつり」の司会を務めたことが契機となって、その後、FMコザでパーソナリティーをしたり、RBC琉球放送の「コザの裏側」と

いう番組でMCをしたり、沖縄市観光物産振興協会のまちあるきガイドをしたり。そんな中でいろんな人たちと出会い、交流が広がっていきました。

—— そして、2015年（平成27年）に沖縄市で、手作りドーナツが食べられるカフェを併設した、「街のコミュニティシアター」と銘打つ「シアタードーナツ」をオープンするわけですね。コザがシャッター通りというか活気を失った時期もありましたが、今、再び息を吹き返し、活性化しつつあるのは、宮島さんたち若手起業家の力が大きいのではないのでしょうか。



にぎわう沖縄市商店街の様子（一番街・パークアベニューなど）

つながり、そして広がり。

—— 兄弟都市の原点には平和への思いがあります。1964年（昭和39年）にコザ市の大山市長が、沖縄戦で亡くなった豊中市の兵士の遺族に「霊石」と「仏桑華（ハイビスカス）」を贈っていただきました。これが両市交流のきっかけであり、翌年から豊中市はコザ市の職員を招き、互いに学び合ってきました。観光促進でもなければ産業振興でもない、まさに人と人との、いわばマブイ（魂）のつながりと、それを確かなものにするための人材交流から始まったのです。この関係を皆さんはどのように捉えていらっしゃるでしょうか。

田中 豊中まつりの関係で僕が初めて沖縄市に行ったとき、皆さんが「めんそーれ」ではなく「おかえり」と迎えてくれました。「初めてでも兄弟だから、おかえりだよ」と。もう一瞬で沖縄市が大好きになりました。都市提携と聞いて型通りの、偉い方の交流を想像していたのですが、豊中市と沖縄市の間には、培われてきた市民同士の確かな絆がありました。これからも大切にしたいと思っています。

吉田 沖縄へ行ったことがあるという豊中の人は大勢いますが、沖縄市でふらりとお店に入って何気なく会話をすると、「豊中市へ行ったことあるよ」「豊中まつりに行ったことあるさあ」という人に遭遇することが意外と多く、日常でも両市の交流を実感します。その一方、兄弟都市だということをまだ知らない両市民も大勢いらっしゃると思うので、このつながりをもっと広げていきたいですね。

高安 豊中市の方々が沖縄市に魅力を感じてくださり、この地を訪れてくださることが、私たち自身、郷土の魅力とは何なのかを改めて考えるきっかけになっています。先進の都市である豊中市との触れ合いを通じて沖縄市の文化や歴史を見つめ直し、再発見することにつながっていると私は思います。これも一つの“兄弟都市効果”といえるかもしれません。

宮島 皆さんもよくご存じの元沖縄市職員、中根勉さんからよく聞かされていました。彼が僕の映画館に来て、映画を見ずにビールだけ飲みながらいうわけです



豊中まつり実行委員が、沖縄市を訪問した時の様子

よ、「今度、豊中市のメンバーが来るんだよ」って、本当にうれしそうに。行政間の交流なのに、仕事なのに、まるで友達が遊びに来るような、まさに離れていた兄弟が帰ってくるような。なんだか、それが全てを物語っているように私には思えます（笑）。

“兄弟”のこれから

—— 皆さん、ありがとうございます。第1部の座談会でもさまざまなご意見が出ました。沖縄市は、米軍基地の門前町という歴史も含めて、まちに独特の重みや深みを感じる。単なる観光都市ではない、まさにチャンプルーでディープな魅力にひかれる。それは物見遊山な気持ちを超えている。これまでの兄弟都市交流からコザの歩みを学んできたから……基地問題については、平和交流事業など別の機会に改めてするとして、とにかく豊中市は沖縄より暑いぞ、びっくり。でも、それ以上に人が熱い。これといった観光資源のないベッドタウンというが、いやいや人が資源でしょ！（笑）。

また、今後は兄弟都市の絆を深めるだけでなく、多国籍、多世代に広げて、国内外の多様な人たちとつながるための、いわば交流の起点になれないかというご意見もありました。

兄弟都市の今後について、皆さんはどのようにお考えですか。

田中 観光地としての沖縄は知っていても、コザの歴史や現状については、恥ずかしながら知らないことがたくさんありました。いや、今もまだたくさんあるでしょう。でも、少なくとも僕がそのことを認識できたのは、沖縄市の“兄弟”たちから学ぶことができたからで



沖縄市とは違う豊中市のまちなみ

す。両市の今後を考えるためには、もっと沖縄のことを知り、学ぶ必要があると思っています。

吉田 初めて沖縄市を訪れてまちを歩いたとき衝撃的だったのは、「ここから先は米軍基地だから撮影不可です」という境界線の存在。もちろん基地があることくらい知っていましたが、実際に目の当たりにすると考えさせられるものがありました。豊中市でもこの秋、高校生の「沖縄スタディーツアー」を実施するそうですし、とにかく現地の空気に触れてみるのが大切だと思います。

高安 沖縄市と豊中市、まったく違うからこそ、その交流から新しい価値観や可能性が生まれるのでしょうか。兄弟都市提携50周年、そして沖縄市市制施行50周年を迎え、さらに豊中市の皆さんと連携を密にしながら歩んでいきたいと考えています。

宮島 沖縄と本土の、ウチナンチュとヤマトンチュの望ましい関係を考えるとき、民主主義というキーワードが僕の頭には浮かびます。民主主義を問い直すという思いが僕たちにはいつもあって、それを共に考えられる相手が本土にいて、その関係性を築くことがとても重要だと僕は思っています。だから兄弟都市である豊中市の存在はとても大切に、だからといって口角泡を飛ばして議論するのではなく、これからもハッ

ピーにコミュニケーションしていきたいですね。

—— 違いを知り、認め合い、互いに助け合い、より良い共生の道を探り、そして共に歩いていく—いつの時代も変わらない兄弟都市がめざす姿なのかもしれませんね。

さて、質問攻めで恐縮ですが次は、市民代表である皆さんが両市の行政に対して望むこと、叱咤激励、ご指導ご鞭撻など(笑)、ぜひお聞かせください。

田中 本場・沖縄市のロックイベント「ピースフルラブ・ロックフェスティバル」の出演オーディションとして位置づけていた豊中まつりの「Who's NEXT」が昨年で終了しました。今後は、みんなでまた新しい両市交流の形をつくっていく予定です。お力とかご予算とか、いろいろお貸しください。というか、ください(笑)。



最後のオーディションで選出されたBuddhadatta

吉田 両市の市民に対して“兄弟都市アピール”が足りていないような気がします。交流の輪を広げるために、兄弟都市をもっと宣伝してほしいです。

高安 貴重なご意見ありがとうございます。豊中市民の皆さんのご期待と熱い思いにお応えするよう、私も頑張ります(笑)。

宮島 行政に対して望むこと？僕はむちゃくちゃありますよ(笑)。まずは皆さん、必ずシアタードーナツに来て映画を見ること(笑)。みんなに「遊びに来てね」って僕はいつもいっているでしょ。自分たちが楽しめな

いで、市民を楽しませるイベントなんて絶対できないと僕は思っていて……、だから遊びが足りない！まじめ上等よ、まじめ最高よ。でも、とにかく、みんなで一緒に遊びましょう！

ここが好きだ！ここが嫌だ！

—— そう、こんなふう楽しく何でも言い合える関係、人事異動で交流担当でなくなっても、まつりボランティアを卒業しても続く関係づくりが大切ですね。この調子で続けて伺いましょう、兄弟都市のここが好きだ！ここが嫌だ！さあ、どうぞ(笑)。

田中 夜遅くまで、というより朝までお店が開いていて、居酒屋さんはもちろん、民謡酒場、バーやクラブ、ライブハウスなどなど、いろんなお店が一つのまちにあるところが好きですね。嫌なところは、みんなすぐに「タクシー乗ろっ」というところかな。あれはなぜでしょう(笑)。

吉田 好きなところは人もまちも、全てです。でも僕はお酒が飲めないので、「終電なのでお先にドロンします」といえない沖縄の交通事情が嫌ですね(笑)。

高安 関西人である豊中市の皆さんの、ボケを期待するフリというか、「オチは？」という圧力が苦手です(笑)。あれ？この質問もそうなのでしょうか？でも聞いているぶんには楽しいですし、関西独特の文化で



友好のシーサー像(豊中市役所玄関前)

すし、自分に振られさえしなければ、好きなところでもあります。

宮島 豊中の皆さんのイメージは、良くいえばにぎやか、悪くいえばうるさい(笑)。チャレンジングでスリリングなまちかなと思います。もうすぐ豊中まつりで行くので、僕のライフワークである映画をテーマにした交流というかコラボというか、その可能性を探りたいと考えています。

新しい夢の始まり

—— それでは、兄弟都市提携50周年を記念した今回の座談会の締めくくりとして、一言ずつですが、皆さんに夢を語っていただきます。

田中 豊中まつりで育んだ兄弟都市の交流をもっと両市民の日常にまで広げたい。それが僕の夢です。

吉田 具体的な夢の話をしますと、豊中市内でももっとコザを感じられるイベントをしたいと考えています。たとえば、宮島さんのシアタードーナツとコラボしたコザ映画祭なんかができるといいですね。

高安 兄弟といえば家族です。この先、自分がオジーになっても、皆さんがオジーになっても、子どもや孫と一緒に変わらず交流できたら、そういう関係がずっと続いたら、それは素晴らしいことだなと思っています。

宮島 僕の大きな夢は、皆さんが1か月以内にシアタードーナツで映画を見てくれることです(笑)。そして、僕のささやかな夢は、これからも皆さんと一緒においしいお酒が飲みたい。ただそれだけです。

—— ありがとうございます。今回はリモートで皆さんとお話しましたが、またお会いしましょう。そしてそのときは兄弟都市の夢に、未来に乾杯しましょう！

未来へつなぐ 平和への思い

コザ市(後の沖縄市)から豊中市の沖縄戦戦没者遺族に霊石と仏桑華(ハイビスカス)が届けられたことに始まった、両市の交流。
その根底にあるのは、互いを思いやる気持ち、そして“平和を願う心”です。
50年の交流の中で、さまざまな催しや活動が行われてきましたが、一貫しているのは平和への思いを未来へつなぐこと。
それは、子どもたちや若者にもしっかり浸透し、次の時代へ向かって脈々と受け継がれています。



中学生平和大使相互交流学习

兄弟都市提携40周年を迎えた2014年(平成26年)、両市の中学生が平和大使となり、平和について共に学び、考えていく事業が行われました。交流学习の中で柱となった活動は、豊中の平和大使たちの「沖縄訪問」です。沖縄の平和大使たちと交流しながらさまざまなプログラムの中で沖縄戦や戦後史を知り、平和について意見を交換しました。



両市の中学生平和大使同士で意見を交換。



豊中市9人、沖縄市16人が中学生平和大使として参加。共に沖縄戦の戦跡を訪れました。

沖縄訪問 2014年
7月28日～30日

- 1日目 戦争体験者の講話聴講、中学生平和大使交流会
- 2日目 嘉手納飛行場内史跡など沖縄市戦跡巡り
- 3日目 那覇市内史跡など見学



ヒストリートなど、沖縄市内を見学



戦争体験者の講話に聞き入る中学生平和大使たち

2014

戦争について学び、 絆を深めたあの夏の日

交流学习を振り返って

OKINAWA

きんじょう みくも
金城 未空 さん



中学2年生のときに平和大使になりました。意見交換会で仲良くなった豊中の大使とは、その後もメールをやりとりするなど、良い交流が続きました。また、共に学び合う中で「戦争がないことが平和」という概念を、さらに踏み込んで理解できたように思います。10年たったいまあの時の経験から、戦争や悲しい事件の報道を目にするたびに、その背景を考えたり調べたりしています。

日本では現在戦争は起きていないものの、自然災害や貧困問題など毎日を安心して穏やかに暮らすという点では平和が脅かされていることが多々あります。自分に何ができるのか、考え続けていくことが大切だと思います。

交流学习を振り返って

TOYONAKA

みなと かずき
湊 和輝 さん



中学生平和大使のことは先生から聞いて、「貴重な経験ができそうだな」と思い応募しました。沖縄訪問では嘉手納飛行場の中に入って戦闘機を見たり、当時の防空壕(ごう)を見学したりしたことが印象に残っています。当時米軍基地があることから起こる数々の問題が世間では取り沙汰されていました。しかし、沖縄市の平和大使の一人が「自分の親は基地で働いているので、必ずしも基地がなくなったらいいとは思えない」と言っているのを聞いて、考えさせられました。こうした体験からその後、米軍基地についてどうするのが一番いいのか、いろいろな面から考えるようになりました。

昨今、世界情勢を見ても平和は崩れやすいように感じます。現代の平和が過去の多くの犠牲の上に成り立っていることを忘れず、これからも平和を守り続けていかなければいけないと思っています。



最初は緊張していたものの、交流会では夕食を共にし、打ち解けた様子も。



沖縄訪問では首里城などを見学。後日、豊中人権まちづくりセンターで平和大使学習報告会も実施し、3日間で学んだ沖縄戦や基地問題などについて発表しました。



豊中市で行われた中間報告会の様子。オンラインでやりとりします。



中間報告会。それぞれのテーマを探究し、秋の沖縄スタディーツアーに臨みます。



いま再び、 平和について考え交流しよう

平和学習プロジェクト～平和の伝え方について考える～

両市の中学生平和大使が交流し、学び合ってから10年。兄弟都市提携50年を機に、再び平和の大切さを考えていこうと、高校生を対象にした新たなプロジェクトが立ち上がりました。10年前と同じく、豊中の高校生が沖縄を訪れ、沖縄の高校生と共に戦争や戦後史について学び、平和への思いを広く伝えていきます。

Step 1 6月5日 キックオフミーティング・事前説明会

参加する高校生たちの初顔合わせがオンライン上で行われ、平和学習プロジェクトの概要やこれからのスケジュールが説明されました。
プロジェクトでは、沖縄市・豊中市に関するテーマを個人またはグループで1つ選定して調査を進めていきます。例えば「沖縄市の沖縄戦」や「コザの沖縄戦」や「沖縄市に残る戦跡」などについて掘り下げて調べます。

Step 2 7月～10月 調査・中間報告

夏から秋へとテーマの探究をしました。調査は、新聞や文庫、ネット資料などを使ってそれぞれで行います。途中迷ったり困ったりしたときには、大阪大学・大学院の学生チューター※に相談。また、中間報告会も行われ、チューターからコメントやアドバイスももらいました。
※イベントや平和学習において、高校生のサポートをします。

イベントへの参加

高校生たちは豊中市または沖縄市主催の平和に関するイベントにも参加。オンラインなどでも参加でき、平和について、さまざまな角度から考えるよい機会となりました。

- 6月9日 市民平和講座「石川・宮森小米軍ジェット機墜落事故」（沖縄市主催）
- 6月14日 オンラインシンポジウム（豊中市主催）
- 6月23日 沖縄全戦没者追悼式参列、資料館見学（沖縄市主催）
- 7月13日 オンライン学習会「平和ガイドから学ぶー豊中市・沖縄市の戦争と戦後」（豊中市主催）
- 9月7日 沖縄市民平和の日記念行事（沖縄市主催）

VOICE TOYONAKA



もり はると
森 悠人 さん
箕面自由学園高校1年

おおaura いと
大浦 綸 さん
箕面自由学園高校1年

平和は一人一人が理解し合うことで、維持していくもの。今回のツアーで、実際の沖縄を見て感じたことを、自分の言葉で人に伝えていきたいと思っています。



沖縄スタディーツアーで見学をする「ひめゆり平和祈念資料館」

Step 3 11月2日～4日 沖縄スタディーツアー

豊中の高校生たちが沖縄へ。平和に関する場所の見学や両市の高校生たちの交流など、多彩なプログラムが用意されています。また、これまでの調査の成果を発表します。

沖縄スタディーツアー行程

- 1日目 ひめゆり平和祈念資料館見学
- 2日目 沖縄市・豊中市平和交流忠魂碑や奉安殿、ヒストリートなどフィールドワーク
平和学習プロジェクト報告会懇親会
- 3日目 帰阪

未来へつなぐ 平和への思い



いしだ ももな
石田 桃菜 さん
豊中高校2年

参加するみんなのプロジェクトへの強い思いを感じています。将来の夢は、小学校教諭。子どもたちに今回学んだことを伝えていきたいなと思っています。



VOICE OKINAWA



とうま しえる
当真 嗣得 さん
コザ高校2年

沖縄戦のことは小・中学校時代に学習していますが、それだけで終わらせてはいけないと思い、平和学習プロジェクトに参加することを決めました。
まずは沖縄以外のことも知りたいし、豊中の人たちと楽しく、有意義な交流もしてみたいです。そして、二度と戦争の悲劇を繰り返さないために、学んだことを身近な友達からでも伝えていけたらと考えています。それが次代を担う、自分たちの役割だと思います。このプロジェクトで、自分の中で求めているものが得られるのではと期待しています。

Message — 平和学習プロジェクトチューターから —

教科書にはない学びを吸収してほしい

いしかわ ゆうと
大阪大学大学院 人文科学研究科 日本学専攻 博士後期課程2年

石川 勇人 さん

なぜ人は戦争体制へと向かい、多くの住民が命を落としたのか。沖縄でのフィールドワークは、そうした疑問を考えるための気づきがたくさんあるはずです。有意義な学習を進められるよう、皆さんを全力でサポートしたいと思う一方、私自身も両地域の出来事や歴史についての学びを深めていける機会だと思っています。

あちまれー！
わったーしんか
(集まれー！私たちの仲間)

兄弟都市交流
あれこれ

50th Anniversary

うちなーぐち×
やまとうぐち

思い満載、 活動多彩

それぞれの
思いをつづる
コメント&
エッセー集

たくさんの方が兄弟都市交流を支えてきました。
市民も市職員も、老いも若きも東奔西走、
汗をかきかきの活動でした。振り返ると、それ自体が貴重な交流。
人と人との、確かなつながりづくりの営みでした。おかげさまで取り組みは広がり、
笑顔いっぱい・多世代が集う交流事業が展開されています。
交流の歩みを振り返ると、その時々にご尽力・ご活躍されたたくさんの方々の
お名前が浮かび上がってきます。本誌の編さんにあたっては、
可能な限り、これらキーパーソンとも言べき方々にご登場いただくよう努めました。
グラビアや寄稿文において、交流の歩み・事業紹介において、そして座談会などなど…
最後に30名あまりの方々や子どもたちが登場します。
交流てんこ盛り、一挙大公開！お楽しみください。

コザ市時代の出会から始まる交流、これからの交流

豊中市のことを初めて知ったのは、1960年代当時の広報紙(コザ市報)の記事。コザ市職員の「豊中学校」での研修報告を読んだのがきっかけだったと思います。

当時のコザ市は、都市計画分野では沖縄県内の先進都市で、住居表示や区画整理事業、住宅地の簡易舗装、下水道の整備、都市緑化等でめざましい成果をあげていました。これらは豊中市での研修と交流の積み重ねによるもの、大きな力となったと聞いています。1972年(昭和47年)の大きな世がわり(施政権返還)の荒波を乗り越えられたのも、豊中市での研修のおかげでしょう。

それから後年、僕はデイゴホテルの社長(故・宮城悟さん)から豊中まつりに誘われ、初めて豊中市を訪れました。そこで衝撃を受けたのが「沖縄音舞台」。過去に沖縄差別の長い歴史がある大阪で、沖縄をテーマにした祭りがあり、しかも豊中市が市民とともに開催していることに、驚きとうれしさと感動を覚えました。一瞬で、昔読んだコザ市報の記憶が鮮やかによみがえりました。忘れられない体験で、以来、毎年のように訪れています。

豊中とコザの出会いから「戦争」と「それぞれ

の戦後史」の姿が視えてきます。そして交流の積み重ねからは、相互理解の大切さと同時に、自らのまちを改めて知るきっかけと深い気づきも与えてくれたと思います。

最後に、これからの交流への提言です。市民・行政・各種団体が参加する「ポータルサイト」の開設/小中学校の兄弟校締結/沖縄全島エイサーまつりでの豊中ブース・市民交流広場の設置/県外友好都市交流担当セクションの設置など。思いつくまま列記しましたが、交流をまちづくりに活かすこと、そして交流の継続のためには世代継承・交代が必要だと思います。児童生徒・保護者との交流など、時代の変化に対応しながら交流主体を育てていく取り組みが求められているのではないのでしょうか。

古堅 宗光 さん

1947年、与那国島生まれ。小学校5年生まで通っていた石川市(現うるま市)・宮森小学校の米軍ジェット機墜落事故で同級生4人を亡くす。1970年に「コザ暴動」に遭遇。その後「コザ暴動を記録する会」を立ち上げ、多くの証言者の聞き取り活動を行う。豊中との交流を報じたコザ市広報紙の記事をきっかけに、豊中市との交流に尽力。沖縄青年会議所副理事長などを歴任。



沖縄市



本荘 泰司 さん

豊中市に入庁し、市民活動課長、都市活力部長、豊中病院事業管理者などを歴任。現在は兵庫県丹波篠山市で農業を営んでいる。

いと 愛しのB級ホテル

「コザ」デイゴホテル。沖縄市滞在中のベースキャンプだ。40代前半で豊中まつりを担当。以来、表敬訪問や沖縄全島エイサーまつり、ピースフルラブ・ロックフェスティバル、プライベートで年に数回はお世話になっていただろうか。県内で奢侈なホテルが開業していく時代、私には、ほんとで唯一の宿になった。

社長は宮城悟。同い年。会話が弾む。当時彼は、基地経済から脱却するため、観光やスポーツ（合宿）誘致に全国を奔走していた。一人勝



ちしない。常に地域全体の発展を願っていた。

そんな彼の超一流のおもてなしを支えに、沖縄市での交流を思う存分深められた。両市にとって最高の理解者であり、推進者の一人だった。

今から10年前、40周年記念式典に彼の姿はなかった。直前に長い闘病生活に終止符を打ったのだった。改めて思う。ありがとう悟さん。

I wish you were here.

ここが私のANOTHER SKY ～沖縄市です。

2009年（平成21年）9月13日、浅利敬一郎市長（当時）の随員職員として初めて、沖縄市に足を踏み入れました。コザ運動公園陸上競技場で観た「沖縄全島エイサーまつり」の演舞に圧倒され、とても感動した記憶が今でも思い起こされます。以降、すっかりコザのまちや出会った人びとに魅了され、訪沖を重ねることに。いつしか、ここが私にとっての“第二の故郷（ふるさと）”となりました。

兄弟都市提携40周年時には、式典の進行や宣言文案の調整などのお手伝いをさせていただきました。今回の半世紀記念事業も人権政策担当職員として、両市の高校生交流や平和に



関するイベントなどに関わらせていただく機会を得たのは、この上ない喜びです。今後も、官民間わずさまざまな世代の方々がバトンをつなぎながら、60年、70年…100年と末永い交流を深めていただくことを願ってやみません。

山口 太一 さん

豊中市市民協働部理事。1991年に豊中市入庁。広報、国民体育大会、社会教育などの業務を経て、秘書課在籍時に兄弟都市提携40周年記念式典の調整業務に従事する。同50周年では、沖縄市平和・男女共同課と協働して実施する、平和に関するパネル展やシンポジウム、両市高校生による平和学習・交流事業などの取り組みに関わっている。

まつり小景（まつりでの交流）

1997年（平成9年）は私にとって特別な年だった。人生ではそうは起こらないことが起こった年。この年の8月に私は初めて第30回豊中まつりの取材で同市を訪れた。行政主体から市民主体のまつりへと移行した最初の年。まつり会場へ入って瞬時に感じたのは暑い、そして目にしたのは一番広い場所に設営された沖縄音舞台のステージ、周囲に並んだ沖縄市の物産に数々の出店。やがてまつりの仕掛人たちに次々と出会う。のちにその交友は27年間にも及ぶこととなる。

両市の違いや課題等の認識、文化の交流を通して両市の発展はもちろんだがまつりやイベント等での息の長い市民交流を望む。そしてそれ

は年々引き継いでいくものであってほしい。

個人的な交友について平たく記したい。沖縄のチムグルを熟知、まつりの中心へ置いた男。まつりには装置があってそれ自体が本岡和巳さんだった。

知恵と知識の雄弁者、かつて同市の副市長に就きながら沖縄物産の呼び込みもこなす頼もしい兄貴分・田中逸郎さん。数々のイベントをこなしてきた生きのいいやつ、福本茂行さん。同まつりの実行委員長を二十数年間務めた大胆と繊細を共存させる芳村幸司さん。さらに吹田義明さん、本荘泰司さん、山口太一さん、津田徹人さん、交友は続く。分析については私は専門家ではないので押しつけはしない、楽しみとして固執したい。



山川 宗司 さん

1952年生まれ。2013年沖縄市役所を定年退職。詩人。第3詩集「少年の日といくつかの夕日」で第三十九回山之口褒賞受賞。日本現代詩人会会員。

兄弟都市交流 永遠に

私が沖縄市の方々とディープな関係になりましたのは、今から40年前の1984年（昭和59年）4月でした。当時、豊中市職員野球部の夏季合宿の行き先に、兄弟都市提携10周年を迎える沖縄市への遠征旅行を計画しまして、沖縄市職員野球部に「僕たち、行くよ」と、電話いたしますと、「僕たち、来るよ」との返答です。今は亡き漫才師の「いくよ・くるよ」ではありませんが、話がかみ合いません。お互いの話をよくよく整理しますと、「行くよ」「来るよ」がヤマトグチとウチナーグチでは真逆の語彙であることが判明し、沖縄市の野球部も期をたがえず、くしくも豊中市野球部との交流試合の遠征計画を立てていることが、確認できました。その後は、「行くよの豊中市です」「来るよの沖縄市です」の枕ことばで始まって、今でこそ大阪弁は吉本新喜劇のおかげで全国区ではありますが、大阪弁と沖縄口との方言の壁をクリアしながら、日程調整が進みました。そして、7月上旬に豊中市職員野球部が沖縄市を2泊3日（初日/沖縄市長表敬訪問、交流試合、歓迎夕食会。二日目/やんばる観光、交流会。三日目/南部戦跡巡拝）で、那覇空港から米軍基地の合間を抜けて沖縄市に到着しました。初めての沖縄訪問では、灼熱の太陽の下に育まれた蒼い空と青い海、琉球古典芸能、島唄、島酒など異文化を体験し、その中で一番感動しましたのは「沖縄人の島心」で、温かく優しいおもてなしでした。その3日後には、沖縄市職員野球部が3泊4日（初日/豊中市長表敬訪問、交流試合、歓迎会。二日目/大阪観光、甲子園

本岡 和巳 さん 豊中市に入庁し、文化課主幹、こども未来部長などを歴任。職員野球部としても活動。

豊中まつり2012/沖縄音舞台にて
左：本岡和巳さん
右：元豊中市職員野球部監督の吹田義明さん（2024年2月没）



豊中市



野球見学。三日目/神戸観光、西宮球場野球見学。四日目/豊中市施設見学）で来豊し、兄弟野球が始まりました。その時の戦績は1勝1敗でしたが、10日間のうち7日間にわたる濃厚な文化交流で兄弟同様に仲良くなって、日本シリーズのようにどちらかが4勝するまで交流試合をしようという提案があり、その後は2、3年間隔での交互の訪問交流試合が続き、ただ今は先立つ兄弟もあって3勝3敗2分けで、いまだに雌雄の決着はついていません。

当初の兄弟都市担当は秘書課でしたが、1996年（平成8年）に文化課へ事務分掌移管され、私は担当することになりました。また同年に、新生豊中まつりのプロジェクトチームの一員として、豊中まつり97での沖縄ひろばイベントを担当させていただく機会を得ました。コンセプトは、「琉球文化の紹介と基地のない平和な島の実現・おっきなわ」でした。豊中市職員野球部沖縄市訪問から開催に至る間に、度々お邪魔させていただきましてお力添えをいただきました沖縄市の皆さんとのエピソードを列記しますと紙面が足りません。40年も経過してしまっていて、思い出せない方も多々ありますが、敬称略・順不同で紹介させていただきます。

▶沖縄市長・新川秀清/仲宗根正和/東門美津子、助役・嘉陽榮憲、収入役・砂川正男、文化課・上地 栄/今郁義/町田ノリ子、永岡稚子、中根勉、水道局・伊禮弘、野球部・我謝孟吉/東江清雄/島袋良治/仲宗根弘光、元コザ市長・大山朝常、元コザ市助役・玉山憲栄、美里焼・宮城秀雄/愛子、デイゴホテル・宮城タカ子/悟、チャンプルー王国・照屋林助、笑築過激団・玉城満、ディグ音楽事務所・知名定男、宮里榮弘天芸団・宮里榮弘/瞳、なんた浜・饒辺愛子/比嘉マチ子、ACO沖縄・下山 久/平良とみ、沖縄県秘書課、沖縄県物産振興会、沖縄県大阪事務所、沖縄観光コンベンションビューロー、沖縄市観光協会・崎浜秀嗣、沖縄文化協会・城間喜宏/親川正治、美里ツーリスト・翁長良健、PA音楽事務所・徳山義広etc.

皆さん、お力添えをいただきまして、本当にありがとうございました。

兄弟都市交流に関する職員研究

とよなか都市創造研究所と沖縄市政策調整室による提携40周年事業として、両市の若手職員が主体的に将来の都市交流を調査研究する取り組みが行われました。

研究員が相互の都市を訪問して行われた研究会議は、若い職員が楽しそうに都市課題を語り合い、報告書作成では苦労を共にする姿を懐かしく思い出します。

報告書では、交流50周年に向けての提言がなされておりますが、いまだ達成に至らないことを踏まえると、高い志による研究成果であったと感じております。

当時、研究員が探し出した資料からコザ市から豊中学校へ派遣された職員の記録や交流の発端となった霊石の写真が確認できたこと



沖縄市

は、私にとって感動的な発見でした。

あれから10年を経て、中堅職員に育った研究員が両市の新たな歴史を刻む担い手となり、交流が深まることを期待しております。

兼本 正人 さん

政策調整室長：～2014年7月（40周年記念事業実施）
経済文化部次長：2014年8月～2019年3月（人事異動後も継続担当）
教育委員会 教育部長：2019年4月～（現職）

沖縄市民が豊中市で躍動！ 市民ミュージカルを初上演

2014年（平成26年）8月、兄弟都市提携40周年を記念して、豊中市立ローズ文化ホールで「コザ物語」を上演しました。戦後、孤児となった多くのこどもたちを支え、「沖縄社会福祉の母」と称された島マスさん。激動の時代をしたたかにしなやかに生きた彼女とこどもたちを描いた市民ミュージカル初の県外公演でした。

満席の観客からは「躍動する踊りや歌に感動した」「笑いあり涙ありの物語に命と平和の尊さを認識した」「沖縄市の戦後の歩みがよく理解できた」などの声が寄せられました。多くの方にご覧いただき舞台が成功したのも、豊中市の皆さまの全面協力のおかげです。改めて感謝申し上げます。



沖縄市

44名の出演者は様々な化学反応を起こし成長しました。そのほとんどを占めた小中学生が成人した今、豊中市が兄弟都市であることを誇りに、今後も交流を続けていきたいと思います。

天願 亮 さん

1971年コザ市生まれ。沖縄市役所健康福祉部ちゅういじ課長。兄弟都市提携40周年は文化観光課長として市民ミュージカルや記念式典等を担当。



豊中市

1997年「新生豊中まつり」誕生

1996年（平成8年）、豊中まつり見直しプロジェクトがスタートしました。プロジェクトの座長を拝命し、多くの方々の協力を得ながら1年間に及ぶ豊中まつりの見直しをスタート。旧来の豊中まつりを検証しながら、もっと魅力ある豊中まつりを創れないかとプロジェクトメンバーと話し合う日々。いくら考えても豊中市としてのイベントコンテンツが見えてこない毎日が続く中、沖縄市が兄弟都市だということを知らされました。沖縄民謡はもちろん、沖縄ポップスも全国で注目され始

福本 茂行 さん

豊中市在住。龍谷大学経済学部卒業。企画イベントの制作会社を経営する傍らNPO法人ひょうご県防災教育振興協会を設立し、全国で防災教育の啓蒙活動を行う。1996年豊中まつり見直しプロジェクトの座長を拝命し、新生豊中まつりの誕生に携わり現在に至る。

めた頃で、まさにコンテンツの宝庫、すぐに役所の方と沖縄市へ飛びました。それが私と沖縄、そして豊中まつりと沖縄の付き合いの始まりです。さまざまな方々との出会いと協力の中で紆余曲折を経て1997年（平成9年）、新生豊中まつりは誕生しました。人と文化がふれあうまつりをテーマに、「市民がつくる市民のまつり」として、多くの市民ボランティアの手で考え開催される稀有な市民まつりとして、毎年20万人もの皆さんに愛される市民まつりに育ってくれました。ここまでの道のりを共に歩んでくださった豊中市、沖縄市の皆さんに改めて感謝申し上げます。

つないでいきたい兄弟都市交流

初めてコザを訪れたのは、兄弟都市提携40周年記念の「市民交流ツアー」の下見でした。当時、初めての沖縄出張に浮かれていた私はTシャツにトロピカルな短パン姿で沖縄市長への表敬訪問へ。あの失敗から10年。笑顔で当時を振り返ってくれる沖縄市観光物産振興協会や沖縄市役所の方々、そして個性的なコザの皆様との交流を通じて、泡盛の飲み方から米軍基地に対する考えまで、地域に根づく文化を知り、自分事のようにそこで起きる問題や背景に関心が持てるようになりました。この貴重な体験ができたのは、「兄弟都市交流」が形式ではなく、両市の先輩方の信頼関係に基づいた本物の交流が続いているおかげだと感じます。



豊中市

このご縁に感謝し、私も次の誰かにつなげるよう、これからも長く楽しく兄弟都市交流を続けていきたいです（写真はコザのお父さん・中根勉さんと）。

下中 絵里加 さん

2012年に豊中まつり事務局で働き始めたことをきっかけに沖縄市との交流が始まる。退職後もボランティアとして関わり、会場で沖縄市の皆さんと会うことを楽しみにしている。コザへは仕事や遊びで10回ほど。三線歴6年。

豊中市に学び、コザ市から沖縄市へ… これからの50年を想う。

1970年（昭和45年）、米軍統治下での不満が爆発して起こるべくして起こった「コザ暴動」。そんな年に生まれた自身のことをコザ暴動っ子と言う。

1972年（昭和47年）に本土復帰の岐路に立たされた当時の市長が豊中市と繋がり、交流が始まったと聞いている。本土の行政と沖縄の行政が変わり1974年（昭和49年）に沖縄市が誕生した。本当の意味のチャンプルー文化が始まったと言っても過言ではない。豊中市との繋がりが無ければ今の沖縄市は全く別物になっていたのではと思う。

僕らのアイデンティティーを継続できるのはあなた方のお陰です。数年前に豊中のコザが好き過ぎる男性と偶然知り合い意気投合したのを今

沖縄市

でも覚えている。彼からコザと豊中との関係を教えてもらった…知らなかった自分が恥ずかしくもあり、改めてインプットできた嬉しさもあり…

今後も熱い繋がりを継続してこれからの50年を作っていく!と強く思う。

神山 繁 さん

1970年生まれのコザ暴動っ子。アートと街をこよなく愛している50代。沖縄市で飲食店やホテル、TV番組やコザを舞台にした映画など制作する。
株式会社ファンファーレ・ジャパン 取締役プロデューサー。

沖縄市・豊中市兄弟都市 提携40周年市民交流の思い出

豊中市・沖縄市兄弟都市提携50周年おめでとうございます。

40周年の際の、豊中まつり前夜の大交流会では、沖縄市の青年会エイサーと市民交流等々沖縄から多くの参加者が居たにも関わらず、出発日の沖縄は台風…私たちの1便は無事に飛んだのに、その後の飛行機は、遅延、欠航等々トラブルがあり、いつまで待っても市民のみなさん青年会も着かないという波乱万丈で思い出深い豊中まつりとなりました。

その年の秋には豊中市から100名の市民交流ツアーを企画実施していただき、音市場での大交流会を行いました。ゲート通りで遊ぶコザの

沖縄市

おじ様と豊中の可愛い女子達、中の町の民謡居酒屋で遊ぶコザの青年と豊中のお姉様方などとても素敵な市民交流の光景でした。

今年は記念すべき50周年、この記念の年にまた素晴らしい両市の思い出が作れる事を楽しみにしております。

古田 和江 さん

2009年 沖縄市観光物産振興協会コザインフォメーションセンターに入職。誘客事業担当として、兄弟・姉妹都市を中心に県内外からの誘客活動に従事。

祝 交流50周年 友情と信頼

豊中市・沖縄市兄弟都市交流50周年おめでとうございます。

私たちRFC（緑地フットボールクラブ）は子どもたちに「生きる力」を身に付けてほしいという思いで活動しています。また家庭・学校・地域との連携の中で子どもたちを支えることを大切に考えています。

RFCの沖縄市との交流は1998年（平成10年）3月27日～3月30日の3泊4日の遠征行事から始まり、今年2024年（令和6年）3月で27年間の相互交流となりました。当初から行政や諸団体の多くの方々のご支援・ご協力をいただきながら進めてきました。誠にありがとうございます。沖縄市の交流チームはF.C.泡瀬、美原クラ

ブ、美東FCの3チームです。子どもたちは異なる文化を持つ方々との交流を重ねる中でお互いの違いや良さを認め合い、ホームステイで観光旅行では味わうことのできない体験もしております。これからも皆さま方の温かい声援をいただきながら沖縄の人たちとの友情と絆を深めるこの事業を次の世代へとつないでいきたいと思っています。

RFC会長
溝口 章仁 さん



TOYONAKA CITY



6年 吳 獅温さん

6年 新井 翔大さん

6年 桃山 太陽さん

6年 松村 哲さん

6年 中西 蓮琉さん

6年 吉原 綾吾さん

6年 篠崎 楓斗さん

6年 中島 輝さん

沖縄の子たちが皆明るくてすぐに友達になりました。また会いたいです。

沖縄に行けたこと、沖縄にも友達ができることがとてもうれしいです。

沖縄と交流して最初は全く知らない初めて会った人たちだったけど、サッカーをしていたら自然と仲良くできるようになったことがいいと思いました。

ホストファミリーの雰囲気が出て楽しかったです。

去年僕の家にはホームステイした友達の家には、僕は泊まりました！1年ぶりに会えてとてもうれしかったです！

沖縄交流をして、沖縄の子たちと友達になって、バスケの試合も一緒に観れて、すごく楽しい経験をしたのでまた行きたいなと思いました。

ホームステイ先で沖縄の文化や習慣を学ぶことができました。

ホストファミリーみんなが優しくしてくれて、とても緊張していたけど楽しく過ごすことができました。

RFC（緑地フットボールクラブ）

想いを繋いだパスを次世代へ

豊中市×沖縄市「兄弟都市宣言」から50年を迎えたこと、心より祝い申し上げます。

20数年前、私はF.C. 泡瀬の部員として、豊中市との少年サッカーチーム同士の交流事業に参加しました。サッカーをはじめとした全ての交流が最高に楽しかった思い出です。

ホームステイでお世話になった田中家と大貴君とは、高校を卒業するまで文通が続き、お互いの近況を伝え合うほどの仲までとなりました。

そして2022年（令和4年）、F.C. 泡瀬のコーチ兼保護者として同事業に参加できた時にはとても感慨深い気持ちになった一方で、この事業を遂行することの難しさを強く感じました。

小学生の時に、F.C. 泡瀬の部員として豊中市・沖縄市少年サッカーチーム交流事業に参加。その後、2022年にF.C. 泡瀬のコーチ兼保護者として同事業に参加し、以降事業に携わっている。

宇根 良併 さん

この事業の成功は、RFCの溝口会長とF.C. 泡瀬の崎浜監督という、子どもたちの指導に情熱を燃やし続けるお二方の存在や、多くの方々の協力によって達成できたのだと感じています。

私は部員、指導者、保護者としてこの事業に関われたことに深く感謝しております。今度は私たち世代が、子どもたちに成長する機会と環境を提供できるよう、恩師たちのように情熱を燃やし続けていきたいと思っています。



OKINAWA CITY



伊舎堂 模斗さん

大阪の人達が沖縄に来て一緒にプレーしたり、動物園へ行ったり、イベントを楽しんだりしました。今後の豊中交流では、豊中の人と同じチームとなって大会に出てみたいです。

F.C. 泡瀬



山根 颯祐さん

豊中交流会では、すごく特別な時間を過ごしました。サッカーの試合だけではなく、毎日一緒に寝たり、一緒に朝早く起きて遊んだり、夜どおし色々なことを話したりしてRFCのチームのみんなとはとてもいい思い出ができました。



豊濱 劉斗さん

大阪府豊中市との交流の思い出は、言葉が少し違ったのとまどったけど、沖縄こどもの国へ行ったりキングスと一緒にいたりBBQなどで、一緒にすごすことでとても友情が深まったことです。きょうな思い出です!!



池原 祐大さん

大阪府豊中市のRFCと交流会がありました。バーベキューをしたり、沖縄こどもの国と沖縄アリーナでキングスのバスケット観戦をしたりして大阪の人と交流ができました。とても楽しかったです。



美原クラブ

なかなか、他県の同学年と交流する機会はないので交流サッカー大会やホームステイをとおして貴重な経験ができました。交流サッカー大会が一日のため物足りなく、大会を二日にし更に交流を深めたいです。豊中での再会が楽しみです。

美東FC



大城 瑠心さん

豊中交流では、豊中の子がホームステイしたり、みんなと海でBBQをしたりして楽しかったです。今後の交流は、チームで泊まるサッカー合宿をしたりして、仲を深められる交流をしていきたいです。



奥辺 永翔さん

エイサーがつないだ奇跡

私は14歳の時に兵庫県尼崎市でエイサーを始めました。その後16歳の時に沖縄全島エイサーまつりに出演するため、沖縄市の諸見里青年会さんと練習をする機会がありました。その時たくさんの人たちから「エイサーの歴史」「踊りの意味」「人とのつながりの大切さ」を教えてもらい、私にとって大きな学びになりました。その貴重な経験を豊優会の中で伝え続けています。

このように豊優会の踊りの



豊中市

ルーツは諸見里青年会さんであり、豊中市という限られた地域で活動をしていく中で沖縄市とつながりを持てたことは奇跡です。

現在は関西や愛知のエイサー団体と交流がありますが、今後は演舞を通してもっと多くの地域のエイサー団体とも交流を広げたいと思っています。

また沖縄全島エイサーまつりでのお出演を通して、豊中市と沖縄市が兄弟都市であることを沖縄の皆さんにも知ってもらえきっかけにしたいです。

大城 透 さん 豊中エイサー豊優会 会長。

豊中エイサー豊優会

1999年発足。豊中まつりでエイサーに触れたボランティアメンバーが中心となり「豊中エイサー豊優会」を立ち上げ、今年で25周年を迎える。メンバーは子どもから大人まで約30名。地域のお祭りや福祉施設、結婚式、沖縄系のイベント等での演舞や、太鼓体験を通して地域の皆さんと交流している。

「まつり」で築いた財産と気づいた想い

大規模で大にぎわいな「豊中まつり」の、我々もその一部となって演奏させていただいたことは、5年以上経った今も変わらず、大変に名誉なことと胸に刻まれています。炎天下、限られた日陰に集まって、たくさんの方々が熱心に耳を傾けてくださった光景は、忘れられない喜びです。「ピースフルラブ・ロックフェスティバル」では、ライブ中の興奮はもちろん、終演直後にいただいたスタンディングオベーション、関係者の方々に本当に良くしていただいたこと等、全てが印象深い財産です。豊中まつりをきっかけに、改めて気付かされた気持ちは、まさしく沖縄言葉の「いちゃりばちョーデー（出会えば皆、兄弟）」です。平和を願う両市民の想いから始まった兄弟都



豊中市

市の素晴らしい交流が、時代をも越えていつまでも、ますます深い結び付きとなられることを心から期待します。

ソウルソウス 中西 大介 さん

2012年結成。Vo&Key中西大介とGt&Cho安川真也による、オオサカン・ソウル・ユニット。現在までに4枚のミニアルバムと2枚のシングル、コラボによる別名義のミニアルバム1枚を自主リリース。「ピースフルラブ・ロックフェスティバル2018」出演。

豊優会と僕のつながり

豊優会代表の大城透くんを知ったのは2001年（平成13年）頃で、僕が当時諸見里青年会の会長を務めていた時でした。「大阪豊中で諸見里のエイサーを踊っています!」。豊優会のエイサーの基礎は、諸見里エイサーでした。「大阪での反応はどうなの?」気になる僕の質問に、「ものすごく評判が良くて、毎週イベント出演で忙しいですよ!」と、楽しそうに話す彼を、当時、青年会長として会の運営の難しさに直面していた僕は、少しうらやましく感じたのを覚えています。それから交流が始まり、現在では、縁あって仕事で訪れるようになった豊中まつりで毎年顔を合わせ、お互いの生存確認をしている関係が続いています。

沖縄市



僕はすでに青年会OBですが、現在でも現役で元気に踊る一つ年下の彼に、「そろそろ休んだら?」と言いつつも実は、また少しうらやましく思っているのです。

花城 康貴 さん

沖縄市観光物産振興協会事務局次長。2001年～2003年の間、諸見里青年会会長を務める。

祝 50周年 さらに実りを願って

このたびは、50周年という輝かしい歴史の節目を迎えたことお祝い申し上げます。遠く離れた二つの都市が友好関係を築いてこられたのは、両市の友好と信頼を深め、絆を創りあげてこられた先人たちの努力と敬意を表します。お互いを尊重し思い合う気持ちと、海を越えた友情を大切にしたいという両市民の兄弟都市交流の発展を支えてくださった皆さまがいての今日だと思います。私自身、豊中まつりを通してたくさんの沖縄を知ってもらい、このような素晴らしい記念に出演させていただくことに感謝しています。豊中まつりでは、沖縄の伝統ある唄三線やエイサーをはじめ、出演者と来場客で会場一帯が沖縄になっている光景に毎回感動させられます。この50年の間、半世紀にわたって築か



れたこの絆は何にも代え難い素晴らしい財産だと思います。新たな50年に向けて次世代がユイマールの心を持ち友情を深め合い、さらに実り多きものとなることを願っています。改めて50周年おめでとうございます!

沖縄市

与那覇 歩 さん

「与那国島」出身。幼い頃から民謡・演歌好きで、八重山古典民謡を受賞するなど島の芸能を学ぶ。2004年からの6年間、ネーネーズ3代目として全国各地で活動。現在は沖縄民謡から、八重山民謡、与那国の島唄まで幅広く歌い上げるソロ歌手として国内外で活躍。豊中まつり沖縄音楽台(2018,19,22,23,24)に出演。



私と豊中との始まり

私の交流のスタートは2013年（平成25年）頃か、翌年に沖縄市市制施行40周年と豊中市兄弟都市提携40周年を迎えることから、豊中市をどのように迎えるか論議することが多くなっていた。その結果、行政・民間の協力のもとで「豊中モアイ」が発足した。

酒の席の話題によく出てくる豊中市だが、私にとってそこまで関心事ではなかった。そこにまちづくりの大好きな先輩の古堅さんが私に質問した。「貞夫は何回豊中市に行った？」私は「…まだ行ったことはない。」と答えたと「え～！まさか1回もないのか～！」と驚かれた。

そしてもう一人、豊中市との交流に長年行政側から君臨してきた同級生の中根からも「お前、来年は豊中交流40周年だぞ、豊中まつりに行かん」との強い圧力と勧めにより、私はその年の豊中まつりに参加することになった。

8月になり初めて豊中まつりに参加したが、驚きの暑さで人も気温も沸騰していた。ピースフルラブ・ロックフェスティバル出演をかけたバンドが腕を競い、熱きファンたちが夢中に踊ってい

る。会場全体が沖縄に染まりコザ大好き人間が集まる一大イベントなのだ。ここから始まった豊中の皆さんとの交流は私にとって忘れられない一生の宝物となった。

あれから10年あまりが過ぎ、両市の交流は以前にも増し縁はさらに深まっていると感じる。これは、互いの文化や歴史、人々を尊重できる両市民の力量あってこそだと思う。

また、豊中の皆さんの度重なる場面での挨拶はいつでも、オチもノリツッコミもありチームワークの良さが際立つ。そのような豊中人の機転も学びつつ、いつの日か私達の交流が若い人達へ受け継がれ、企業交流やスタートアップ事業、さらに産業へ発展することを期待したい。

沖縄市



大城 貞夫 さん

一般社団法人 沖縄市観光物産振興協会コザまちあるきガイド、株式会社サイン沖縄取締役会長、沖縄広告美術協同組合顧問、全技連看板マイスター。

沖縄市への人事派遣を経験して～はじめての「沖縄学校」～

2023年（令和5年）3月31日に、私は豊中市役所からの人事交流職員として沖縄市役所に到着しました。さっそく勤務後に歓迎会を開いていただけたことで、沖縄市での新居に向かうこともなく一番街商店街に向かったと記憶しています。

場所を移動するたび新たに沖縄市職員の方々と出会い、夜遅くまで楽しいひと時を過ごしました。新たな土地で過ごすことへの不安が、希望と期待へと変わった瞬間でした。

沖縄市役所では、交流事業だけでなく、沖縄全島エイサーまつりの運営など様々な業務を経験できています。かつてコザ市職員が豊中市で学んだ「豊中学校」のように、私自身も「沖縄学校」での経験をおして、自分自身の成長を感じています。



沖縄市

50年にわたって続いたこの交流を次の世代に受け継いでいくために、これからも「沖縄学校」で経験を積み、両市のさらなる発展に貢献していきたいです。

久保 貴大 さん

2019年豊中市役所へ入庁しこども政策課へ配属。2023年に人事交流として沖縄市文化芸術課へ出向。

縁と紡ぎつないだ交流

出張で大阪を訪れた翌週に私の豊中市への出向が決まった。その出張が私にとって人生初の大阪であり、大阪国際空港を利用したため、初めての豊中でもあった。知らない土地。なじみのない言葉。不安はあったが、このタイミングに縁を感じ、前向きに豊中へ向かうことができた。豊中に来てからは両市の様々な違いを感じるなか、何よりも驚き、そして感動したのは「沖縄市」を愛する市民が多くいらっしゃることである。沖縄市出身の私よりもコザのまちに詳しい方が何人もおられ、それぞれにコザへの思いを語って聞かせてくれた。50周年を迎える兄弟都市交流は、このような皆さまが紡ぎつないでくれて本



豊中市

日があることを痛感した。執筆時点で豊中に1年4か月住んでいる私は大阪弁の影響を受けつつあるが、この人事交流で吸収したことを沖縄市へ持ち帰り、今後の交流を紡ぎつなぐ一員として尽力したい。

喜屋武 盛智 さん

沖縄市生まれ沖縄市育ち。2019年に沖縄市に入庁し、こども企画課、商工振興課を経て、2023年に人事交流として豊中市魅力文化創造課へ出向。



市民レベルの交流を多くの分野に

兄弟都市提携50周年を心からお祝い申し上げます。私たち法人は、今日までの両市の交流の歴史とその確かな歩みを土台に、市民レベルにその友好を広げ交流を深化させようと2018年（平成30年）に発足しました。

この間の活動を少し振り返りますと、当初、沖縄市の工芸作家を迎えての工芸作品展示販売や親子向け工芸体験教室など、沖縄市の魅力に触れるイベントで交流をスタートさせ、その売上げの一部を大阪北部地震に見舞われた当市にご寄付いただきました。その後のコロナ禍では、支援の一助として、沖縄市の介護事業者へマスクを寄贈。また、両市図書館に設置された兄弟都市文庫に、相互に縁のある書籍を5年間にわたり寄贈させていただき事業は4年目の現在、111冊の書籍数を数えます。さらに、「とよなかシティリレーマラソン」に沖縄市児童を招待し、スポーツを通じた両市児童の交流を深めるなど、兄弟の絆を強めることができたと思っております。

今日までの活動に深いご理解とご協力をいただきました両市の行政、各団体、市民の皆さまに心から感謝しております。とりわけ、当法人の立ち

上げに際しては、おきなわ多文化共生のまちづくり振興会の喜納高宏さん、京子さん。その喜納さんをご紹介いただいた、デイゴホテル社長の宮城悟さん（故人）、沖縄市観光物産振興協会やコザ工芸館ふんどうの皆さまには、さまざまアドバイスとご支援をいただきました。

50周年という大きな節目を迎えるにあたって盛大にお祝いをすべく、記念事業を11月に実施予定です。私たちの活動は小さな一歩の積み重ねですが、この兄弟都市交流を着実に次世代につなげ、発展させていきたいと思っています。



豊中市（写真左）と沖縄市（写真右）の図書館に設けられている兄弟都市文庫



豊中市から沖縄こどもの国に寄贈された少年の像「合奏」の修復事業を行い、豊中中学校の1期生や両市の市議会議員など関係者が見守る中、除幕式を行いました（2019年11月20日）。

特定非営利活動法人 とよなかおきなわ応援団

2018年発足。豊中・沖縄両市民およびその周辺市民に向けて、教育・文化・スポーツ・芸能・福祉などの多岐にわたる事業を行い、真の市民レベルでの交流という公益性の高い非営利活動を実現するため活動。



豊中市

大町 裕次 さん

特定非営利活動法人
とよなかおきなわ応援団 理事長
元豊中市議会議員。

40周年記念式典と豊中まつりがきっかけで結婚

沖縄市と豊中市の交流を知ったのは、新規採用職員研修だったと思う。遠い沖縄の話聞いたあと、同期と上った第一庁舎の屋上で、私は使命感に燃えていた。私は豊中市民を愛していた。地域の課題に、市民が立ち上がり行動してきた歴史、行政との協働。沖縄市との交流を繋いできた豊中まつりも、市民がつくってきたもの。兄弟都市提携40周年の際には、岡町商店街で東青年会がエイサー道ジュネーを披露。見ていたおばちゃんたちが感動のあまり涙ぐんで何度もお礼を言っていた。戦死者を悼む霊石と仏桑華をきっかけに始まった交流は、これからも両市の市民が平和と文化を伝え続けていくのだと思う。二人の子どもたちがもう少し大きくなったら、お父さんとお母さんは平和だから出会えた

沖縄市



んだよと話したい。そして私も市民の一人として、平和を伝える交流に参加したい。

太田 青子 さん

2010年4月 豊中市役所入職 市立豊中病院事務局配属
2014年4月 広報広聴課へ異動
11月 豊中市・沖縄市兄弟都市40周年記念式典へ参加
2015年4月 豊中市職員組合専従
9月末 豊中市役所を退職し、沖縄市へ転居
11月 沖縄市職員 太田周作と結婚
2人の子どもの生まれ、豊中での経験を活かし民間企業で元気に働いています。

兄弟都市提携50周年記念ロゴマークに込めた思い

デザイン意図

両市のキャラクターを中心部に配置。両市ともに音楽のまちを謳っていることから、平和への想いと50年続いた絆を五線譜を活用したハートマークのデザインで表しています。その五線譜を虹のようなカラーデザインにすることで、多彩な交流を表現し、これからも「きょうだい」のように思いやる気持ちで築いた絆を、両市で音楽を奏できるように次世代の若者や子どもたちへ繋いでいくという気持ちを込めました。

デザイン決定までの経緯

このデザインは2023年（令和5年）に始まった両市職員の人事交流によって派遣された職員（92ページ参照）が中心となって、デザイン案を作成しました。50周年テーマ「出会えば兄弟（いちゃりばちゅー）～友好の絆を次世代へ～」と共に兄弟都市提携50周年を彩るものとして、さまざまな事業で活用されております。



兄弟都市交流年表

年	主な出来事
1945年 (昭和20年)	「鉄の暴風」と形容される激しい攻撃を受けた沖縄戦。沖縄での日本軍の組織的戦闘の終了(6月23日)
1964年 (昭和39年)	越来村(現・沖縄市)で琉球列島の降伏調印式(9月7日)
1964年 (昭和39年)	大山朝常コザ市長と竹内義治豊中市助役が懇談(10月。那覇市)
1964年 (昭和39年)	大山市長が豊中市訪問(11月)
1965年 (昭和40年)	コザ市が霊石と仏桑華(ハイビスカス)の苗木20本を豊中市に贈る(12月)
1965年 (昭和40年)	玉山憲米コザ市助役あてに竹内助役から職員研修を受け入れる旨の私信が届く。一人目のコザ市職員が豊中市へ(12月)
1966年 (昭和41年)	仏桑華が初めて開花、コザ市から豊中市へさらに苗木120本が贈られる(2月)
1966年 (昭和41年)	豊中市職員が研修講師としてコザ市へ(11月。1977年にかけて竹内市長や職員延べ10人)
1968年 (昭和43年)	コザ市職員が豊中市職員家族慰安演芸会に特別出演し古典琉球舞踊を披露(11月)
1969年 (昭和44年)	沖縄の日本復帰が決定(11月)
1969年 (昭和44年)	コザ市に豊中特産の夏菊・イチゴの苗計560本を贈る(12月)
1970年 (昭和45年)	竹内市長から大山市長に豊中電話局4万台突破の記念電話(7月)
1970年 (昭和45年)	日本万国博覧会出演の園田青年会が豊中まつりでエイサーの特別公演(8月)
1970年 (昭和45年)	豊中商工会議所や市民団体が「沖縄こどもの国少年の像建立発起人会」結成(9月)
1970年 (昭和45年)	コザ市でアメリカ軍関係の車両焼き討ち事件(コザ暴動、12月)
1971年 (昭和46年)	少年の像「合奏」(吉田勲示作)が完成、竹内市長が題字を書く。除幕式で豊中市こども会連合会からのメッセージを披露(2月)、コザ市小・中学生からお礼の作文が届く(3月)
1971年 (昭和46年)	沖縄返還協定調印(6月17日)
1971年 (昭和46年)	“ミス豊中”ら親善使節3人がコザ市訪問(10月)
1972年 (昭和47年)	沖縄が日本本土復帰、豊中市がコザ市に祝電(5月15日)
1973年 (昭和48年)	豊中市のサポテン公園経営者がサトウキビ絞り機と白鳥2羽を沖縄こどもの国に贈る(1月・11月)
1973年 (昭和48年)	両市職員組合が兄弟組合に(7月)
1974年 (昭和49年)	コザ市と美里村が合併し、沖縄市が誕生(4月1日)
1974年 (昭和49年)	両市議会で兄弟都市提携を議決(10月26日沖縄市、11月12日豊中市)
1974年 (昭和49年)	「兄弟都市宣言」調印(11月3日)
1977年 (昭和52年)	沖縄市少年少女合唱団と豊中市少年合奏団らが豊中市で交歓演奏会(8月)
1979年 (昭和54年)	夏の全国高校野球大会沖縄県代表の沖縄市・中部工業高校が豊中市を訪問(8月)
1980年 (昭和55年)	沖縄市市民会館落成記念・市民音楽祭に豊中市少年合奏団が出演(1月)
1983年 (昭和58年)	沖縄市の新設図書館に豊中市・市民が図書1万4,200冊を贈る(12月)
1984年 (昭和59年)	【提携10周年】沖縄市から贈られた山原船模型や写真資料を展示(6月)
1984年 (昭和59年)	両市職員野球部が親善試合(7月。両市。1997年にかけて計8試合、3勝3敗2分)
1985年 (昭和60年)	国際青年年記念「豊中・沖縄兄弟都市青年の集い」(8月。沖縄市)
1986年 (昭和61年)	沖縄市と沖縄県平和祈念資料館の協力で非核平和・戦争資料展(8月。豊中市)
1986年 (昭和61年)	姉妹都市・兄弟都市児童画展(11月。豊中市)
1987年 (昭和62年)	非核平和・戦争資料展(豊中市)。豊中青年会議所が小学生親善使節を沖縄市へ派遣(8月)
1988年 (昭和63年)	沖縄市少年少女合唱団と豊中市少年合奏団らが豊中市で交歓演奏会(8月)
1989年 (平成元年)	両市新成人が平和交流(2月。沖縄市。1996年まで毎年実施)
1990年 (平成 2年)	国際花と緑の博覧会に出演する沖縄市の琉球国祭り太鼓が、豊中市役所前でエイサー披露(7月)
1991年 (平成 3年)	沖縄市の18団体が「豊中市へ友好のシーサーを贈る市民運動実行委員会」結成(10月)
1992年 (平成 4年)	沖縄市物産・観光展を豊中市で初開催(5月)
1992年 (平成 4年)	両市の青年会議所が姉妹JC締結(7月)
1992年 (平成 4年)	豊中まつりで久保田青年会がエイサー披露(8月)
1992年 (平成 4年)	豊中市にシーサー像(宮城秀雄作)寄贈(10月)
1993年 (平成 5年)	沖縄市自治会長協議会がサトウキビを豊中市立幼稚園に贈る(2月。翌1994年3月にも)
1993年 (平成 5年)	沖縄市に壁画「曼荼羅観想宇宙之図」(城間喜宏作)寄贈(4月)
1993年 (平成 5年)	ボーイスカウトの豊中地区と沖縄県連盟中部地区が沖縄市で親善キャンプ(8月。以降、相互訪問・交流を続ける)
1994年 (平成 6年)	【提携20周年】りんけんバンドコンサート(豊中市)。沖縄市で豊中市交流協会を設立(10月)
1994年 (平成 6年)	両市職員がアマチュア無線で交信(11月)

年	主な出来事
1995年 (平成 7年)	阪神・淡路大震災(1月17日)。沖縄市が豊中市を見舞い、義援金と支援物資を贈る(1月〜6月)
1995年 (平成 7年)	沖縄市職員8人を豊中市に派遣(2月10日〜)、沖縄市の市民団体がチャリティーイベントを開催するなど、市民からも義援金と支援物資を贈る(2月〜5月)
1995年 (平成 7年)	被災者を沖縄市に招待(3月・5月)
1995年 (平成 7年)	豊中まつりで山里青年会がエイサー演舞。沖縄のボーイスカウトが合同野営大会で豊中市を訪れ、震災復興を願うメッセージを教育長に手渡す(8月)
1996年 (平成 8年)	豊中市職員有志が震災支援のお礼に沖縄市に桜の苗木100本を寄贈(3月。翌1997年1月、倉敷ダムに植樹)
1996年 (平成 8年)	戦争平和展「命こそ宝(ヌチドゥタカラ)」(8月。豊中市)
1997年 (平成 9年)	憲法記念市民のつどい(5月。豊中市。照屋林助・玉城満対談)
1997年 (平成 9年)	豊中まつり“沖縄がやってくる”(8月。以降、毎年沖縄文化を紹介)
1998年 (平成10年)	両市の少年サッカーチームが沖縄市で親善試合(3月。以降、毎年相互に訪問)
1998年 (平成10年)	豊中まつりに沖縄市少年少女合唱団が出演、豊中ローズサウンドフェスティバル開催(8月。翌1999年から名称を「豊中ピースフルラブ・ロックフェスティバル」に。2022年まで継続)
1999年 (平成11年)	【提携25周年】憲法記念市民のつどい(5月。豊中市。知名定男出演)、ピースフルラブ・ロックフェスティバルに豊中のコンテスト優勝バンドが初出場(7月)
1999年 (平成11年)	豊中まつりで沖縄市あしびな一歌舞団が公演(7月)
2001年 (平成13年)	豊中市・豊中市職員組合が沖縄市に台風16号被害の見舞金を贈る(9月・10月)
2004年 (平成16年)	【提携30周年】沖縄市平和資料展巡回展、豊中まつりで高原青年会がエイサー演舞、交流のあゆみ写真展、豊中・沖縄いちゃりばちょうでー会設立(8月。豊中市)
2004年 (平成16年)	中学生の絵画・写真の交換展示会(11月。両市)
2008年 (平成20年)	エイサーナイトに豊中エイサー豊優会が出演(7月。沖縄市)
2009年 (平成21年)	【提携35周年】平和月間パネル展・沖縄市職員による講演会(7月・8月。豊中市)
2012年 (平成24年)	豊中市キャラクター・マチカネくんが沖縄市へ(7月)
2013年 (平成25年)	沖縄市が豊中市にエイサーの絵本を寄贈(8月。翌2014年6月にも)
2014年 (平成26年)	【提携40周年】小学生テレビ会議(4月〜6月・10月〜12月)、中学生平和大使交流(7月・9月)
2014年 (平成26年)	コザ豊中会結成。豊中まつりに東青年会が出演・前夜祭で道ジュネーを披露、沖縄市市民ミュージカル「コザ物語」を県外初公演、市民交流ツアー(8月)
2014年 (平成26年)	豊中市のコミュニティーFM放送局・FM千里が新番組「沖縄へいこう」開始(10月)
2014年 (平成26年)	市民交流ツアー・記念式典・市民大交流会(11月。沖縄市)
2014年 (平成26年)	沖縄市文化祭に豊中市美術協会が出展。全国高等学校ラグビーフットボール大会に沖縄市・コザ高校が出場。豊中市内で公開練習、豊中市民応援団が大会で声援を送る(12月)
2015年 (平成27年)	沖縄市産業まつりに豊中市PRブース出展(1月。以降、継続的に参加)。豊中市少年少女サッカー連盟主催大会に沖縄市選抜チームが出場、沖縄市文化祭に豊中市文化芸術連盟の天羽会と豊中市合唱協会が出演(1月・2月)
2018年 (平成30年)	特定非営利活動法人とよなかおきなわ応援団設立(4月)
2018年 (平成30年)	全国夏の高校野球第100回大会を記念し少年野球親善交流試合を開催(8月。豊中市)
2019年 (平成31年)	【提携45周年】琉球ゴールデンキングスが豊中市の小・中学生にバスケットボール教室を実施(4月)
2019年 (平成31年)	とよなかおきなわ応援団が少年の像「合奏」を再整備(11月)
2022年 (令和 4年)	兄弟都市交流オンライン対談(3月)
2022年 (令和 4年)	両市の青年会議所がバスケットボールU-15交流試合を開催(11月。沖縄市)
2023年 (令和 5年)	兄弟都市交流オンライン講演・ワークショップ(2月)
2024年 (令和 6年)	【提携50周年】記念式典(11月。豊中市)、ほか記念事業を実施

主な参考文献

コザ市報／広報おきなわ／広報とよなか／大山朝常「大山朝常のあしあと」1977年／竹内義治「激動の地方自治 ある市長の戦後史」1986年／島岡三郎「縁の下の力持」1987年／豊中市「豊中市市制施行50周年記念事業記録報告書」1987年／大山朝常「愛ひとすじに大山光伝」(改訂版)1991年／豊中市政研究所「TOYONAKAビジョン22 vol.10」2007年(豊中まつりの刷新と運営を通して)／沖縄市・談笑会編「談笑 第15号」2011年(豊中市に地方行政を学ぶ)／豊中市「豊中市・沖縄市兄弟都市提携40周年事業報告書」2015年／公益財団法人沖縄こどもの国「公益財団法人沖縄こどもの国 45年の歩み」2018年／沖縄市「沖縄市史 第5巻戦争編 冊子版」2019年

おわりに ～未来への提言～



たくさんの方々のご尽力・ご協力によって、本誌を刊行することができました。心から厚く御礼申し上げます。

刊行にあたり、半世紀にもわたる交流の歴史を振り返り、多くの皆さまに交流への思いを語っていただきました。本誌では詳しく紹介しきれなかった取り組みや、功労者の方々の声も多くございます。その一つがこの50年を彩る貴重な「兄弟都市交流」に他なりません。交流がこれほど長く続いてきたのも、その時々皆さまが自発的に連携・協力して取り組んでこられたからです。そして、その取り組みに共感し、自らも担い手となって参加してくださった両市民の皆さまが育んできたのではないのでしょうか。

およそ1,200キロ離れた豊中市と沖縄市。もちろん人々の暮らしも歩んできた歴史も違います。統治の変遷、戦争体験、その後の復興や地域社会の状況も大きく異なります。こんなにも異なるヤマト（本土）と琉球（沖縄）の遠く離れた自治体が出会いました。それは偶然のきっかけが生んだ出会いでしたが、この出会いが交流へとつながり発展したのは、過去を振り返り、現在を見つめ、未来を確かなものにしていきたいという熱い思いの共有があったからだと思います。改めて振り返ると、両市の先人たちが紡いできた兄弟都市交流、それは「霊石」と「豊中学校」が象徴しているとおろ、平和を希求する強い思いとそれを確かな絆へとつなげていく取り組みから始まりました。こうして生まれ育まれてきた交流は、50年の間に多世代に、そして平和・スポーツ・文化・教育など多分野に広がっていったことで、遠く離れていても、環境が大きく異なっても、互いに思いやることができる強固な絆へと発展していきました。

「いちゃりばちよーでー」。「一度でも出会えば、それはもう兄弟のようなものだ」という意味の沖縄の黄金言葉（くがにことば）です。兄弟都市の由来ともいわれているこの言葉は、兄弟都市交流の歴史の中でもさまざまな場面で見るすることができます。1964年（昭和39年）にコザ市の大山朝常市長と豊中市の竹内義治助役が出会い、豊中学校や職員野球交流で両市職員が出会い、平和交流やスポーツ交流で若い世代が出会い、豊中まつりやピースフルラブ・ロックフェスティバルなどで多くの市民が出会ってきました。そして兄弟となって新たな交流へと発展していったのです。

兄弟都市提携50周年のテーマは「出会えば兄弟（いちゃりばちよーでー）～友好の絆を次世代へ～」です。50年という長い月日を経て、今後も兄弟都市の“つながり”は続いていきます。51年目はすぐそこです。新たな50年、そう100周年へと両市の歩みは始まっているのです。次の一歩を踏み出すために、「いちゃりばちよーでー」の言葉のとおり、新たな出会いを生み出し、次世代の交流へつないでいくことがこの50周年なのです。

多様な文化交流と共生をめざす取り組みから、平和で暮らしやすく活気に満ちた地域社会づくり、さらには、これからの本土と沖縄の望ましい関係づくりへと歩みを進めることができるのではないのでしょうか。この兄弟都市交流が、未来を担う子どもたちへ、お互いをいとしむ心を育みながら共に生きていく大切さを伝えていくことにつながることを願ってやみません。夢は大きく、歩みは一歩ずつ、これからも心が通い合う交流を共に取り組んでまいりましょう。

皆さま、本当にありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

豊中市 沖縄市



少年の像「合奏」